

一級河川求来里川河川改修工事に 伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

求来里平島遺跡D区
求来里名里遺跡A区1次調査区
金田遺跡1次調査区
金田遺跡3次調査区

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序 文

本書は、県教育委員会が平成14、15、16並びに18年度に大分県日田土木事務所の依頼を受けて実施した、一級河川求来里川河川改修工事に伴う、求来里平島遺跡、求来里名里遺跡並びに金田遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡のある日田市は大分県西部、九州のほぼ中央に位置しており、国指定史跡穴観音古墳をはじめ、旧石器時代から中世・近世にかけて数多くの遺跡が点在し、近世には九州の幕府領を支配する日田代官所が置かれ、政治・経済の中心地として栄えるなど、古い歴史と文化をもつ地域です。

今回調査した3遺跡は、日田盆地の東端を走る求来里川流域の遺跡群です。弥生時代から古墳時代・奈良時代の住居跡が検出され、求来里川流域に展開する集落の変遷を捉えることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に衷心から感謝申し上げます。

平成20年3月25日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 福 田 快 次

例 言

1. 本書は、日田市に所在する求来里平島遺跡、求来里名里遺跡、金田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一級河川求来里川河川改修工事に伴い、大分県日田土木事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 現地での写真撮影・遺構の実測は各調査員が担当した。
4. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については、調査員が担当したほか、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理作業員の多大な協力を得た。
5. 出土遺物ならびに図面写真などは、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田1977番地）において保管している。
6. 本書で使用する方位は、いずれも座標北である。座標傾については、世界測地系の数値を記している。
7. 本書の執筆は、第1章を原田昭一、第2・3章を原田昭一、第4章を松本康弘、第5章を田中裕介がそれぞれ担当した。
8. 本書の編集は、執筆者が協議して行った。

目 次

第1章 はじめに (原田昭一)	1
第1節 調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の体制	2
第2節 遺跡の立地と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第2章 求来里平島遺跡D区 (原田昭一)	5
第1節 調査の概要	5
第2節 遺構と遺物	5
第3節 まとめ	16
第3章 求来里名里遺跡A区1次調査区 (原田昭一)	17
第1節 調査の概要	17
第2節 遺構と遺物	17
第3節 まとめ	20
第4章 金田遺跡1次調査区 (松本康弘)	21
第1節 調査の概要	21
第2節 遺構と遺物	21
第3節 まとめ	66
第5章 金田遺跡3次調査区 (田中裕介)	67
第1節 調査の概要	67
第2節 遺構と遺物	67
第3節 まとめ	87

目 次

第 1 図	求来里川と発掘調査対象遺跡 (3/2,000) …… 1	第 35 図	金田遺跡 1 次調査区SH4実測図 (1/50) …… 26
第 2 図	遺跡分布図 (1/25,000を縮小) …… 4	第 36 図	金田遺跡 1 次調査区 SH4出土遺物実測図 (1/4) …… 27
第 3 図	求来里平島遺跡D区周辺地形図 (1/2,500) …… 5	第 37 図	金田遺跡 1 次調査区 SH4出土遺物実測図 (1/4) …… 28
第 4 図	求来里平島遺跡D区SH1実測図 (1/50) …… 6	第 38 図	金田遺跡 1 次調査区SH5実測図 (1/50) …… 29
第 5 図	求来里平島遺跡D区 SH1出土遺物実測図 (1/3) …… 6	第 39 図	金田遺跡 1 次調査区 SH5出土遺物実測図 (1/4) …… 30
第 6 図	求来里平島遺跡D区SH2実測図 (1/50) …… 6	第 40 図	金田遺跡 1 次調査区SH6実測図 (1/50) …… 31
第 7 図	求来里平島遺跡D区遺構配置図 (1/200) …… 7-8	第 41 図	金田遺跡 1 次調査区 SH6出土遺物実測図 (1/4) …… 31
第 8 図	求来里平島遺跡D区 SH2出土遺物実測図 (1/3) …… 9	第 42 図	金田遺跡 1 次調査区SH7実測図 (1/50) …… 32
第 9 図	求来里平島遺跡D区SH3実測図 (1/50) …… 9	第 43 図	金田遺跡 1 次調査区SH7出土遺物実測図 …… 32
第 10 図	求来里平島遺跡D区 SH3カマド実測図 (1/20) …… 10	第 44 図	金田遺跡 1 次調査区SH8実測図 (1/50) …… 33
第 11 図	求来里平島遺跡D区 SH3出土遺物実測図 (1/3) …… 10	第 45 図	金田遺跡 1 次調査区 SH8出土遺物実測図 (1/4) …… 34
第 12 図	求来里平島遺跡D区SH4実測図 (1/50) …… 10	第 46 図	金田遺跡 1 次調査区SH9実測図 (1/50) …… 35
第 13 図	求来里平島遺跡D区SH5実測図 (1/50) …… 11	第 47 図	金田遺跡 1 次調査区 SH9出土遺物実測図 (1/4) …… 35
第 14 図	求来里平島遺跡D区SH6実測図 (1/50) …… 12	第 48 図	金田遺跡 1 次調査区SH10実測図 (1/50) …… 36
第 15 図	求来里平島遺跡D区 SH6カマド実測図 (1/20) …… 12	第 49 図	金田遺跡 1 次調査区 SH10出土遺物実測図 (1/4) …… 37
第 16 図	求来里平島遺跡D区 SH6出土遺物実測図 (1/3) …… 13	第 50 図	金田遺跡 1 次調査区SH10出土遺物実測図 …… 38
第 17 図	求来里平島遺跡D区 SH7実測図 (1/50) …… 13	第 51 図	金田遺跡 1 次調査区SH11実測図 (1/50) …… 39
第 18 図	求来里平島遺跡D区 SX2実測図 (1/40) …… 14	第 52 図	金田遺跡 1 次調査区 SH11出土遺物実測図 (1/4) …… 39
第 19 図	求来里平島遺跡D区 出土遺物実測図 (1/3) …… 14	第 53 図	金田遺跡 1 次調査区SH12実測図 (1/50) …… 39
第 20 図	求来里平島遺跡D区 出土遺物実測図 …… 15	第 54 図	金田遺跡 1 次調査区 SH12出土遺物実測図 (1/4) …… 40
第 21 図	求来里名里遺跡 A区 1 次調査区位置図 (1/3,000) …… 17	第 55 図	金田遺跡 1 次調査区SH13実測図 (1/50) …… 40
第 22 図	求来里名里遺跡 A区 1 次調査区遺構配置図 (1/200) …… 18	第 56 図	金田遺跡 1 次調査区 SH13出土遺物実測図 (1/4) …… 41
第 23 図	求来里名里遺跡 A区 1 次調査区SK100実測図 (1/20) …… 19	第 57 図	金田遺跡 1 次調査区SH14実測図 (1/50) …… 41
第 24 図	求来里名里遺跡 A区 1 次調査区SK105実測図 (1/20) …… 19	第 58 図	金田遺跡 1 次調査区SH15実測図 (1/50) …… 41
第 25 図	求来里名里遺跡 A区 1 次調査区SK149実測図 (1/20) …… 19	第 59 図	金田遺跡 1 次調査区 SH15出土遺物実測図 (1/4) …… 41
第 26 図	求来里名里遺跡A区 1 次調査区 出土遺物実測図 …… 20	第 60 図	金田遺跡 1 次調査区SH16実測図 (1/50) …… 42
第 27 図	金田遺跡周辺地形図 (1/1,500) …… 21	第 61 図	金田遺跡 1 次調査区SH16出土遺物実測図 …… 43
第 28 図	金田遺跡 1 次調査区SH1実測図 (1/50) …… 22	第 62 図	金田遺跡 1 次調査区SH17実測図 (1/50) …… 44
第 29 図	金田遺跡 1 次調査区 SH1出土遺物実測図 (1/4) …… 22	第 63 図	金田遺跡 1 次調査区 SH17出土遺物実測図 (1/4) …… 45
第 30 図	金田遺跡 1 次調査区遺構配置図 (1/50) 23-24	第 64 図	金田遺跡 1 次調査区SH18実測図 (1/50) …… 45
第 31 図	金田遺跡 1 次調査区SH2実測図 (1/50) …… 25	第 65 図	金田遺跡 1 次調査区 SH18出土遺物実測図 (1/4) …… 46
第 32 図	金田遺跡 1 次調査区SH3実測図 (1/50) …… 25	第 66 図	金田遺跡 1 次調査区SH19実測図 (1/50) …… 46
第 33 図	金田遺跡 1 次調査区 SH2出土遺物実測図 (1/4) …… 26	第 67 図	金田遺跡 1 次調査区SH19出土遺物実測図 …… 47
第 34 図	金田遺跡 1 次調査区 SH3出土遺物実測図 (1/4) …… 26	第 68 図	金田遺跡 1 次調査区SH20実測図 (1/50) …… 48
		第 69 図	金田遺跡 1 次調査区 SH20出土遺物実測図 (1/4) …… 49
		第 70 図	金田遺跡 1 次調査区SH21実測図 (1/50) …… 49
		第 71 図	金田遺跡 1 次調査区SH22実測図 (1/50) …… 50
		第 72 図	金田遺跡 1 次調査区 SH22出土遺物実測図 (1/4) …… 50

第73图	金田遺跡1次調査区SH23実測図 (1/50)---51	第113图	金田遺跡3次調査区 A地区遺構配置図 (1/200).....70
第74图	金田遺跡1次調査区 SH23出土遺物実測図 (1/4).....51	第114图	金田遺跡3次調査区 A地区出土遺物実測図 (1/4).....70
第75图	金田遺跡1次調査区SH24実測図 (1/50)---52	第115图	金田遺跡3次調査区 B地区遺構配置図 (1/200).....71
第76图	金田遺跡1次調査区 SH24出土遺物実測図 (1/4).....52	第116图	金田遺跡3次調査区 B地区SH201実測図 (1/50).....71
第77图	金田遺跡1次調査区SH25実測図 (1/50)---53	第117图	金田遺跡3次調査区 B地区SH201出土遺物実測図 (1/4).....72
第78图	金田遺跡1次調査区SH26実測図 (1/50)---53	第118图	金田遺跡3次調査区 B地区SH202実測図 (1/50).....72
第79图	金田遺跡1次調査区 SH26出土遺物実測図 (1/4).....53	第119图	金田遺跡3次調査区 B地区SH202出土遺物実測図 (1/4).....72
第80图	金田遺跡1次調査区 SH27出土遺物実測図 (1/4).....54	第120图	金田遺跡3次調査区 B地区SH204実測図 (1/50).....73
第81图	金田遺跡1次調査区SH27実測図 (1/50)---54	第121图	金田遺跡3次調査区 B地区SH204出土遺物実測図 (1/4).....73
第82图	金田遺跡1次調査区SH28実測図 (1/50)---55	第122图	金田遺跡3次調査区 B地区SH206-SH207実測図 (1/50).....74
第83图	金田遺跡1次調査区 SH28出土遺物実測図 (1/4).....55	第123图	金田遺跡3次調査区 B地区SH206出土遺物実測図 (1/4).....74
第84图	金田遺跡1次調査区SH29実測図 (1/50)---56	第124图	金田遺跡3次調査区 B地区SH207出土遺物実測図 (1/4).....74
第85图	金田遺跡1次調査区 SH29出土遺物実測図 (1/4).....56	第125图	金田遺跡3次調査区 B地区SH209実測図 (1/50).....75
第86图	金田遺跡1次調査区SH30実測図 (1/50)---56	第126图	金田遺跡3次調査区 B地区SH209出土遺物実測図 (1/4).....75
第87图	金田遺跡1次調査区SH31実測図 (1/50)---57	第127图	金田遺跡3次調査区 B地区SH210実測図 (1/50).....76
第88图	金田遺跡1次調査区 SH31出土遺物実測図 (1/4).....57	第128图	金田遺跡3次調査区 B地区SH210出土遺物実測図 (1/4).....76
第89图	金田遺跡1次調査区 SH32出土遺物実測図 (1/4).....58	第129图	金田遺跡3次調査区 B地区SH212実測図 (1/50).....77
第90图	金田遺跡1次調査区SH32実測図 (1/50)---58	第130图	金田遺跡3次調査区 B地区SH212床下実測図 (1/50).....77
第91图	金田遺跡1次調査区SH33実測図 (1/50)---58	第131图	金田遺跡3次調査区 B地区SH212出土遺物実測図.....78
第92图	金田遺跡1次調査区SH34実測図 (1/50)---59	第132图	金田遺跡3次調査区 B地区SH213実測図 (1/50).....79
第93图	金田遺跡1次調査区 SH33出土遺物実測図 (1/4).....59	第133图	金田遺跡3次調査区 B地区SH213出土遺物実測図.....80
第94图	金田遺跡1次調査区SH35実測図 (1/50)---59	第134图	金田遺跡3次調査区 B地区SH214実測図 (1/50).....81
第95图	金田遺跡1次調査区 SH35出土遺物実測図 (1/4).....60	第135图	金田遺跡3次調査区 B地区SH214出土遺物実測図 (1/4).....81
第96图	金田遺跡1次調査区SB1実測図 (1/80)---60	第136图	金田遺跡3次調査区 B地区SH215実測図 (1/50).....82
第97图	金田遺跡1次調査区 SB1出土遺物実測図 (1/4).....60	第137图	金田遺跡3次調査区 B地区SH215出土遺物実測図 (1/4).....82
第98图	金田遺跡1次調査区SB2実測図 (1/80)---61	第138图	金田遺跡3次調査区 B地区SH218-SH255実測図 (1/80).....83
第99图	金田遺跡1次調査区 SB2柱穴1実測図 (1/20).....61	第139图	金田遺跡3次調査区 B地区SH218出土遺物実測図.....84
第100图	金田遺跡1次調査区 SB2柱穴1出土遺物実測図 (1/4).....61	第140图	金田遺跡3次調査区 B地区SH239実測図 (1/50).....84
第101图	金田遺跡1次調査区 SB2柱穴2実測図 (1/20).....62		
第102图	金田遺跡1次調査区 SB2柱穴2出土遺物実測図 (1/4).....62		
第103图	金田遺跡1次調査区SB3実測図 (1/80)---62		
第104图	金田遺跡1次調査区SD1実測図 (1/80)---63		
第105图	金田遺跡1次調査区 SK2出土遺物実測図 (1/4).....63		
第106图	金田遺跡1次調査区SK1実測図 (1/20)---63		
第107图	金田遺跡1次調査区SK2実測図 (1/20)---63		
第108图	金田遺跡1次調査区SK3実測図 (1/20)---63		
第109图	金田遺跡1次調査区出土遺物実測図 (1/4)---64		
第110图	金田遺跡1次調査区出土遺物実測図 (1/4)---65		
第111图	金田遺跡周辺地形図 (1/1,500).....67		
第112图	金田遺跡全体図 (1/500).....68		

第141図	金田遺跡3次調査区 B地区SH1239出土遺物実測図 (1/4) ……	84
第142図	金田遺跡3次調査区 B地区SH255出土遺物実測図 (1/4) ……	85
第143図	金田遺跡3次調査区 B地区SK208実測図 (1/40) ……	85
第144図	金田遺跡3次調査区 B地区SK208出土遺物実測図 (1/4) ……	85
第145図	金田遺跡3次調査区 B地区SP211実測図 (1/40) ……	85
第146図	金田遺跡3次調査区 B地区SP211出土遺物実測図 (1/4) ……	85

第147図	金田遺跡3次調査区 B地区SK216実測図 (1/40) ……	86
第148図	金田遺跡3次調査区 B地区SK217実測図 (1/40) ……	86
第149図	金田遺跡3次調査区 B地区SK217出土遺物実測図 (1/3) ……	86
第150図	金田遺跡3次調査区 B地区SK226実測図 (1/40) ……	86
第151図	金田遺跡3次調査区 B地区ビット出土遺物実測図 (1/4・1/3) ……	86
第152図	金田遺跡3次調査区 B地区出土遺物実測図 (1/3) ……	87

写真図版目次

写真図版1 (求来里平島遺跡D区)	求来里平島遺跡D区遠景 (南から) 求来里平島遺跡D区全景 ……	90
写真図版2 (求来里平島遺跡D区)	求来里平島遺跡D区SH1 求来里平島遺跡D区SH2 求来里平島遺跡D区SH3 求来里平島遺跡D区SH3カマド周辺① 求来里平島遺跡D区SH3カマド周辺② 求来里平島遺跡D区SH3カマド周辺③ 求来里平島遺跡D区SH4 求来里平島遺跡D区SH5 ……	91
写真図版3 (求来里平島遺跡D区)	求来里里里遺跡A区1次調査区 求来里平島遺跡D区出土遺物 SH3出土遺物、SH6出土遺物 求来里里里遺跡調査A区1次調査区遠景 (西から) 求来里里里遺跡調査A区1次調査区全景 ……	92
写真図版4 (金田遺跡1次調査区)	金田遺跡1次調査区SH1 金田遺跡1次調査区SH4 金田遺跡1次調査区SH5 金田遺跡1次調査区SH6 金田遺跡1次調査区SH8 ……	93
写真図版5 (金田遺跡1次調査区)	金田遺跡1次調査区SH9 金田遺跡1次調査区SH10 金田遺跡1次調査区SH11 金田遺跡1次調査区SH17 金田遺跡1次調査区SH21 ……	94
写真図版6 (金田遺跡1次調査区)	金田遺跡1次調査区SH4・SH8・SH9出土遺物 ……	95
写真図版7 (金田遺跡1次調査区)	金田遺跡1次調査区SH10・SH11・SH16・SH17 出土遺物 ……	96
写真図版8 (金田遺跡1次調査区)	金田遺跡1次調査区SH18・SH19・SH20・SH22 ・SH23・SH27・SH29・SH33出土遺物 ……	97

写真図版9 (金田遺跡1次調査区)	金田遺跡1次調査区SB2柱穴2調査区出土遺物 ……	98
写真図版10 (金田遺跡3次調査区B地区)	SH201出土状況・SH202出土状況 ……	99
写真図版11 (金田遺跡3次調査区B地区)	SH204(南から)・SH204-5・SH204-1 SH206・SH207・SH206-1出土状況 ……	100
写真図版12 (金田遺跡3次調査区B地区)	SH207・SH209・SH209出土状況 SH209完掘状態 ……	101
写真図版13 (金田遺跡3次調査区B地区)	SH210当初の出土状況 SH210 2回目のかまど検出状況 SH210 2回目のかまど時の出土状況 SH210かまど ……	102
写真図版14 (金田遺跡3次調査区B地区)	SH210完掘状態・SH212出土状況 SH212完掘状態 ……	103
写真図版15 (金田遺跡3次調査区B地区)	SH212かまど出土状況(6)・SH213出土状況 SH213出土状況細部 ……	104
写真図版16 (金田遺跡3次調査区B地区)	SH214・SH215 ……	105
写真図版17 (金田遺跡3次調査区B地区)	SH239・SK208・SK226 ……	106
写真図版18 (金田遺跡3次調査区A・B地区)	金田遺跡3次調査区A・B地区出土遺物 ……	107
写真図版19 (金田遺跡3次調査区B地区)	金田遺跡3次調査区B地区出土遺物 ……	108
写真図版20 (金田遺跡3次調査区B地区)	金田遺跡3次調査区B地区出土遺物 ……	109
写真図版21 (金田遺跡3次調査区B地区)	金田遺跡3次調査区B地区出土遺物 ……	110

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

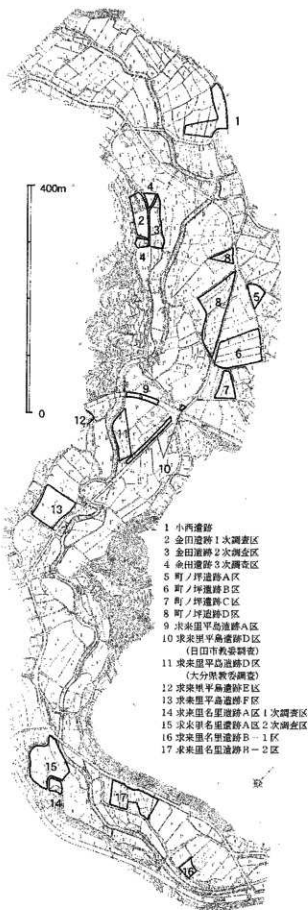
1 調査に至る経過

一級河川求来里川は、日田市東部の有田川の支流であり、延長4.3kmの河川である。大石峠に源を発する求来里川は幅幅が狭く、台地や丘陵の間を縫うように蛇行しながら西に流れ、狭い河川流域沿いは谷地形を呈している。現在この地域ではこうした地形を利用して、主に沖積面では水田耕作を、台地上では日田特産の西瓜や白菜などの畑作栽培が行われている。

この蛇行して流れる求来里川では平成7、9、13年に度重なる洪水が起きたため、地元住民や環境団体と協議会を設け、自然環境の保全と調和を図るため生物の生息・生育環境に配慮した河川整備を推進し、安心して生活できる県土づくりのためさらなる治水安全度の向上を目指し、河川改修をを行うものであった。

2 調査の経過

発掘調査は、平成14年度にまず、求来里平島遺跡D区の調査を行った。平成15年度には金田遺跡1次調査区の発掘調査を実施し、平成16年度には、金田遺跡3次調査区の発掘調査に取りかかり、最終年度の平成18年度には求来里名里遺跡A区1次調査区の発掘調査を行った。



第1図 求来里川と発掘調査対象遺跡 (3/2,000)

3 調査の体制

【平成14年度】

調査主体 大分県教育委員会

大分県教育委員会

教 育 長 石川成一

文化課課長 岩尾康晴

参事兼課長補佐 麻生祐治

参事兼課長補佐 清水宗昭

調 査 員 高橋信武 (発掘調査一般事業担当主幹)

中斐寿義 (発掘調査一般事業担当副主幹、求来里平島遺跡D地点調査)

五十川雄也 (発掘調査一般事業担当輔佐、求来里平島遺跡D地点調査)

【平成15年度】

調査主体 大分県教育委員会

大分県教育委員会

教 育 長 深田秀生

文化課課長 今永一成

参事兼課長補佐 麻生祐治

参事兼課長補佐 清水宗昭

調 査 員 栗田勝弘 (発掘調査一般事業担当主幹)

松本康弘 (発掘調査一般事業担当主査、金田遺跡1次調査区調査)

【平成16年度】

調査主体 大分県教育委員会

大分県教育委員会

教 育 長 深田秀生

埋蔵文化財センター所長 伊藤正行

次 長 兼 総 務 課 長 益永孝則

調 査 員 栗田勝弘 (発掘調査一般事業担当主幹)

田中裕介 (調査第二課資料管理担当副主幹、

金田遺跡1次調査区調査)

松浦憲治 (調査第二課受託事業担当副主幹、

金田遺跡1次調査区調査)

【平成18年度】

調査主体 大分県教育委員会

大分県教育委員会

教 育 長 深田秀生

埋蔵文化財センター所長 伊藤正行

次 長 兼 総 務 課 長 益永孝則

調 査 員 栗田勝弘 (調査第一課課長)

中斐寿義 (調査第一課一般事業担当主幹、求来里名甲遺跡A区1次調査区調査)

第2節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

本書で報告する遺跡群は日田市に存在する。日田市は、大分県北西部に位置する市であり、大分県に位置するが、筑後川水系にあるため歴史的に福岡県筑後・筑前地方とのつながりが強く、この地域の遺跡や遺物の特徴は福岡県に近い特徴をもつ。周囲を山に囲まれた典型的な盆地であり、多くの河川が流れ込み「水郷」と呼ばれている。日田盆地周囲の山地は、標高約1,000m、旧前津江、中津江、上津江村の位置する山間部では、標高1,200メートルを測る。日田盆地に流れ込む多くの河川は、三隈川（筑後川）に合流し、これらの河川は、昔から日田周囲の地域で伐採された木材を筑後川下流の都市まで輸送していたため、林業地域としての日田には欠かせないものであった。

今回、河川改修の対象となった一級河川求来甲川は、日田市東部の有田川の支流であり、延長4.3kmの河川である。大石峠に源を発する求来甲川は川幅が狭く、台地や丘陵の間隙を縫うように蛇行しながら西に流れ、狭い河川流域沿いは谷地形を呈している。現在、この地域ではこうした地形を利用して、主に沖積面では水田耕作を、台地上では日田特産の西瓜や白菜などの畑作栽培が行われている。

2 歴史的環境

遺跡の所在する求来甲地区は、近世には求来甲村と呼ばれており、古代律令下においては日田郡五郷のうちの一つで、『豊後風土記』にみえる鞍編郷に属していたと考えられている。求来甲地区の川下には『豊後国志』に伝える白鳳9年（社伝は貞観元年）に創祀の元大波羅八幡宮が鎮座している。この元大波羅八幡宮の前には『八幡宇佐宮御神領大鏡』にみられる「会所道」と考えられる道が残り、古くから珠珠へと抜ける主要道としての役割を果たしていた。

近年、求来甲川下流域では高速道路や市道建設、河川改修、木材加工団地、ほ場整備などに伴う大規模な発掘調査が行われ、多くの遺跡の存在が確認でき、また、良好な調査成果が得られている。平成15・16年度に行われた日田市教育委員会の求来甲平島遺跡の調査では、古墳時代中期のカマド初期の竪穴住居跡群が検出されている。町ノ坪遺跡B区では、古墳時代中期～後期の竪穴住居跡群が検出されている。平成16年度に行われた日田市教育委員会の金田遺跡の調査では弥生時代中期～終末期の竪穴住居跡群が検出されている。小西遺跡では弥生時代中期～後期の竪穴住居跡群が検出されている。町ノ坪遺跡D区では弥生時代中期～古墳時代中期の竪穴住居跡群のほか、縄文時代後期の良好な包含層が確認されている。

これらの成果から、弥生時代中～後期および古墳時代中期～後期を中心に、古代・中世の集落が継続して営まれていることがわかる。このほかにも、馬形遺跡において旧石器時代の三稜尖頭器が出土しており、町ノ坪遺跡においては縄文時代後期の良好な包含層が確認されている。

求来甲地区周辺には、縄文時代早期の集石遺構が発見された石ヶ迫遺跡や縄文時代晩期の埋蔵が発見された森ノ元遺跡、落し穴遺構が確認された長迫遺跡・尾漕遺跡・有田塚原遺跡などが縄文時代の遺跡として注目される。

弥生時代の遺跡としては、大型建物を含む弥生時代中期～後期の集落跡が検出された祇園原遺跡や弥生時代後期の濃集落跡や大型成人用土器が検出された平島遺跡が注目される。

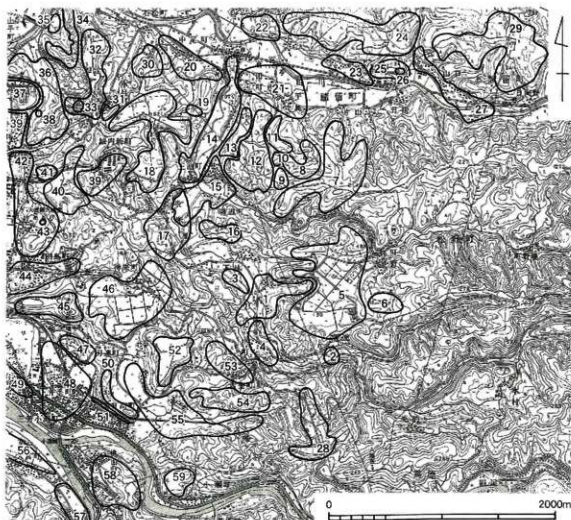
また、古墳時代には、遺跡が多く確認されている。尾漕1・2号墳、塔ノ木2号墳、有田塚ヶ原1号墳など中期～後期の古墳や、大迫遺跡の石蓋土壌墓、元宮遺跡の箱式石積墓などの墳墓、平島横穴墓群などが調査されている。集落では、長迫遺跡において100基をこえる竪穴住居跡や掘立柱建物などで構成される後期の大規模集落が発掘されている。

古代の遺跡例では、平安時代前期の土壇墓が検出された馬形遺跡や奈良時代の鍛冶遺構が検出されたクビリ遺跡は特筆すべきものであろうが、古墳時代後期に比較すれば、遺跡の密度は低くなっている。

中世の遺跡例には、310枚の六道銭が埋納されていた土塚(14世紀後半～15世紀中葉)が確認された尾瀬平安時代後期の土塚墓が確認された森ノ元遺跡などがある。

【参考文献】

- 土居和幸「求来里平島遺跡」H田市教育委員会 2002
 上居和幸「町ノ坪遺跡A～C区」『平成15年度 〇田市埋蔵文化財年報』〇田市教育委員会 2004
 渡邊隆行「町ノ坪遺跡B区」『平成16年度 〇田市埋蔵文化財年報』H田市教育委員会 2005
 首杉竜太「金田遺跡」『平成16年度 H田市埋蔵文化財年報』H田市教育委員会 2005
 若杉竜太「小西遺跡・町ノ坪遺跡D区」『平成16年度 H田市埋蔵文化財年報』〇田市教育委員会 2005
 今田秀樹「町ノ坪遺跡D区」『平成17年度 H田市埋蔵文化財年報』H田市教育委員会 2007
 若杉竜太「求来里平島遺跡E・F区」『平成17年度 H田市埋蔵文化財年報』H田市教育委員会 2007
 行時佳子「求来里平島遺跡Ⅱ」〇田市教育委員会 2007



第2図 遺跡分布図 (国土地理院「日田」1/25,000を縮小)

- 1 求来里平島遺跡 2 求来里名里遺跡 3 金田遺跡 4 若来遺跡 5 町野原遺跡 6 奥ノ迫遺跡 7 片山原遺跡 8 平島横穴群 9 有田塚ヶ原遺跡 10 クビリ遺跡 11 八田遺跡 12 狐迫遺跡 13 長迫遺跡 14 尾瀬遺跡 15 森ノ元遺跡 16 白迫遺跡 17 馬形遺跡 18 中尾原遺跡 19 大迫遺跡 20 釜ノ下遺跡 21 平島遺跡 22 ゴス岡遺跡 23 世尊寺遺跡 24 須ノ原遺跡 25 城山遺跡 26 城山古墳 27 山ノ口遺跡 28 高尾原遺跡 29 ハル遺跡 30 茨園遺跡 31 水戸横穴群 32 佐ノ原遺跡 33 塚城 34 月隈城跡 35 夕田遺跡 36 大蔵古城跡 37 慈徳山瀬戸川遺跡 38 丸山古墳 39 湯尻遺跡 40 赤迫遺跡 41 塚原遺跡 42 大波羅遺跡 43 粟師堂山古墳 44 会所宮遺跡 45 会所山遺跡 46 元宮遺跡 47 法恩寺古墳群 48 上井出遺跡 49 柳ノ木遺跡 50 平松遺跡 51 東ヶ横穴群 52 東ヶ原遺跡 53 古金遺跡 54 榊手遺跡 55 日高遺跡 56 大宮遺跡 57 手崎遺跡 58 大部遺跡 59 小ヶ瀬遺跡

第2章 求来里平島遺跡D区

第1節 調査の概要

日田市大字求来里平島に所在する求来里平島遺跡D区は、日山盆地東部の求来里川流域の谷状沖積地の微高地に位置する。約500m²の範囲において平成14年12月5日から平成15年2月5日まで2ヶ月間の発掘調査が行なわれた。

発掘調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡6基をはじめ土坑や溝状遺構が検出されている。包含層中の出土遺物は古墳時代の須恵器・土師器が多く、同時代の集落の一部であることが明らかとなった。

第2節 遺構と遺物

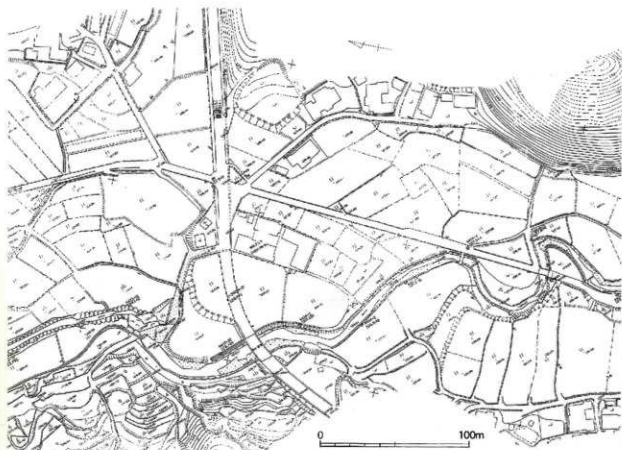
竪穴遺構

SH1 (第4図)

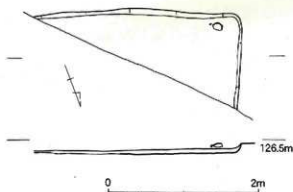
調査区の中央付近において確認された方形竪穴住居であり、残存する深さは10～15cm程度である。南西コーナー部分のみ調査区内に位置し、そのほとんどが調査区外に延びる。調査区内部分からは主柱穴は検出されていない。

SH1出土遺物 (第5図)

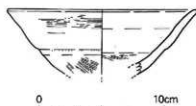
出土遺物は少なく、図化できるものは1点のみであった。第5図は土師器高坪の坏部片である。



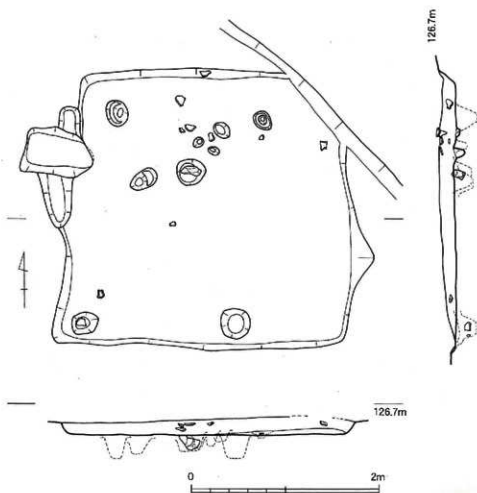
第3図 求来里平島遺跡D区周辺地形図 (1/2,500)



第4図 求来里平島遺跡D区SH1実測図 (1/50)



第5図 求来里平島遺跡D区SH11出土遺物実測図 (1/3)



第6図 求来里平島遺跡D区SH2実測図 (1/50)

SH2 (第6図)

調査区の中央付近において確認された東西3.0m、南北3.0mを測る方形竪穴住居であり、北東端は調査区外に延びる。残存する深さは10～15cm程度である。床面からピットが6基検出されているが、主柱穴と判断できる明確なピットは明らかでない。出土遺物は少なく、中央よりやや北側に土器片のまとまりがみられたが、図化できるものは1点のみであった。



第7图 求来里平岛遗址D区遗址配置图(1/200)

SH2出土遺物 (第8図)

土師器小壺の破片である。胎土には石英粒を含み、精選されており、明るい橙色を呈する。摩滅により器面調整は明らかでないが、体部内面に粘土紐の巻き上げ痕が確認できる。

SH3 (第9・10図)

調査区の中央付近において確認された竪穴住居であり、北東端は調査区外に延びる。明確な住居プランは確認できないがカマド跡が残存していたため、竪穴住居と判断した。カマド及びその西側部分から比較的多くの土器片が出土している。主柱穴と判断できる明確なピットは明らかでない。

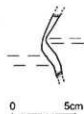
カマドは袖石が抜かれており、袖石の位置にピットが残る。床面をわずかに高ませており、埋土中に焼土が確認できる。支脚は扁平な礎を利用しており、原位置を保っていた。このカマド付近を中心に西側に比較的多くまとまった遺物が出土しているため、カマド祭祀に伴う上層片も存在するものと思える。

SH3出土遺物 (第11図)

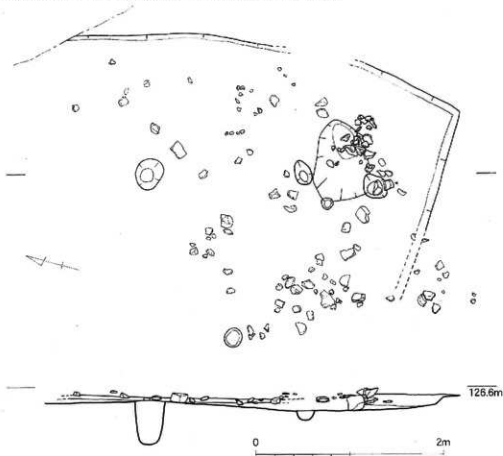
図化できるものは3点のみであった。いずれも土師器碗であり、1はカマド付近から出土している。1は丸底をもち、1縁部をわずかに外反させている。2は丸底であるが、底面をわずかに平らに仕上げている。口唇部に面をもつ。内外面にスガが付着している。3の外面にはわずかにスガが付着している。

SH4 (第12図)

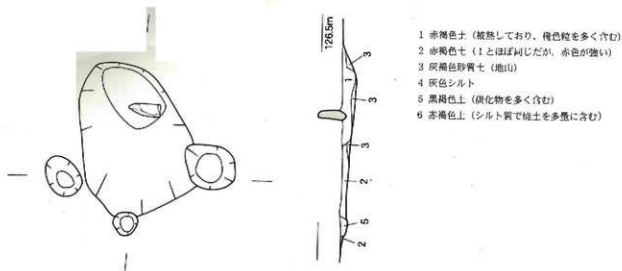
調査区の北西隅において確認された南北4.1mを測る方形竪穴住居であり、北東側はSH5と切り合いをもち、西側は調査区外に延びる。残存する深さは10cmに満たず、ほとんど削平されている。主柱穴と判断できるピットは2ヶ所に確認でき、削平部分にこれに対応するピットが存在したものと考えられる。住居跡床面は地山が露出しているところもみられ、凹内が確認できるところもあり、確認された主柱穴がそれぞれ13cm、22cmを測ることから、貼り床部分の多くも削平されていると考えられる。出土遺物はみられなかった。



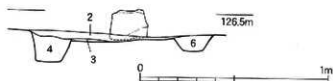
第8図 求来里平島遺跡D区
SH2出土遺物実測図 (1/3)



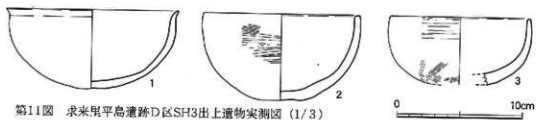
第9図 求来里平島遺跡D区SH4実測図 (1/50)



- 1 赤褐色土（凝結しており、褐色粒を多く含む）
- 2 赤褐色土（1とほぼ同じだが、赤色が強い）
- 3 灰褐色砂質土（地山）
- 4 灰色シルト
- 5 黒褐色土（炭化物を多く含む）
- 6 赤褐色土（シルト質で粘土を多量に含む）



第10図 求来里平島遺跡D区SH3カマド実測図 (1/20)



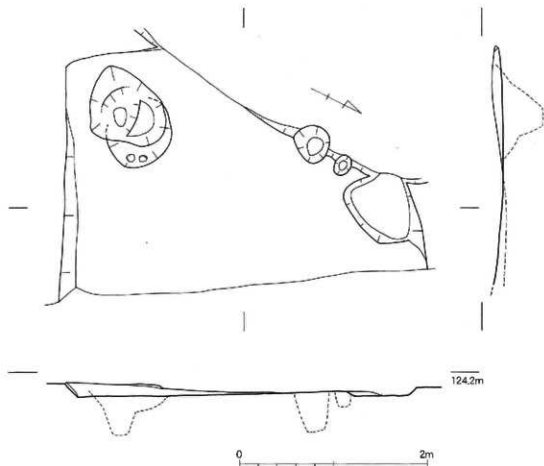
第11図 求来里平島遺跡D区SH3出土遺物実測図 (1/3)



第12図 求来里平島遺跡D区SH4実測図 (1/50)

SH5 (第13図)

調査区の北西隅において確認された南北3.8mを測る方形竪穴住居であり、北西側はSH4と切り合いをもち、東側は調査区外に延びる。残存する深さは0～15cm程度であり、削平が著しい。主柱穴と判断できるピットは確認できず、南西端に径70×110cm、深さ約50cmの円形土坑がみられた。出土遺物は乏しく、図化できるものはみられなかった。



第13図 求東里平島遺跡D×SH5実測図 (1/50)

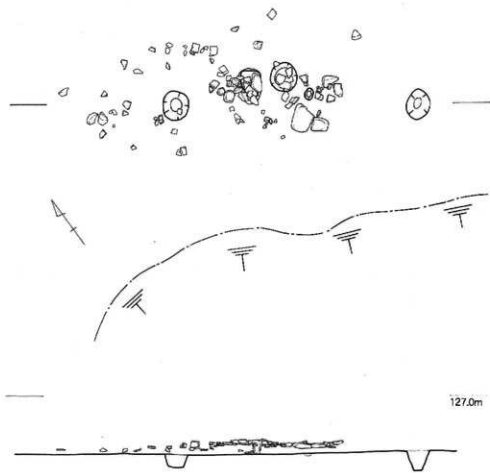
SH6 (第14・15図)

調査区の北西において確認された竪穴住居であり、南側は削平を受け残っていない。明確な住居プランは確認できないがカマド跡が残存していたため、竪穴住居と判断した。カマド及びその西側部分から比較的多くの土器片が出土している。カマドの両側には主柱穴と判断できるピットが確認できたが、2本柱であったとは断定できない。

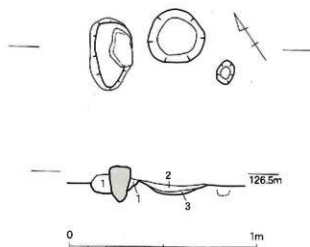
カマドは1ヶ所の軸石が抜かれており、抜かれた軸石の位置にはピットが残る。燃焼部の床面はわずかに窪ませており、硬く焼締まっている。支脚は確認できなかった。軸は暗褐色粘質土でつくられている。このカマド付近を中心に北西側に比較的多量に出土しているため、カマド祭祀に伴う土器片も存在するものと思える。第15図のうち、8・9・10をのぞくすべてがカマド周辺から出土している。

SH6出土遺物 (第16図)

1・2・5は須恵器坏身、3・4は須恵器坏蓋である。7は土師器坏身であり、6は土師器坏蓋である。6・7とも非常に粘土が精選されている。8は土師器高坏の坏部の破片である。9は土師器鉢である。11縁部を「く」の字に屈曲させ、11縁内外面および外面に刷毛目を確認でき、内面にはヘラケズリを施している。10は土師器甕である。復元口径15.6cmを測る比較的小型の甕であり、底部に図化しえない円孔の痕跡がわずかに残る。11縁部内面にわずかな屈曲がみられる。11は土師器甕であり、頸部径18cmを測る。

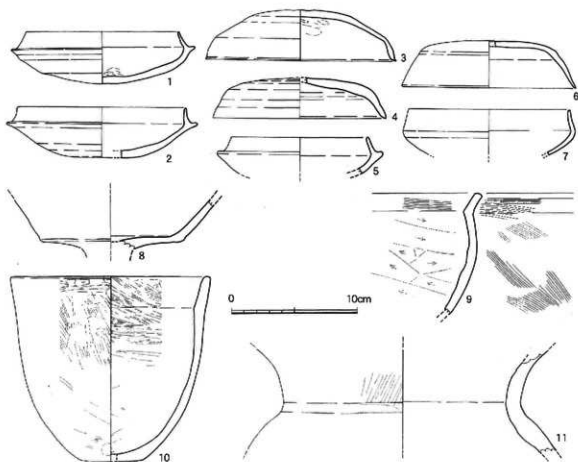


第14図 求米里平島遺跡D区SI16実測図 (1/50)

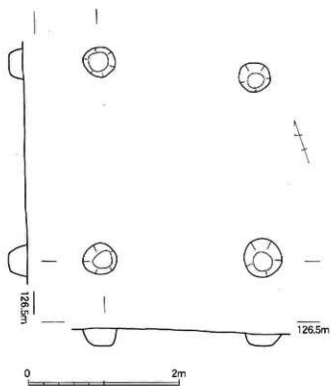


1 暗褐色粘質土 2 赤褐色土 (焼成により、非常に赤く焼締まっている) 3 灰褐色土 (土山)

第15図 求米里平島遺跡D区SH6カマド実測図 (1/20)



第16图 求来里平岛遗址D区SH6出土遗物实测图 (1/3)



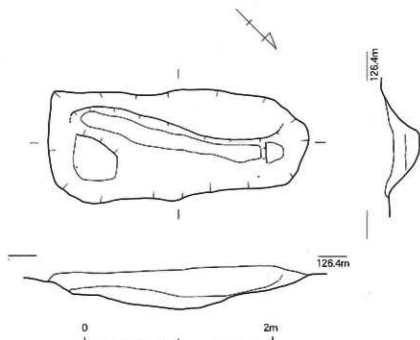
第17图 求来里平岛遗址D区SH7实测图 (1/50)

SH7 (第17図)

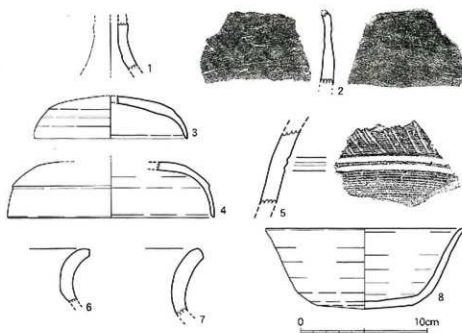
調査区の中央において確認された4基の柱穴である。明確な住居プランは確認できていないが、床面の削平された竪穴住居の柱穴として認識したい。柱穴の芯心間は2.1~2.6m、残存深は15~30cmを測り、削平は著しいと思える。各柱穴からの出土遺物はほとんどみられなかった。

SX2 (第18図)

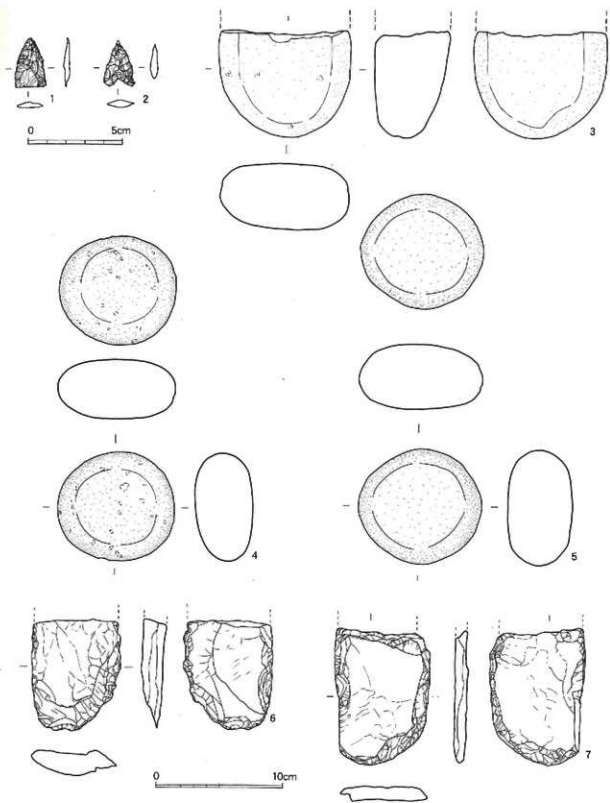
調査区の中央よりやや西側において発見された不定型の長方形土坑である。長軸275cm、短軸120cm、深さ40cmを測るが、床面は平坦でなく、一般的な土坑とは様相が異なる。出土遺物はほとんどみられなかった。



第18図 求米里平島遺跡D区SX2実測図 (1/40)



第19図 求米里平島遺跡D区出土遺物実測図 (1/3)



第20图 求来里平岛遗址D区出土器物实测图 (1·2は1/2, 3~7は1/3)

調査区出土遺物（第19・20図）

第19図1は土師器高坏の脚部片であり、内面にしぼり目がみられる。2は縄文土器片であり、条痕による調整が確認できる。3・4は須恵器坏蓋、5は須恵器甕の口縁部片である。6・7は土師器澆の口縁部片であり、外反する厚い口縁の口唇部を丸く仕上げる特徴をもつ。8は須恵器坏身であり、復元口径15.6cm、器高6.4cmを測る大振り坏である。

第20図は1・2はサヌカイト製の石鏃である。3・4・5は川原石を利用した安山岩製磨石である。6・7は扁平打製石器である。

第3節 まとめ

近年、求来里川流域では高速道路や市道建設、河川改修、木材加工団地、ほ場整備などに伴う大規模な発掘調査が行われ、多くの遺跡の存在や調査成果が得られている。

今回、調査対象地となった求来里平島遺跡D区からは、7種の竪穴住居跡が確認されている。明確に時期が確定できるSH6は田辺編年TK10型式のものと考えられる須恵器甕坏身が出土しており、6世紀中葉であることがわかる。また、遺構内ではないが、同時期からTK217型式のものと考えられる須恵器坏身が出土していることから、6世紀中葉～7世紀前葉におさまる時期に営まれた集落と考えられよう。I田市教育委員会が行った周辺のA～F区の発掘調査においても、B区（I田市教委調査）から2棟、D区（I田市教委調査）から7棟、F区（I田市教委調査）から40棟、検出されており、すでに56棟の竪穴住居が確認されていることになり、また、D区（I田市教委調査）・F区（I田市教委調査）からは、同時期のものと考えられる掘立柱建物も確認されており、未発掘箇所が多いことを考慮に入ると、同時存在とは限らないにしろ、数百棟に及ぶ竪穴住居と掘立柱建物からなる古墳時代後期の集落であったことがわかる。

また、比較的近接する町ノ坪遺跡においても、同時期の集落跡が確認されており、求来里川をさらに遡った名里遺跡においても、古墳時代後期におさまる住居跡群が確認されており、求来里平島遺跡を中心に町ノ坪遺跡から名里遺跡にかけて、広く集落が点在していたことがわかる。

これに先行して、小西遺跡において弥生時代中期～後期の集落、金田遺跡において古墳時代中期の集落、町ノ坪遺跡において弥生時代後期や古墳時代中期の集落が確認されているため、求来里川流域の集落は古墳時代後期に、金田遺跡・町ノ坪遺跡のエリアから、求来里平島遺跡・名里遺跡の、より上流域のエリアに生活空間を移動していったことが考えられる。

このほかにも、求来里平島遺跡D区からは、明確な遺構が検出されていないものの、縄文時代や古代の遺物が確認されており、また、求来里川流域の平野では中世の集落も確認されていることから、縄文時代から断続的に生活圏を移動しながら小規模の集落を営み続けていたことが想定できよう。

くくりなご

第3章 求来里名里遺跡A区1次調査区

第1節 調査の概要

日田市大字求来里字名里に所在する求来里名里遺跡は、日山盆地東部の求来里河流域の谷状沖積地の微高地に位置する。約700mの範囲において平成18年7月13日から平成18年8月11日まで1ヶ月間の発掘調査が行われた。

発掘調査の結果、古墳～奈良時代におさまると考えられる土坑・溝状遺構やピットが検出されている。包含層中の出土遺物は古墳～奈良時代の須恵器・土師器がみられ、同時代の集落の一部であることが明らかとなった。

第2節 遺構と遺物

SK100 (第23図)

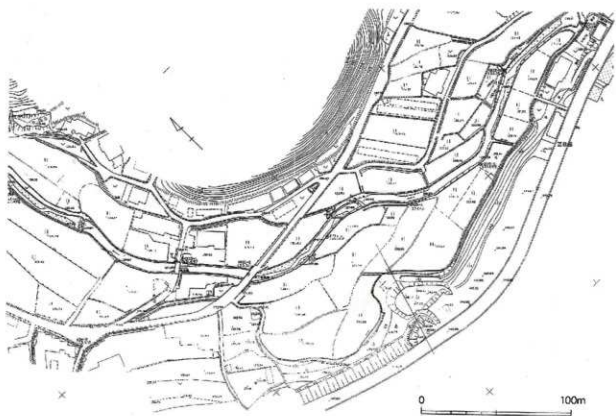
調査区の南西隅において発見された隅丸長方形土坑である。長軸110cm、短軸75cm、残存深5cmを測る。出土遺物はほとんどみられなかった。

SK105 (第24図)

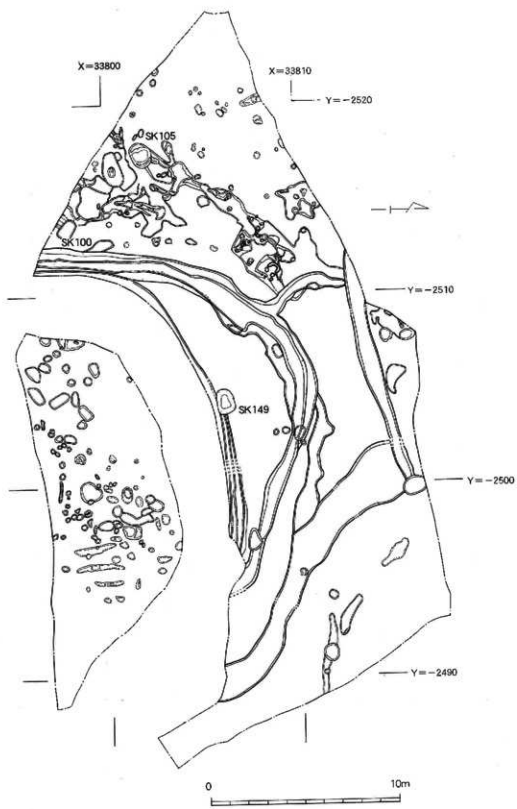
調査区の南西隅において発見された楕円形土坑である。長軸135cm、短軸110cm、残存深45cmを測る。中央より東側に最深部をもち、底面に径30cm、深さ10cm程度のピットがみられた。床面から長さ20～30cmの礎が2点確認できたが、意識的に置かれたものかは明らかでない。出土遺物はほとんどみられなかった。

SK149 (第25図)

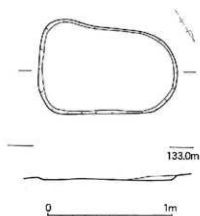
調査区の中央において発見された隅丸長方形土坑である。長軸130cm、短軸90cm、残存深30cmを測る。出土遺物はほとんどみられなかった。



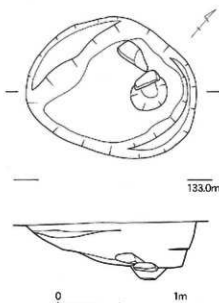
第21図 求来里名里遺跡A区1次調査区位置図 (1/3,000)



第22图 求来甲各里遗址A区1次调查区遗址配置图 (1/200)



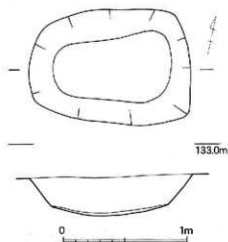
第23図 求来里名里遺跡A区1次調査区
SK100実測図 (1/20)



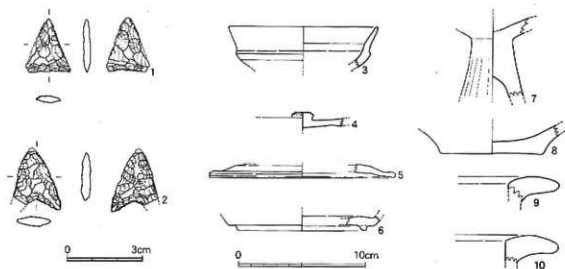
第24図 求来里名里遺跡A区1次調査区
SK105実測図 (1/20)

調査区出土遺物 (第26図)

第26図に示した遺物は、遺構内出土のものもみられるが、いずれも破片であり、遺構に伴うものとは判断できない。1はサヌカイト製、2はチャート製石鏃である。3は、須恵器高環の環部片である。古墳時代後期のものであろう。4・5は須恵器環蓋である。6は須恵器環身の高台部である。7は土師器高環の脚部片であるが、脚部をへら状工具で面取りしている。胎上は精選されている。8は弥生土器の底部片であろう。9・10は土師質土器裏の口縁部片である。口縁部をI字状に外反させ、上面を丸く、また、口唇部を丸く仕上げる特徴をもつ。



第25図 求来里名里遺跡A区1次調査区
SK149実測図 (1/20)



第26図 求来里名里遺跡A区1次調査区出土遺物実測図 (1・2は2/3, 3~10は1/3)

第3節 まとめ

今回、調査対象地となった求来里名里遺跡A区1次調査区からは、土坑・溝状遺構・ピット群が数多く検出されたが、明確に時期比定できる遺構はなかった。しかし、調査区内から出土する遺物は、弥生土器が若干例みられるが、おおむね古墳時代後期～奈良時代におさまるものが主体をしめる。

前章において述べたように、下流の小西遺跡において弥生時代中期～後期の集落、金田遺跡において古墳時代中期の集落、町ノ坪遺跡において弥生時代後期や古墳時代中期の集落が確認されているため、求来里川流域の集落は古墳時代後期に、金田遺跡・町ノ坪遺跡のエリアから、求来里平島遺跡・求来里名里遺跡の、より上流域のエリアに生活空間を移動していったことが考えられる。

近年の発掘調査において、求来里名里遺跡A区1次調査区とは求来里川を挟んで対岸の求来里名里遺跡B区において比較的まとまった古墳時代後期の集落が確認されている。ここでは平安時代後期の集落も確認できており、名里遺跡では古墳時代後期以降、断続的に集落を営み続けていたことがうかがえよう。

第4章 金田遺跡 1次調査区

第1節 調査の概要

金田遺跡は、日田市大字求来甲字金田に所在し、日田市東部の有田川の支流である求来里川の左岸に位置する。求来里川は、すぐ西脇に迫る台地や丘陵の間を縫うように蛇行しながら南東から北西に流れている。本調査区は、その河岸段丘上の沖積面及び西側に広がる標高約160mの元宮原台地から派生する北内縁辺丘陵部にあたる。

今回の調査は、求来里川河川改修に伴い実施されたもので、2003(平成15)年11月下旬に遺構検出を開始し、翌2004(平成16)年3月に終了した。調査対象面積は1200㎡である。検出した遺構は、弥生時代中期の住居跡、掘立柱建物、土坑や弥生時代後期の住居跡及び古墳時代の住居跡等である。

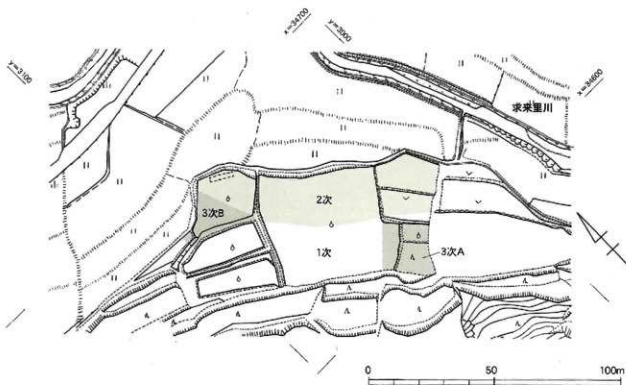
本遺跡周辺では弥生時代集落遺跡としては孤園原遺跡や平島遺跡等があり、古墳時代では尾漕1・2号墳や若ノ木2号墳、有田塚ヶ原1号墳、大迫遺跡、元宮遺跡等が調査されている。

第2節 遺構と遺物

a. 竪穴住居跡

SH1 (第28図)

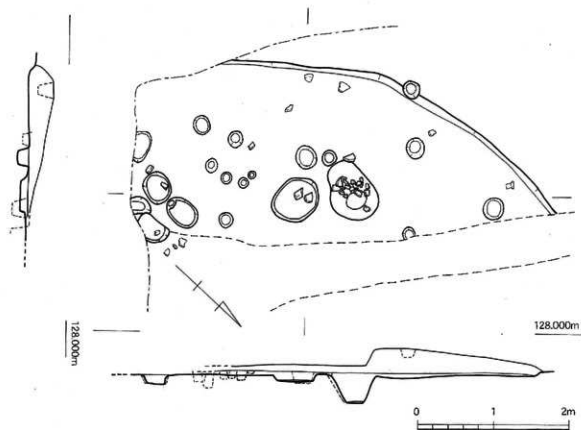
遺構は調査区の南東端F-7区に位置する。南壁は調査区外に広がるため確認されなかった。北側は削平されている。平面プランは円形と推定され、確認できる規模は2.50m×5.65m、最大深35cmである。柱穴は多数検出されたが、主柱穴は不明である。出土遺物より、竪穴建物の時期は弥生時代中期後半とみられる。



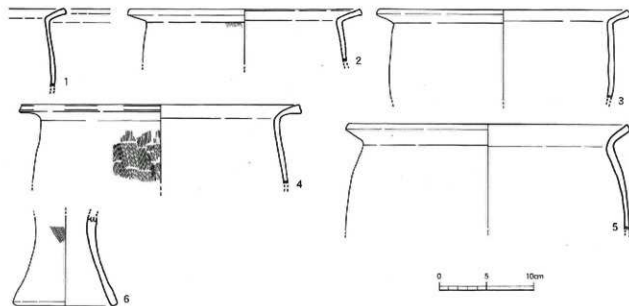
第28図 金田遺跡周辺地形図 (1/1,500)

SH1出土遺物（第29図）

1～5は甕、6は器台である。甕はいずれも「く」の字口縁で、胴部は張らない。口径は24.6cm～28.0cm。6の器台は鼓形のものである。



第28図 金田遺跡1次調査区SH1実測図（1/50）



第29図 金田遺跡1次調査区SH1出土遺物実測図（1/4）



第30図 金田遺跡1次調査区遺構配置図(1/200)

SH2 (第31図)

遺構は調査区の南東、SH1の北側に位置している。平面プランは歪な方形で、確認できる規模1.0m×2.65m、最大深28cmである。柱穴については数基確認できたが、灰跡は検出されていない。時期はSH1と同じ弥生時代中期後半とみられる。

SH2出土遺物 (第33図)

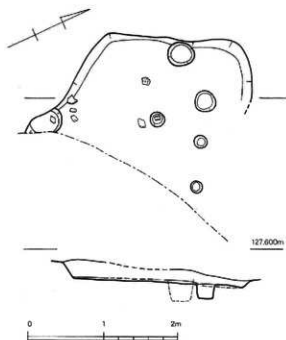
1は甕の口縁部、2は器台、3は壺の底部である。1の甕は「く」の字口縁で、頸部に2条の三角凸帯を巡らす。2の器台は鼓形を呈す。

SH3 (第32図)

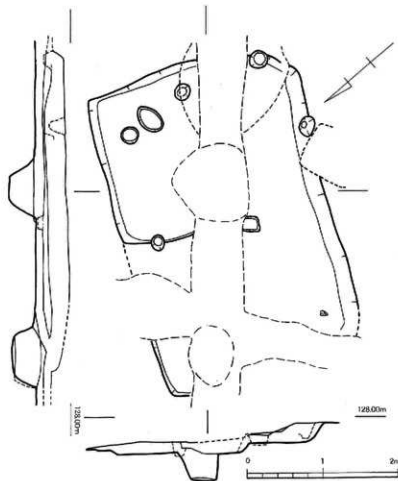
遺構は調査区の南東寄りのE-6区に位置し、その中央部を最近の農耕跡による擾乱を受けている。平面プランは方形を呈していて、確認できる規模は4.45m×2.85m、最大深は南壁側で28cmである。柱穴については数基確認できた。出土遺物が少なく、時期は確定できない。

SH3出土遺物 (第34図)

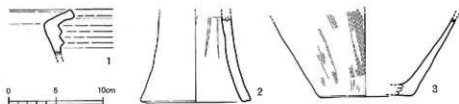
1は須恵器の高坪、2は土師器甕の口縁部、3は甕の底部である。



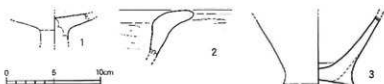
第31図 金田遺跡1次調査区SH2実測図 (1/50)



第32図 金田遺跡1次調査区SH3実測図 (1/50)



第33図 金田遺跡1次調査区SI12出土遺物実測図 (1/4)

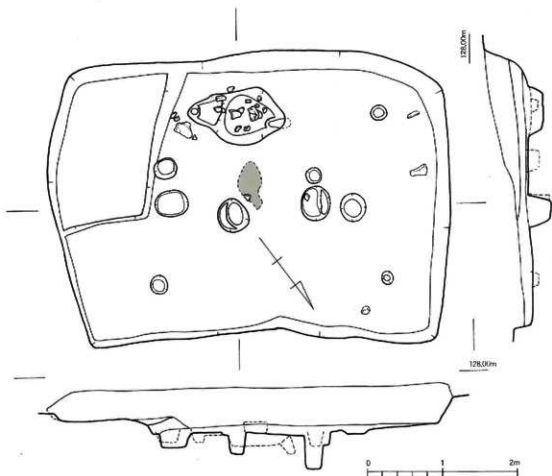


第34図 金田遺跡1次調査区KSH3出土遺物実測図 (1/4)

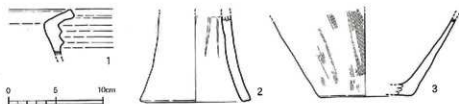
SH4 (第35図)

遺構は調査区の南東寄りSH3の西側に位置している。平面プランは方形で、その規模は5.65m×3.90m、最大深は南壁側で56cmである。主柱穴は2基である。その間からは炉跡と思われる焼土が検出されている。南東隅では1.95m×1.20mの規模の段差を確認し、南西壁沿いには楕円形に掘られた土坑を確認した。その規模は長軸1.30m、短軸0.80m、最大深25cmである。

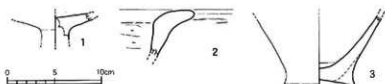
竪穴建造の時期は、1、3の裏が印跡南側の土坑から出土していること、新しい時代の遺物が上層で検出されたことから弥生時代中期後半に構築されたとみられる。



第35図 金田遺跡1次調査区SI14実測図 (1/50)



第33図 金田遺跡1次調査区SH2出土遺物実測図 (1/4)

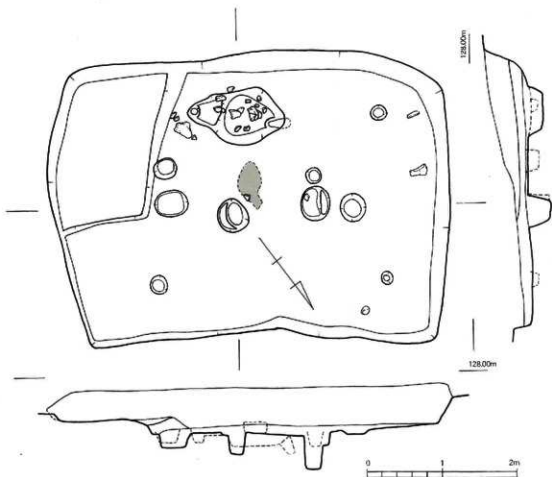


第34図 金田遺跡1次調査区SH13出土遺物実測図 (1/4)

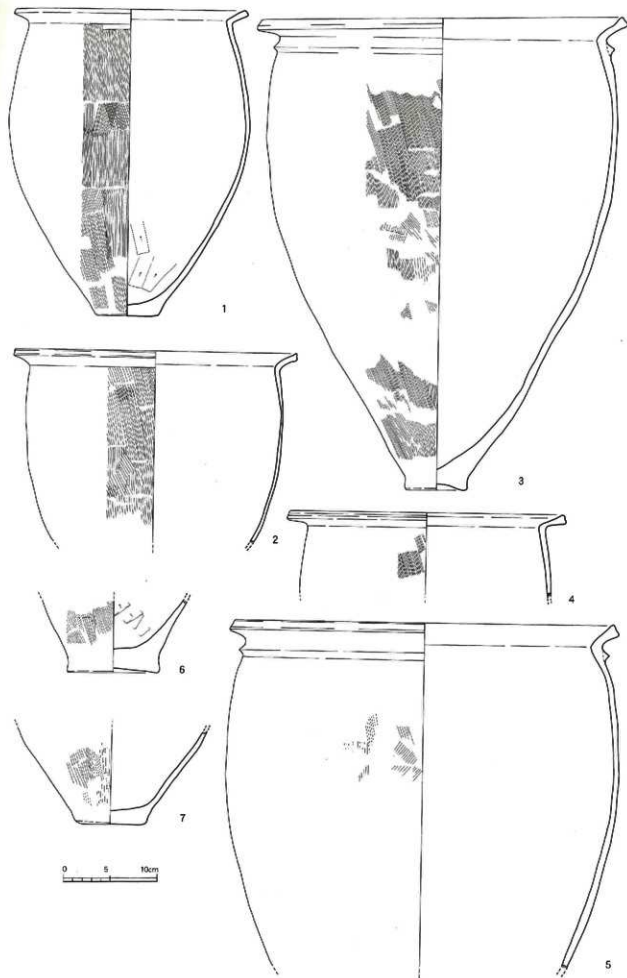
SH4 (第35図)

遺構は調査区の南東寄りSH13の西側に位置している。平面プランは方形で、その規模は5.65m×3.90m、最大深は南壁側で56cmである。主柱穴は2基である。その間からは炉跡と思われる焼土が検出されている。南東隅では1.95m×1.20mの規模の段差を確認し、南西壁沿いには楕円形に掘られた土坑を確認した。その規模は長軸1.30m、短軸0.80m、最大深25cmである。

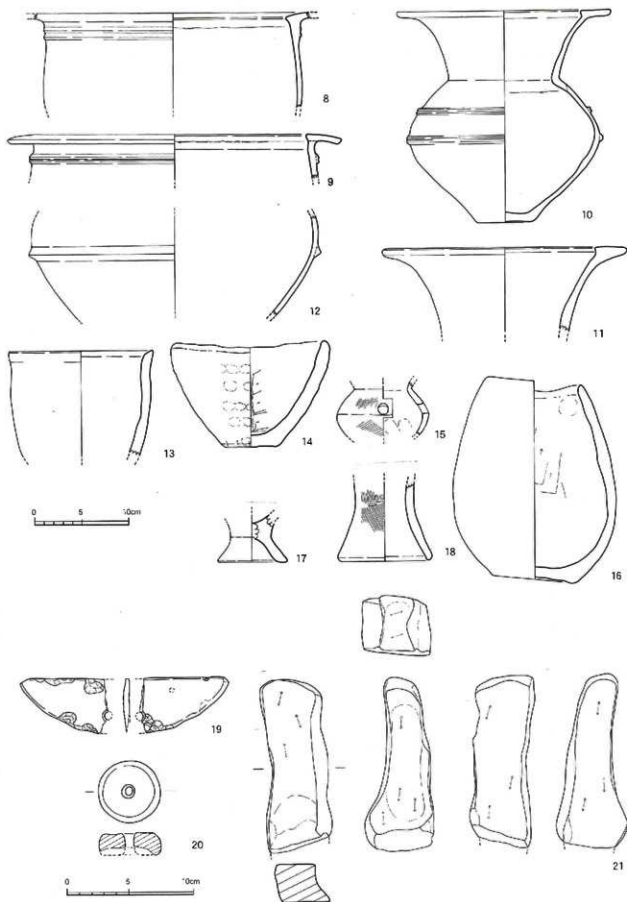
竪穴遺物の時期は、1、3の裏が砂南側の土坑から出土していること、新しい時代の遺物が上層で検出されたことから弥生時代中期後半に構築されたとみられる。



第35図 金田遺跡1次調査区SH4実測図 (1/50)



第36圖 金州遺跡1次調査|KSH4出土遺物実測図 (1/4)



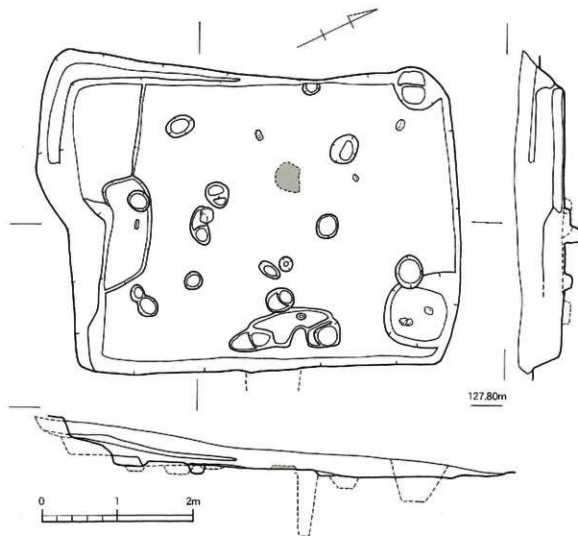
第37图 金山遗址1次調査区SH4出土物実測図 (1/4)

SH4出土遺物（第36・37図）

1～9は夾、10～12は壺、13、14、16は土師器鉢、15は土師器小型壺、17は脚付き鉢、18は器台、19は石包丁、20は紡錘車、21は砥石である。1～5の壺はいずれも「く」の字口縁で、そのうち3、5は頸部に1条の三角凸帯を巡らす。8、9の口縁部は若干鋤先状をなし端部を下垂させている。10、11の壺の口縁部は若干鋤先状をなし端部にかけて平坦である。10は胴部上半に2条のM字凸帯を巡らす。15の胴部には焼成前施された穿孔が一ヶ所確認できる。19は頁岩質砂岩製の石包丁。20の紡錘車は直径4.8cm、粘板岩系の石材。21は砂岩製の砥石。

SH5（第38図）

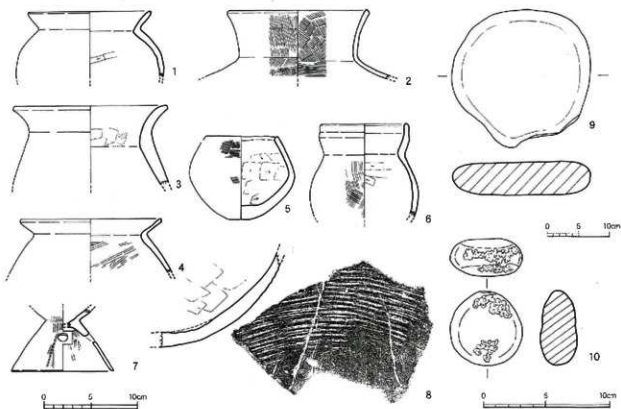
遺構は調査区の中央南寄りD-4・5区に位置している。平面プランは方形で、その規模は5.25m×3.90m、最大深は南壁側で66cmである。床面中央やや西寄りで炉跡と思われる焼土が検出されている。主柱穴は2基と思われる。南西隅では1.45m×0.90mの規模の段差を確認し、その西側及び北東隅からは横形に掘られた土坑を確認した。SH5はSH8と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察からSH5からSH8への切り合いを確認した。出土遺物より竈穴建物の時期は、古墳時代中期前半から中頃に構築されたとみられる。



第38図 金田遺跡1次調査区SH5実測図（1/50）

SH5出土遺物（第39図）

1～4は土師器甕、1は内面にヘラ削りがみられ、外面にはススが付着している。4は内外面ともハケ目調整。6は短頸壺でその口径は9.2cm。5は土師器鉢で、器高8.8cm、口径8.0cm。7は高坏の脚部で、3ヶ所に穿孔がみられる。8は土師器甕の底部で外面にタタキ調整が残る。9は石皿、10は敲石である。



第39図 金田遺跡1次調査区SH5出土遺物実測図（1/4）、石器（1/3、1/6）

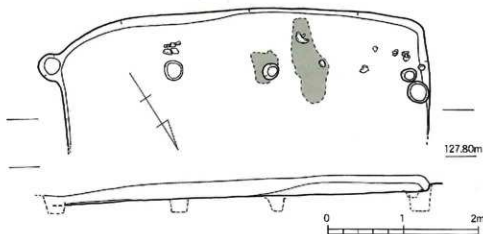
SH6（第40図）

遺構は調査区の中央南寄りSH5の西側に位置している。平面プランは方形で、確認できる規模は4.70m×1.65m。最大深は南壁側で24cmである。南壁中央やや西よりの床面からはかまど跡が検出されている。創石等がなく焼成部の残った底面だけが残っていた。支柱穴は2基確認できた。

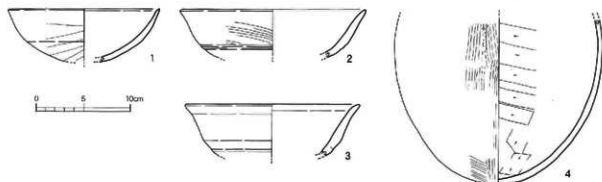
出土遺物より竪穴建物の時期は、古墳時代中期中頃とみられる。

SH6出土遺物（第41図）

1は土師器鉢で外面ヘラ削りの後ナデ調整、口径は16.0cm。2、3は土師器高坏で、2は外面にハケ目が見られる。11は2が19.6cm、3が18.4cm。4は土師器の甕で、かまど跡から出土しており、内外面ともススが付着している。



第40図 金田遺跡1次調査区SH6実測図 (1/50)



第41図 黒金田遺跡1次調査区SH16出土遺物実測図 (1/4)

SH7 (第42図)

遺構は調査区の中央南東寄りE-5区に位置している。平面プランは方形で北西側をSH18に切られている。確認できる規模は4.05m×3.60m、最大深は南壁側で25cmである。床面からは数奇の柱穴が検出されたが、支柱穴は不明である。

遺物は古墳時代のもものと奈良時代のもものが混じって出土しているが、SH8に先行して構築されていることより古墳時代中期中頃に構築されたとみられる。

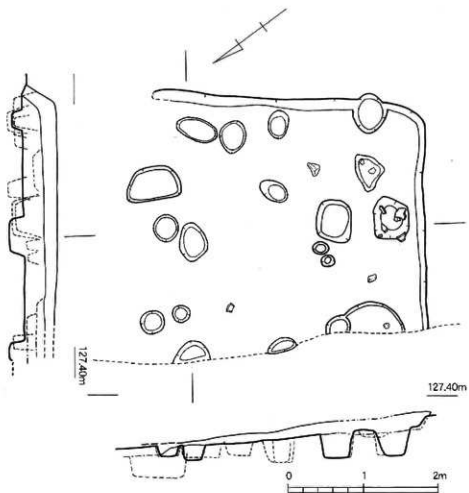
SH7出土遺物 (第43図)

1は須恵器坏蓋で、その口径は16.4cmほど。2～4は須恵器器杯である。2は口径16.6cm、底径10.0cm、器高7.0cm。3は口径14.6cm、底径9.2cm、器高4.6cm。4は口径15.4cm、底径9.6cm、器高5.5cm。5は土師器壺で、6～8は土師器坏である。9、10、19は土師器高坏で、11～18は土師器甕、20～21は鉄製釘、22は磁石である。

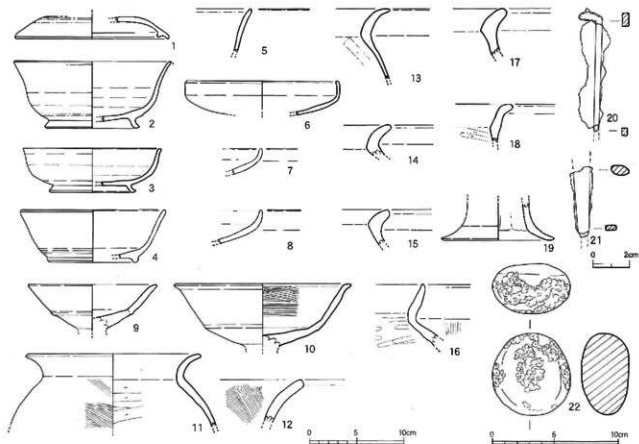
SH8 (第44図)

遺構はSH15とSH7の間であり、その関係は遺構検出面の観察からSH5からSH8へ、SH17からSH18への切り合いを確認した。住居の平面プランは方形で、その規模は5.25m×5.50m、最大深は南壁側で42cmあり、そこからさらに深さ12cmの壁溝を検出した。住居北西壁中央部からかまど跡が確認できた。側石等がなく築成部の残った低面と若干の袖部が残っていた。

土師器の特徴から壑穴建物の廃絶時期は古墳時代中期中頃とみられる。



第42図 金田遺跡1次調査区SI17実測図 (1/50)



第43図 金田遺跡1次調査区SI17出土遺物実測図 (1~19は1/4、20・21は1/2、22は1/3)

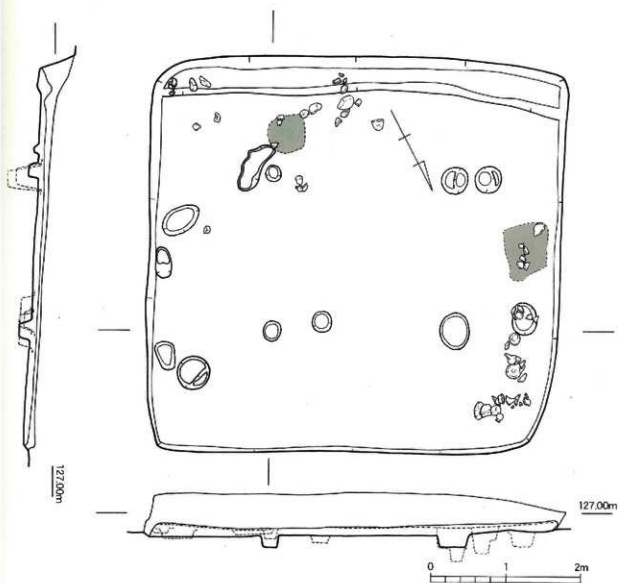
SH8出土遺物 (第45図)

1～5は土師器壺で、1はヘラ記号が底部に見られる。5はカマド跡から出土、器高14.0cm。6～8は土師器鉢である。8は口径16.9cm、器高15.6cm。竪穴北隣の土器集中部から出土。9、10、21～23は土師器甕で、いずれも竪穴南側の土器集中部から出土。11～15は土師器杯で、主に竪穴北隣の土器集中部から出土。16～20は土師器高杯で、18はかまど跡から出土。24、25は甕で、24はカマド跡から出土。

SH9 (第46図)

遺構は調査区の中央部D・3・4区に位置している。住居の平面プランは方形で、その規模は4.05m×3.85m、最大深は南壁側で48cmある。北東壁を除く3面の壁からは最大深23cmの狀溝を検出した。また住居北東壁中央部からはかまど跡を検出した。側石等がなく焼成部のつけた低面と若干の袖部と創石の抜き取り跡が検出された。

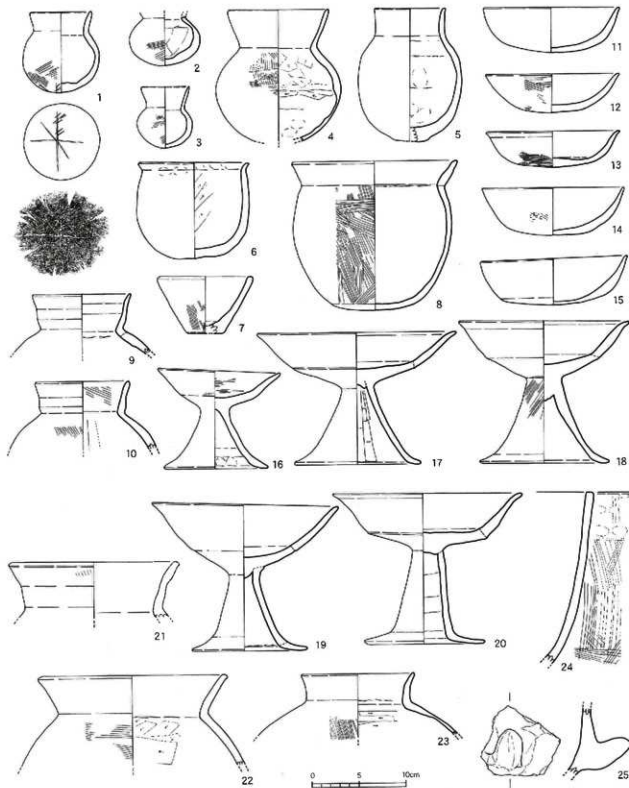
土師器の特徴から竪穴建物の廃絶時期は古墳時代中期中頃とみられる。



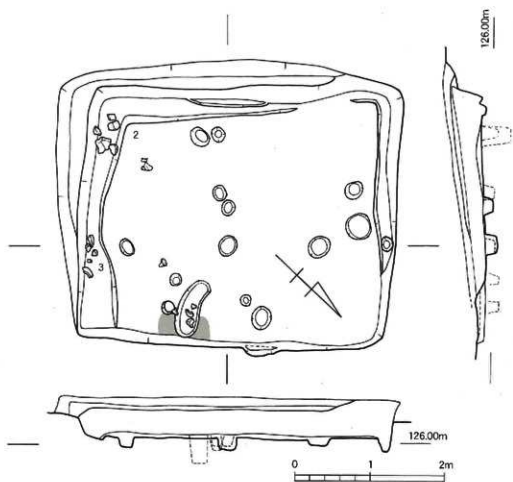
第44図 金州遺跡1次調査区SI18実測図 (1/50)

SH9出土遺物（第47図）

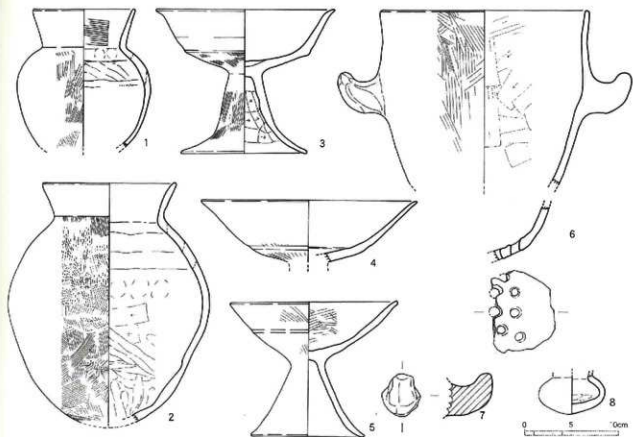
1、8は土師器甕で、1はカマド付近、8は南側から出土。2は土師器甕で胴が若干伸びるもので、塹穴南角の塹溝内から出土。3～5は土師器高坏である。3は東南壁の塹溝内から、5はカマド跡から出土した。6、7は甕で、3の高坏同様東南壁の塹溝内から出土した。



第45図 金田遺跡1次調査区(SH8)出土遺物実測図(1/4)



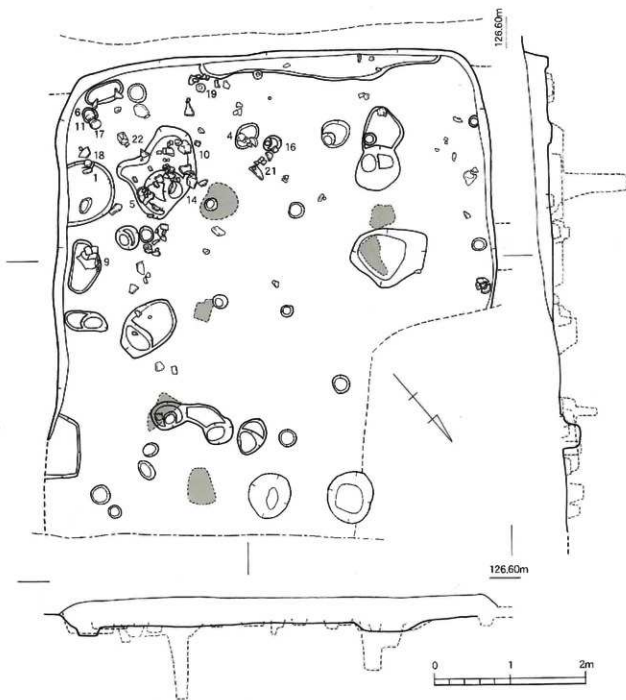
第46图 金山遗址1次调查区SH9实测图 (1/50)



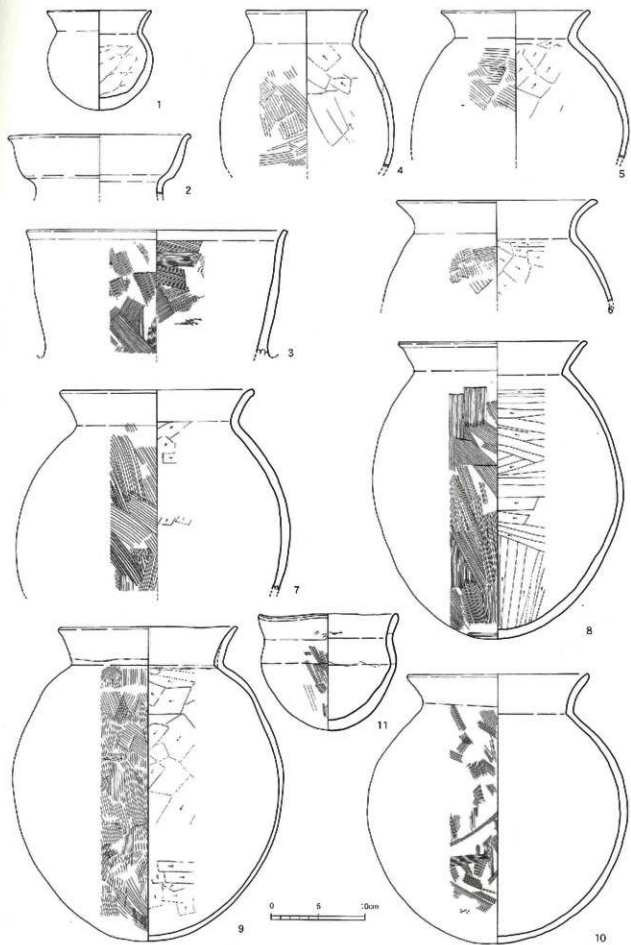
第47图 金山遗址1次调查区SI19出土遗物实测图 (1/4)

SH10 (第48図)

遺構は調査区の北東部F-4・5区に位置している。住居北壁は調査区外に展開すると考えられる。平面プランは方形で、確認された規模は6.70m×5.75m、最大深は南壁側で27cmである。床面からは浅い土坑や焼土がいくつも検出されている。そのうち支柱穴は3基を確認した。また南西壁からは深さ10cmほどの盛土を検出した。SH10は北側でSH11と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察からSH11からSH10への切り合いを確認した。出土遺物より堅穴建物の時期は、古墳時代中期中頃とみられる。



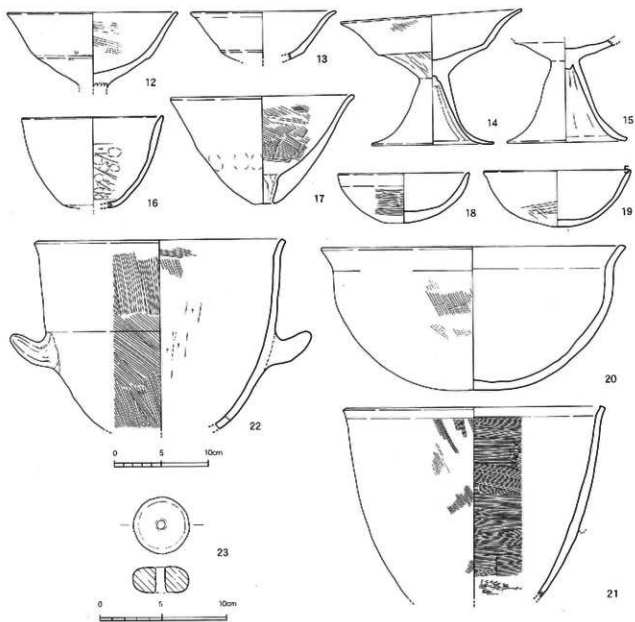
第48図 金山遺跡1次調査区SH10実測図 (1/50)



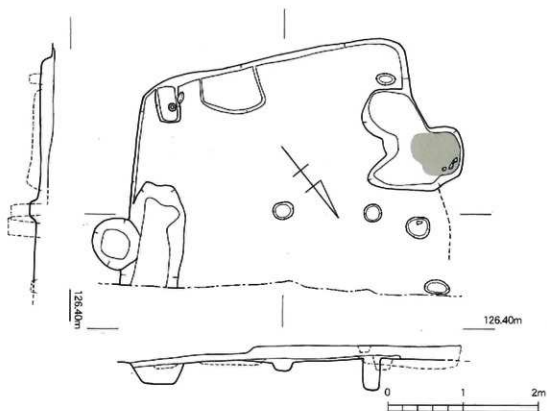
第49図 金川遺跡1次調査区SI110出土遺物実測図 (1/4)

SH10出土遺物 (第50図)

1~3は土師器壺、4~10は土師器甕、11、16、21は土師器鉢、12~15は土師器高坏で脚部の屈曲が少ない、18、19は土師器杯、17、21、22は甗である。そのうち大半の遺物が南東隅から出土している。17の甗は6の甗と11の鉢と重なり合って出土した。また18と22の甗も同じく南東隅から出土していることから、この付近にカマドが付設されていた可能性がある。



第50図 金田遺跡1次調査区SH10出土遺物実測図 (1~22は1/4、23は1/3)

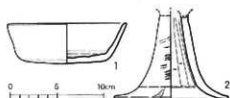


第51図 金田遺跡1次調査区SH11実測図 (1/50)

SH11 (第51図)

遺構は調査区の北東部F-4区にあり、SH10の西側に位置している。住居北壁は調査区外に展開すると考えられる。平面プランは方形と考えられ、確認された規模は4.50m×2.75m、その深さは南壁側で18cmである。床面からは浅い土坑や柱穴がいくつか検出されたが、主柱穴については不明である。住居北西壁からはかまど跡が検出された。

出土遺物が少なく、時期の断定は難しいが、SH10との前後関係より古墳時代中期前半から中頃とみられる。



第52図 求来聖金田遺跡1次調査区
SH11出土遺物実測図 (1/4)

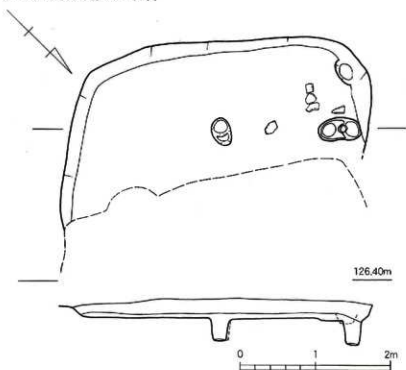
SH11出土遺物 (第52図)

1の須恵器杯は口径12.6cm、底径9.0cm、脚高4.2cm。2の土師器高杯は脚部屈曲が明瞭で、内面にヘラケズリを施す。

SH12 (第53図)

構は調査区の中央南東寄りE-4区に位置し、北側でSH123と接している。平面プランは隅丸方形と考えられ、確認された規模は4.30m×2.05m、その深さは南壁側で21cmである。確認された主柱穴は1基である。

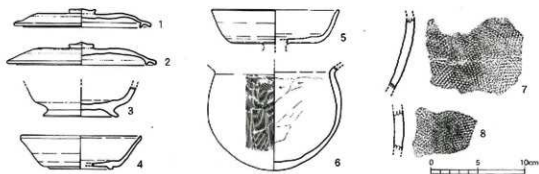
出土須恵器より本遺構は7世紀後半から末とみられる。



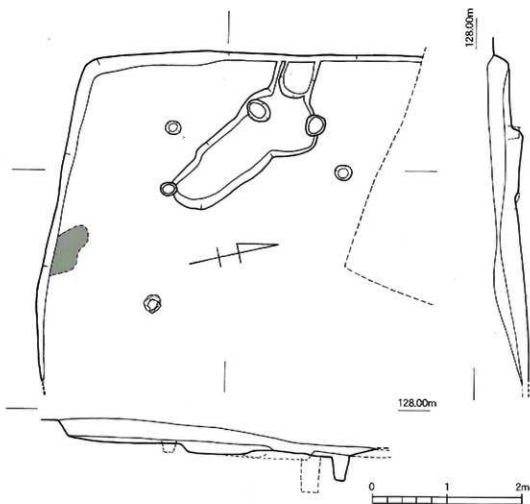
第53図 金田遺跡1次調査区SH12実測図 (1/50)

SH12出土遺物 (第54図)

1, 2は須恵器杯である。1は口径12.4cm, 器高1.9cm, 2は口径14.4cm, 器高2.6cm。3, 4は須恵器杯で、3の口径12.8cm, 器高3.5cm, 底径6.8cm, 2は底径8.0cm, 5は須恵器高杯、6は土師器甕、7, 8は外面に格子目叩き調整の轆式系軟質土器である。



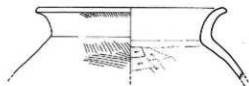
第54図 金田遺跡1次調査区SH12出土遺物実測図 (1/4)



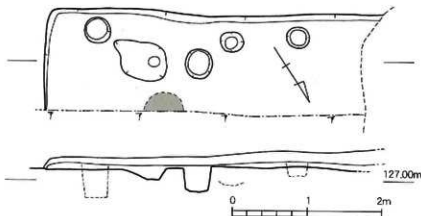
第55図 金田遺跡1次調査区SH13実測図 (1/50)

SH13 (第55図)

遺構は調査区の南西寄りC3・4区にあり、北側でSH14と接している。遺構検出面の観察からSH13からSH14への切り合いを確認した。平面プランは方形と考えられ、確認された規模は4.50m×4.75m、その深さは南西壁側で20cmほどである。床面からは浅い土坑や柱穴がいくつか検出されたが、主柱穴については不明である。また、住居南壁中央部からは焼土が検出された。



第56図 金田遺跡1次調査区
SH13出土遺物実測図 (1/4)

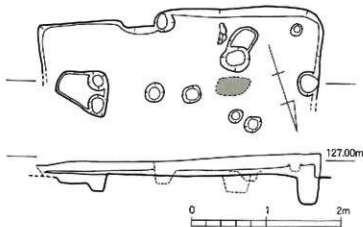


第57図 金田遺跡1次調査区SH14実測図 (1/50)

竪穴建物の時期は、出土した甕の形態から古墳時代後期と考える。

SH13出土遺物 (第56図)

1は土師器甕で、口縁部がやや肥厚する。外面はハケ目、内面はケズリ調整を施す。口径は20.2cm。



第58図 金田遺跡1次調査区SH15実測図 (1/50)

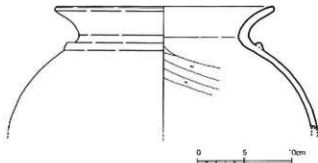
SH14 (第57図)

遺構はC3区にあり、SH13の北側に位置している。遺構の残りが浅く、規模は4.45m×1.70mほどしか確認できなかった。その平面プランは方形と考えられる。床面からは主柱穴1基と、焼土が検出された。

川土土器が少なく、時期の確定には至らないが、SH13より新しいものである。

SH15 (第58図)

遺構は調査区の西寄りB2区に位置している。その北側を最近の農耕跡により攪乱されており、東西3.75m×南北1.60mしか確認できなかった。その平面プランは方形と考



第59図 金田遺跡1次調査区
SH15出土遺物実測図 (1/4)

えられる。床面からは土柱穴2基と、焼土が検出された。

出土遺物が少なく、時期の断定は難しいが、古墳時代中期前半頃とみられる。

SH15出土遺物（第59図）

1は変形土器で、胴部はふくらみ、内面に縄ケズリが施される。肩に三角凸帯を巡らす。

SH16（第60図）

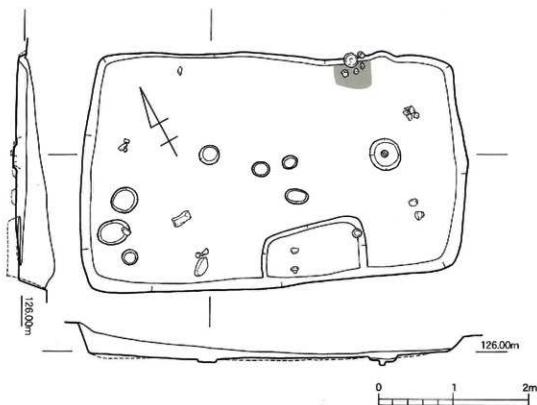
遺構は調査区の中央やや西よりのC・D-3区にあり、SH119の南側に位置している。平面プランは方形で、その規模は5.15m×3.15m、最大深は南西壁側で32cmである。土柱穴は2基確認された。南壁沿い深さ20cmほどの土坑を確認した。また、住居北西壁からはかまど跡が検出された。焼土中より支脚に使用された高杯を倒立した状態で検出した。

土師器の特徴から竈穴建物の時期は古墳時代中期中頃とみられる。

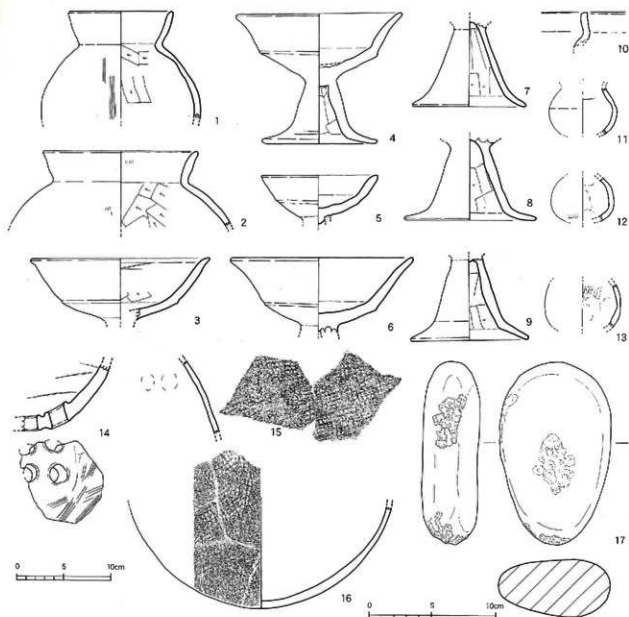
SH16出土遺物（第61図）

1、2は土師器甕、3～9は土師器高杯、10～13は土師器小型壺、14は甕、15、16は外面に格子目叩き調整の幹式系土器、17は砂岩製の敷石である。

かまど焼土中からは、伏せた状態の6の高杯に、同じく倒立して重ねて支脚としていた4の高杯を検出した。その周囲から3の高杯が出上している。また、南側の土坑からは5、9の高杯と14の甕が出土した。



第60図 金田遺跡1次調査区SH16実測図 (1/50)



第61図 金田遺跡1次調査区SII16出土遺物実測図 (1~16は1/4, 17は1/3)

SH17 (第62図) (第3次調査SII201)

遺構は調査区の中央やや西よりのC-2区にあり、住居北壁は調査区外に展開すると考えられる。平面プランは方形で、確認された規模は5.35m×5.30m、その最大深は南壁側で42cmである。床面からは浅い土坑や柱穴がいくつか検出されており、そのうち主柱穴を2基確認した。また、住居北東壁からはカマド跡が検出された。

出土遺物より竪穴建物の時期は、古墳時代中期前半から中頃とみられる。

SH17出土遺物 (第63図)

1は土師器小型壺、2~4、12は土師器甕形土器で12はカマド焼土中から7の高坏とともに出土した。口径は16.8cm、器高は26.7cmで内面は筒ケズリで調整し、外面にはススの付着がみられた。5は土師器鉢、6~8は土師器高坏で、そのうちかまど焼土中から出土した7は内面がナデ、外面は縦方向の刷毛目のあと指ナデである。9は甗、10、11は外面に格子目叩き調整をもつ轆式系軟質土器である。

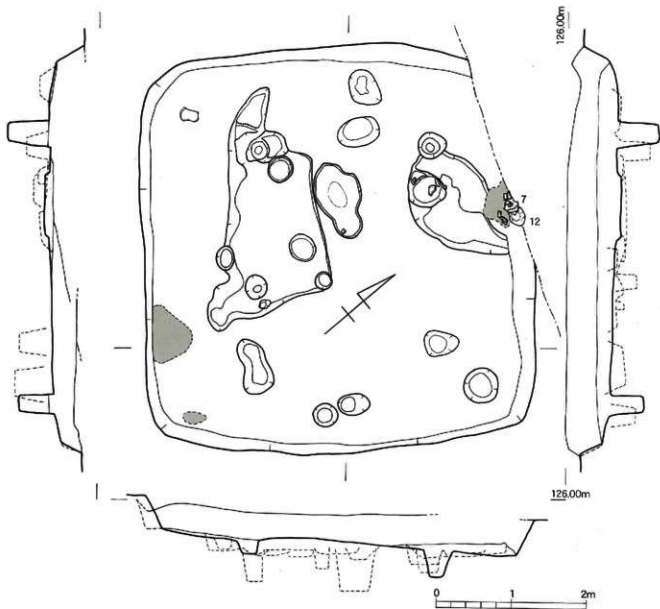
SH18 (第64図)

遺構は調査区の中央西側B・C-2区にあり、SH115の北、SH134の南に位置している。平面プランは方形で、その規模は4.55m×4.40m、その最大深は南壁側で52cmである。そこからさらに深さ8cmの壁溝を検出した。床面からは浅い土坑や柱穴をいくつか検出したが、主柱穴については不明である。また、住居西壁からかまど跡を検出した。焼土中より支脚に使用された高坏が倒立した状態で検出された。

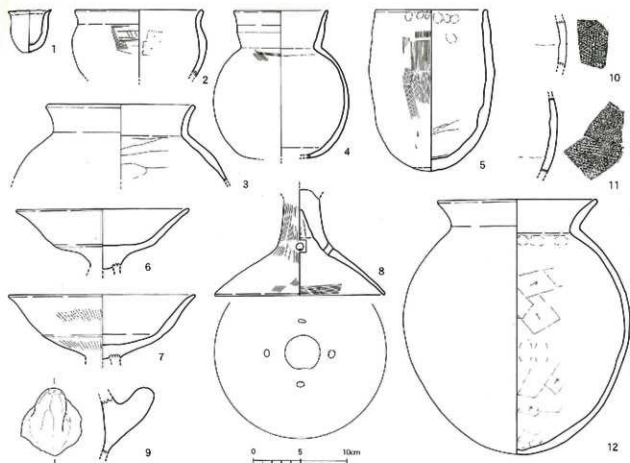
川土遺物より竪穴建物の時期は、古墳時代中期中頃とみられる。

SH18出土遺物 (第65図)

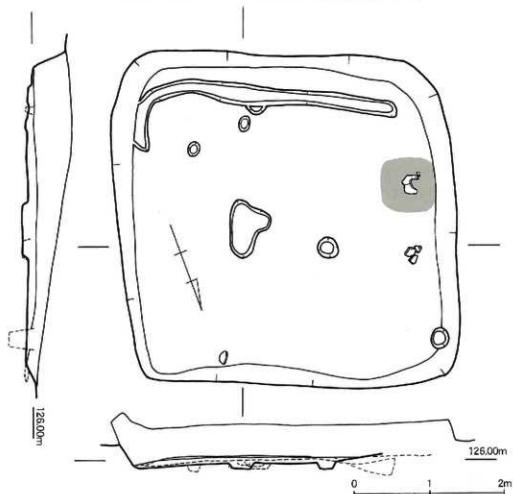
1は土師器甕で、肩は張らず胴長になる。内面指ナデ、外面縦ハケ目が認められる。かまど換土内で高坏の上位から出土した。2は土師器高坏の坏部はかまど焼上に支脚として伏せて置かれていた。その脚部も同じ焼土内から出土した。3は外面に格子目肌調整をもつ碇式系土器で、かまど南側から出土している。



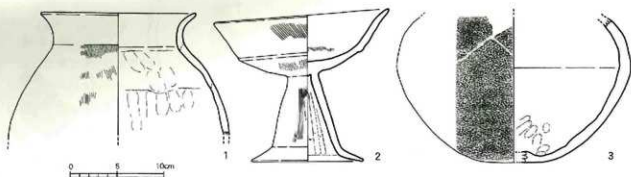
第62図 金田遺跡1次調査区SH17実測図 (1/50)



第63图 金山遺跡1次調査区SH17出土遺物実測図 (1/4)



第64图 金田遺跡1次調査区SH118実測図 (1/50)

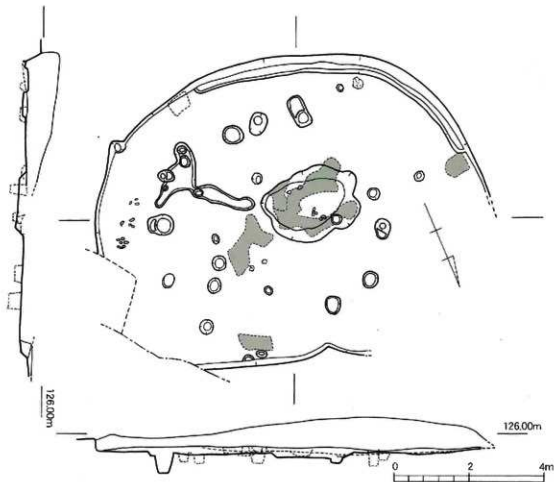


第65図 金山遺跡1次調査区SH18出土遺物実測図 (1/4)

SH19 (第66図) (第3次調査SH202)

遺構は調査区の中央北西寄りC・D-2・3区にあり、その南をSH16と、西をSH17と東をSH28と接している。遺構検出面の観察からそれらすべての住居より古いものであることを確認した。平面プランは円形で、確認された規模は東西10.35m×南北8.15m、その最大深は南西壁削で86cmである。そこからさらに深さ10cmほどの壁溝を検出した。床面中央部からは長軸2.45m、短軸1.80m、最大深24cmほどの規模で楕円形に掘られた土坑を確認した。その埋土中には焼土が多く含まれていたことから炉跡と考える。また床面からは浅い土坑や柱穴をいくつか検出したが、主柱穴については不明である。

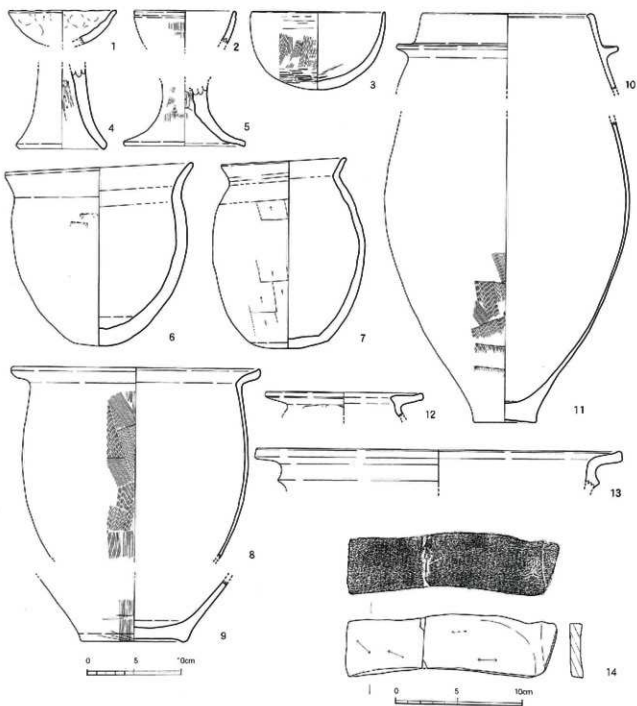
本遺構出土遺物は弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代と幅があり時期は決めかねるが、平面プランから弥生時代中期後半に構築され、廃絶された後もゴミ穴等で利用されたものとする。



第66図 金山遺跡1次調査区SH19実測図 (1/50)

SH19出土遺物 (第67図)

1～3は土師器、4は器台、5は土師器高坏、6、7は弥生時代後期後半の変形土器、8、9、11～13は弥生時代中期の甕、10は羽釜、14は砂岩質の砥石である。



第67図 金田道跡1次調査区SH19出土遺物実測図 (1～13は1/4, 14は1/3)

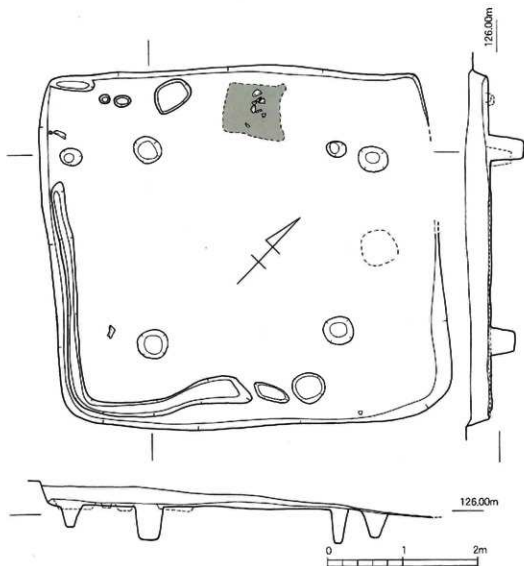
SH20 (第68図)

遺構は調査区北西端のA・B-1・2区にあり、SH18、SH29のさらに西に位置している。平面プランは方形で、その規模は4.65m×5.40m、その最大深は南壁側で32cmである。そこからさらに最大深24cmの壁溝を検出した。主柱穴については1基確認した。また、住居北西壁からかまど跡を検出した。その焼土中より支脚に使用された高坏が倒立した状態で検出されている。

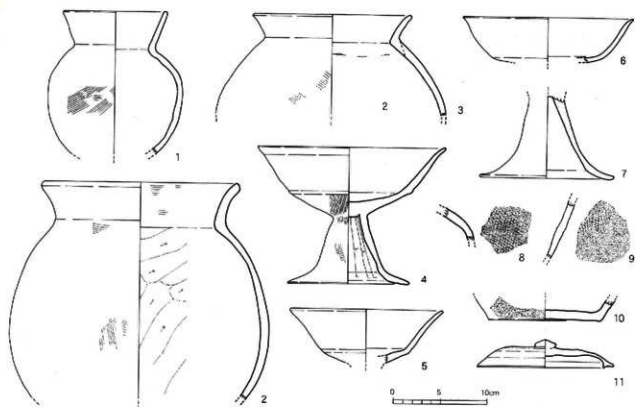
出土遺物より竪穴建物の時期は、古墳時代中期前半とみられる。

SH20出土遺物 (第69図)

1～3は土師器甕で、2は口縁部がやや外反し、肩はさほど張ってない。内面艶ケズリ、外面縦ハケ目が認められる。かまど焼土内で高坏の上位から出土した。3は竪穴南側柱穴付近で出土。4～7は土師器高坏で、4はかまど内に支脚として伏せて置かれていたもので、5もかまど焼土内から出土している。8～10は外面に格子目叩き調整をもつ韓式系土器の甕である。11は須恵器蓋である。



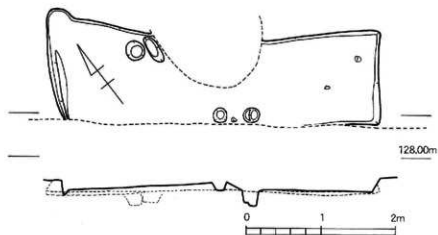
第68図 全山遺跡1次調査区SI120実測図 (1/50)



第69図 金田遺跡1次調査区SI120出土遺物実測図 (1/4)

SH21 (第70図)

遺構は調査区の南東寄りのE・F-6区に位置し、その南部を最近の農耕跡により攪乱されている。平面プランは方形を呈していて、確認できる規模は4.35m×1.35m、最大深は南壁側で19cmである。支柱穴については不明である。遺物も、土器細片が数点出土したのみで、遺構の構築時期については不明である。

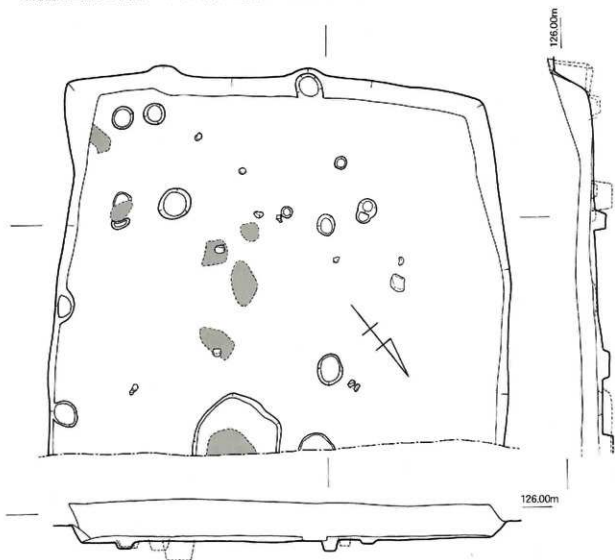


第70図 金田遺跡1次調査区SH21実測図 (1/50)

SH22 (第71図)

遺構は調査区中央部北寄りD-3、E-3・4区にあり、SH24、SH26、SH27の間に位置している。平面プランは方形で、その北壁は調査区外に展開すると考えられ、確認された規模は6.10m×5.05m、その最大深は南壁側で44cmである。浅い支柱穴を3基確認した。また、住居北東隅からかまど跡を検出した。側石等がなく築成部の残った低面が残っていた。

須恵器は上層より出土しており、床面の遺物より堅穴建造物の時期は、古墳時代中期中頃とみられる。

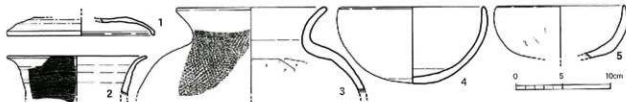


第71図 金田遺跡1次調査区SH22実測図 (1/50)

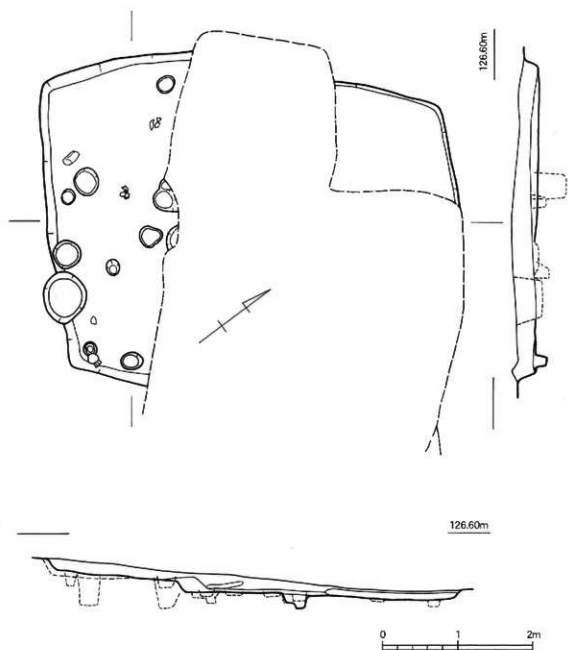


SH22出土遺物 (第72図)

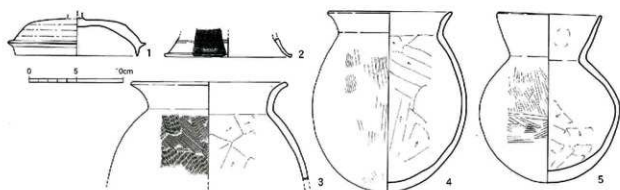
1は須恵器蓋で、口径は15.6cm。2は口縁部が長く伸びる須恵器の甕で口縁部に2条の波状文をもつ。3は碎式系土器の甕で、外面は格子口叩き、内面は地ケズリを施す。4、5は土師器坏で、4は口径15.2cm、器高8.0cm。5は口径13.6cm。



第72図 金田遺跡1次調査区SH22出土遺物実測図 (1/4)



第73図 金州遺跡1次調査KSI123実測図 (1/50)



第74図 金田遺跡1次調査区SI123出土遺物実測図 (1/4)

SH23 (第73回)

遺構は調査区中央部北寄りE・3・4区にあり、SI122の東側に位置している。平面プランは方形であるが、その大半をSH24で切られており、確認された規模は5.50m×4.35m、その深さは南壁側で26cmである。主柱穴については不明である。

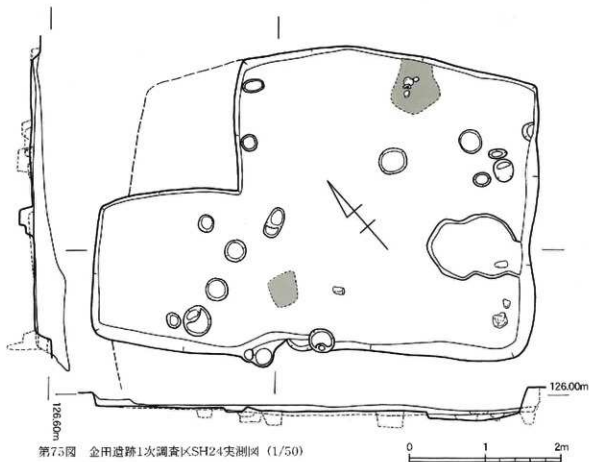
出土遺物より竪穴建物の時期は、古墳時代中期中頃とみられる。

SH23出土遺物 (第74回)

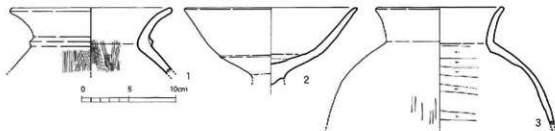
1は須恵器蓋で、口径は13.0cm、2は須恵器の脚部で2条の波状文をもつ。3～5は土師器甕で内面に篋ケズリを施す。3、4の口縁部はやや反る。5の口縁部はまっすぐ伸び、胴部は3、4より狭る。

SH24 (第75回)

遺構は調査区中央部北寄りE・3・4区にあり、SH22の東側に位置し、SI123を切って造られている。平面は南北4.10m×東西4.00mの方形プランの北西側に南北1.90m×東西2.20mの方形を付け足したものである。床面からは浅い柱穴はいくつか確認できたが主柱穴については不明である。住居南東壁沿いに浅い土坑があり、住居北東壁か



第75回 金田遺跡1次調査区SH24実測図 (1/50)



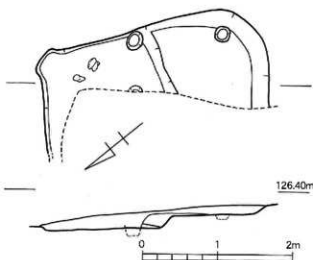
第76回 金田遺跡1次調査区SH23出土遺物実測図 (1/4)

らかまど跡を検出した。その灰土中より支脚に使用された高坏が倒立した状態で検出されている。

SH23との比較及び出土遺物より竪穴建物の時期は、古墳時代中期後半とみられる。

SH24出土遺物 (第76図)

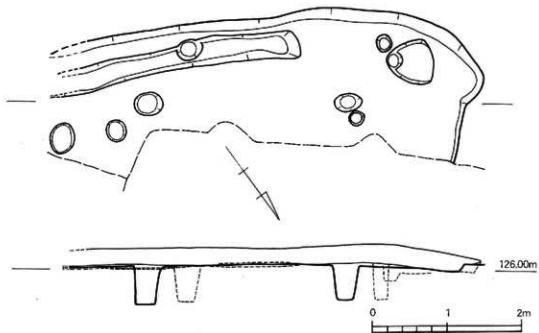
1は弥生時代後期の突形土器で、頸部に1条の凸帯を巡らす。2はカマドの支脚に使用された高坏で、その口径は18.3cm。3は竪穴南隅角付近から出土した土師器の甕で、内面には籠ケズリの後ナデを施す。外面にススが附着している。



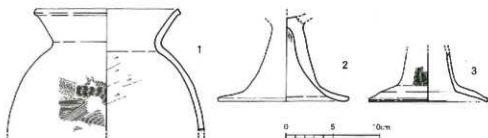
第77図 金山遺跡1次調査区SH25実測図 (1/50)

SH25 (第77図)

遺構は調査区中央部北寄りE・F・4区にあり、SH24の東側に位置している。平面プランは方形であるが、その大半をSH24で切られており、確認された規模は南北3.20m×東西1.40mのみである。その深さは26cmあり、地



第78図 金山遺跡1次調査区SH26実測図 (1/50)



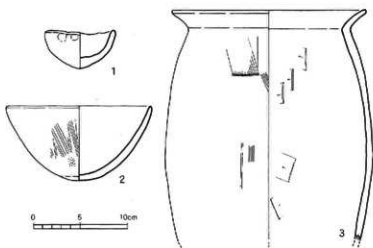
第79図 金山遺跡1次調査区SH26出土遺物実測図 (1/4)

形にそって2段に掘られている。主柱穴についても不明である。遺物も、土器細片が数点出土したのみで、遺構の構築時期については不明である。

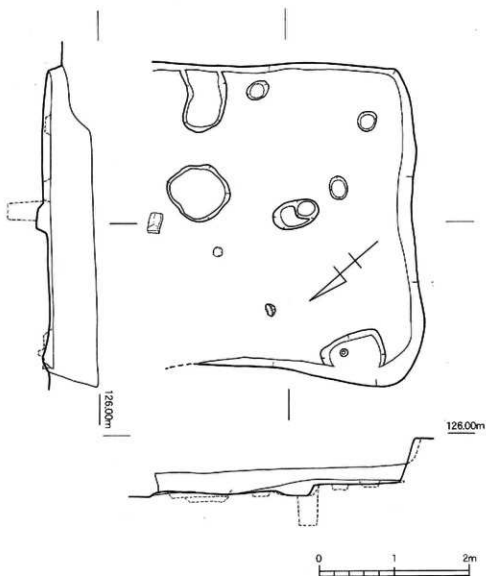
SH26 (第78図)

遺構は調査区中央部北寄りE-3・4区にあり、SH22、SH24の南側に位置している。平面プランは垂な方形であるが、その大半をSH22等に切られており、確認された規模は南北1.90m×東西5.70mのみであり、その深さは28cmである。床面から2基の主柱穴が確認できた。

SH122との比較及び出土遺物より竪穴建物の時期は、古墳時代中期前半とみられる。



第80図 金山遺跡1次調査区SH127出土遺物実測図 (1/4)



第81図 金山遺跡1次調査区SH27実測図 (1/50)

SH26出土遺物 (第79図)

1は土師器の裏で内面に縄ケズリを施す。2、3は土師器高坏で、脚部の屈曲が残っている。

SH27 (第81図)

遺構は調査区中央部北寄りD・E-2・3区にあり、東に接するSI122と切りあい関係を持つ。遺構検出面の観察からSH27からSH22への切り合いを確認した。平面プランは方形で、その北壁は調査区外に展開し、確認された規模は南北3.15m×東西4.35m。その最大深は南壁側で57cmである。床面からは支柱穴1基のほか、浅い土坑を3基検出した。

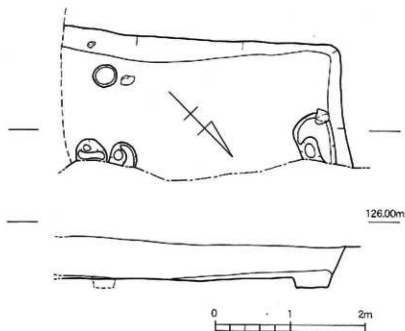
SI122との前後関係及び出土遺物より竪穴建物の時期は、弥生時代後期末とみられる。

SH27出土遺物 (第80図)

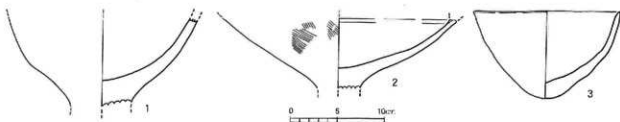
1は手づくねの小型鉢で、口径7.4cm、器高3.6cm、外面に黒斑あり。2は鉢で、口径15.0cm、器高7.8cm、内外面に黒斑あり。3は甕形土器で、胴部が伸びる。口径20.6cm。

SH28 (第82図)

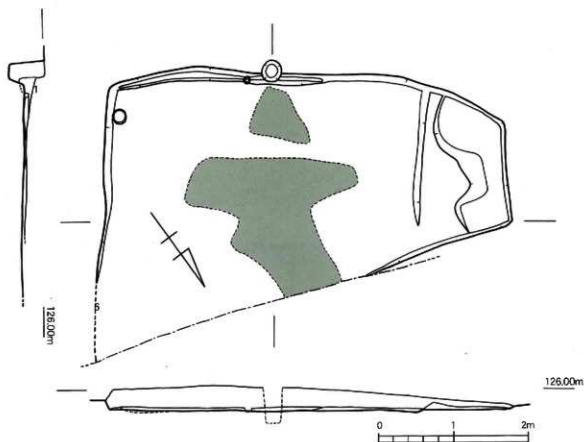
遺構は調査区中央部北寄りD・2・3区にあり、東側をSH22、西側をSI119と接し、遺構検出面の観察からSH19→SH28→SH27への切り合いを確認した。平面プランは方形で、その大半は調査区外に展開すると考えられる。確認された規模は南北1.75m×東西3.65m、その最大深は南壁側で48cmである。床面からはいくつかの柱穴と浅い土坑を検出した。



第82図 金田遺跡1次調査区SI128実測図 (1/50)



第83図 金田遺跡1次調査区SH28出土遺物実測図 (1/4)

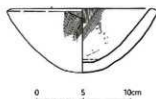


第84図 金田遺跡1次調査区SH29実測図 (1/50)

SH19とSH27との前後関係及び出土遺物より竪穴建物の時期は、弥生後期後半とみられる。

SH28出土遺物 (第83図)

1は脚付鉢、2は高環、3は鉢である。3の口径15.4cm、器高9.8cm。



第85図 金田遺跡1次調査区SH29出土遺物実測図 (1/4)

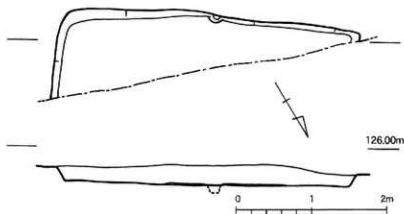
SH29 (第84図) (第3次調査区SH209)

遺構は調査区北西端のB・1区に位置し、SH120の東側にある。平面プランは方形で、その北東側半分は調査区外に展開すると考えられる。確認された規模は南北3.00m×東西5.35m、その最大深は南壁側で32cmである。床面は西側が1段高くなっている。中央部には境上が広がっていた。

出土遺物が少なく、遺構の構築時期については断定できないが、第3次調査区において古墳時代前半に比定されている。

SH29出土遺物 (第85図)

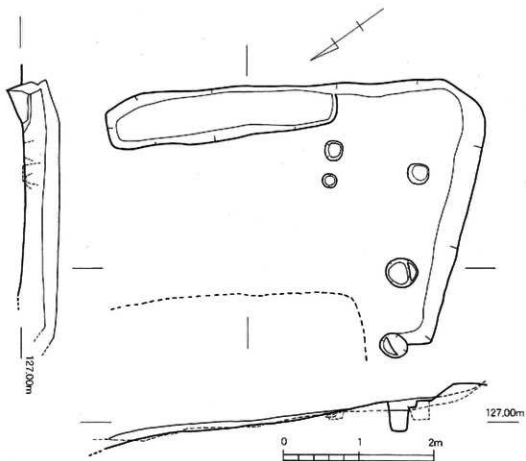
1は鉢で、口径16.0cm、器高6.7cm、内外面に刷毛目が見られる。



SH30 (第86図)

遺構は調査区北西端のB・C1区に位置し、SH129の東側にある。平面は方形プランで、その大半は調査区外に展開し、確認された規模は南

第86図 金田遺跡1次調査区SH130実測図 (1/50)



第87図 金田遺跡1次調査区SH31実測図 (1/50)

北1.15m×東西4.05m、その最大深は南壁側で23cmである。

SH29同様、出土遺物が少なく、遺構の構築時期については不明である。

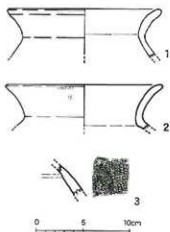
SH31 (第87図)

遺構は調査区南西寄りのC 3区に位置し、SH14の西側にある。平面は方形プランで、その北側をSH32に切られている。確認された規模は南北5.00m×東西3.40m、深さは南壁側で19cmである。

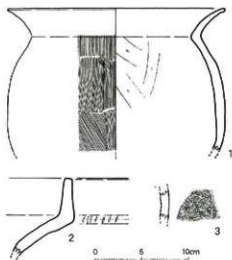
出土遺物より堅穴建物の時期は、古墳時代中期とみられる。

SH31出土遺物 (第88図)

1、2は土師器の筒形土器で、口縁部は外反する。1の口径は16.6cm、2の口径は16.2cm、3は外面に格子目叩き調整をもつ韓式系軟質土層の裏である。



第88図 金田遺跡1次調査区SH31出土遺物実測図 (1/4)



第89図 金田遺跡1次調査区
SH32出土遺物実測図 (1/4)

SH32 (第90図)

遺構は調査区南西寄りのB・C区に位置し、SH115とSH31の間にある。遺構検出面の観察からSH32からSH15、SH32からSH31への切り合いを確認した。平面は方形プランで、確認された規模は南北3.65m×東西3.25m、深さは10cm余りと浅い。床面からは浅い柱穴はいくつか確認できたが主柱穴については不明である。

SH31との前後関係及び出土遺物より竪穴建物
の時期は、SH31とさほど差のない古墳時代
前期と見られる。

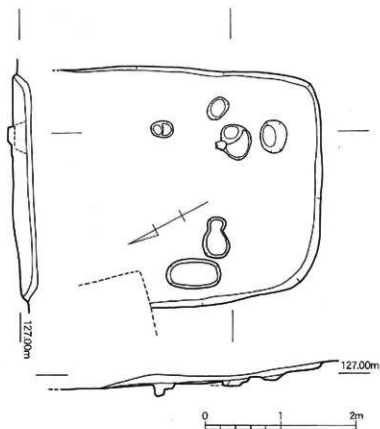
SH32出土遺物 (第89図)

1は土師器の甕形土器で、口縁部は外反し、
肩は張らない。口径は23.0cm。内面には篋ケ
ズリの後ナデ、外面は縦刷毛目を施す。外面
にはススが付着している。2は弥生時代後期の
複合口縁壺で、刻目を施す。3は韓系土器の
甕である。

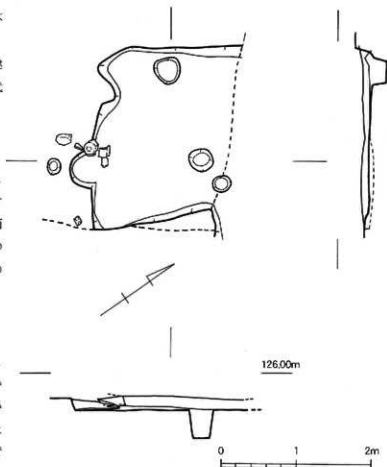
SH33 (第91図)

遺構は調査区北西端のB・C-1区に位置し、
SH30とSH34の間にある。遺構検出面の観察か
らSH33からSH30、SH33からSH34への切り合
いを確認した。平面は方形プランで、確認され
た規模は南北2.15m×東西2.35m、深さは14cm
である。床面から主柱穴1基を確認した。

出土遺物より本遺構の時期は、弥生時代後期終
末に位置づけられる。



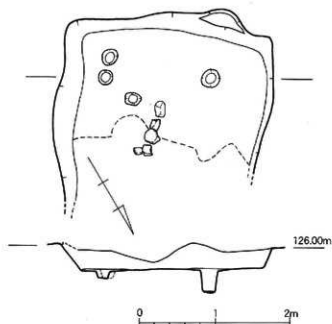
第90図 金田遺跡1次調査区SH32実測図 (1/50)



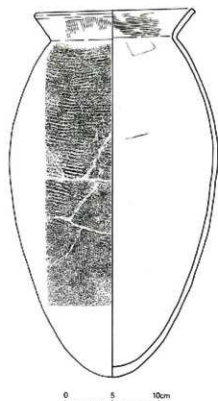
第91図 金田遺跡1次調査区SH33実測図 (1/50)

SH33出土遺物 (第93図)

1は弥生時代の梨形土器で、胴部は丸みを帯びるものの長胴気味で、底部は丸底。口径は17.2cm、器高38.5cm。外面には叩き痕がある。胴部下半外面に黒斑がみられる。



第92図 金田遺跡1次調査区SH34実測図 (1/50)

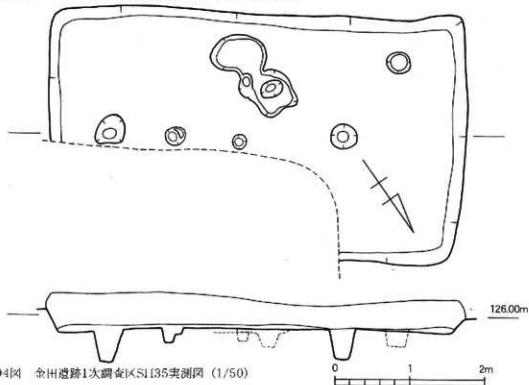


第93図 金田遺跡1次調査区
SH33出土遺物実測図 (1/4)

SH34 (第92図)

遺構は調査区南西寄りのB-1・2区に位置し、SII-18とSH 33の間にある。遺構検出面の観察からSH33・SH34→SH18への切り合いを確認した。平面は方形プランで、確認された規模は南北2.65m×東西2.80m、深さは南壁側で34cmである。床面から土柱穴1基を確認した。

出土遺物が少なく、本遺構の構築時期については不明である。



第94図 金田遺跡1次調査区SI135実測図 (1/50)

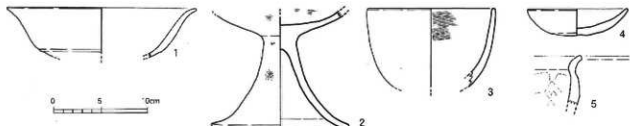
SH35 (第94図)

遺構は調査区南西寄りのC 2区に位置し、SH17とSH19と接している。遺構検出面の観察からSH19→SH35→SH17への切り合いを確認した。平面は方形プランで、確認された規模は5.65m×3.25m、深さは南壁側で41cmである。床面から主柱穴2基と南壁沿いに浅い土坑を検出した。

SH17、SH19との前後関係及び出土遺物より整穴建物の時期は、古墳時代中期前半頃とみられる。

SH35出土遺物 (第95図)

1、2は高坏、3～5は鉢である。3の口径13.6cm、4は口径5.5cm、器高2.8cm、5の鉢の内面には篋ケズリが施される。



第95図 金田遺跡1次調査区SH35出土遺物実測図 (1/4)

b. 掘立柱建物跡

SB1 (第96図)

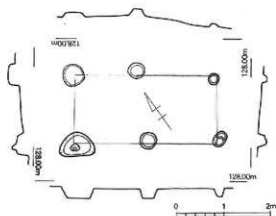
遺構は調査区中央部のD-5区にある2間×1間の建物である。平面プランは長方形で桁行は3.05m、梁間は1.44mである。

SB1出土遺物 (第97図)

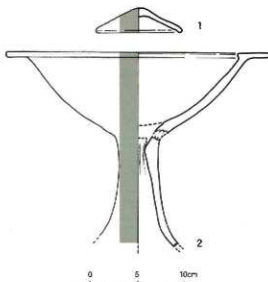
1の蓋は口径9.1cm、器高2.5cm。外面に赤色顔料が付着している。2の高坏は口径28.0cm、坏部の内外面、脚部の外面は「草なナデ」の後、赤色顔料を施している。

SB2 (第98図)

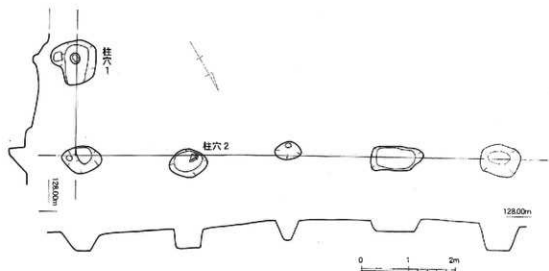
遺構は調査区南寄りのD-5、E-5・6区に位置する。建物北東側と推定される部分を確認した。それは東西方向に伸びる4間の柱穴列と南北方向に伸びる1間の柱穴列で、残存する桁行は9.04m、梁間は2.08mである。うち2基の柱穴から図示できる遺物が出土した。



第96図 金田遺跡1次調査区SB1実測図 (1/80)



第97図 金田遺跡1次調査区SB1出土遺物実測図 (1/4)



第98図 金田遺跡1次調査区SB2実測図 (1/80)

SB2出土遺物 (第100・102図)

柱穴1からは5点出土した。1、3～4は甕である。2は壺、5は器台。1は口縁部を肥厚させている。11径20.0cm、3は口縁端部を少し跳ね上げる。11径24.0cm。2の11縁部は鋤先状を呈する。5は鼓形の器台。

柱穴2からは高環が1点出土した。口縁部は鋤先状で、端部は若干下垂する。脚部はラッパ状に開く。内面に紋り痕がみられる。坏部の内外面、脚部の外面には赤色顔料を施している。

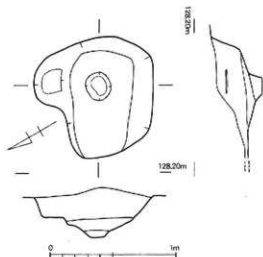
SB3 (第103図)

遺構は調査区中央部のD・E-4区に位置する3間×2間の建物である。平面プランは長方形で桁間は6.00m、梁間は4.50mである。

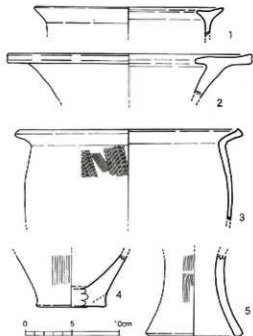
c. 溝状遺構

SD1 (第104図)

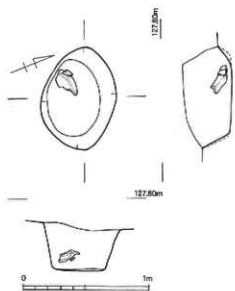
遺構は調査区南西部のE-6区に位置する長さ6.64m、幅1.60m、深さ0.2mほどの小規模なものである。遺構内からは土器細片の出土に止まり、時期を特定するに至らなかった。



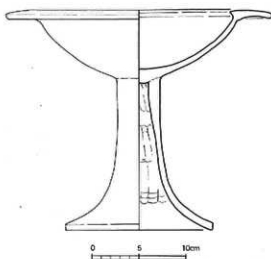
第99図 金田遺跡1次調査区SB2柱穴1実測図 (1/30)



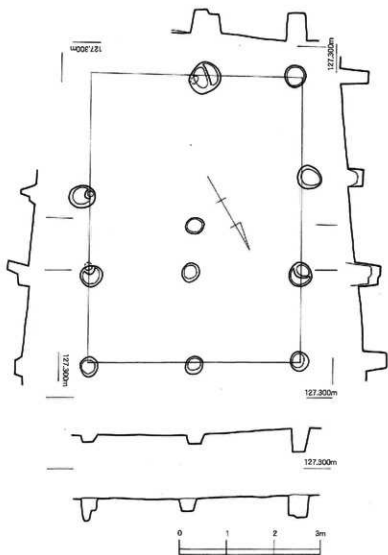
第100図 金田遺跡1次調査区SB2柱穴1出土遺物実測図 (1/4)



第101图 金田遺跡1次調査区SB2柱穴2実測図 (1/30)



第102图 金田遺跡1次調査区
SB2柱穴2出土遺物実測図 (1/4)



第103图 金田遺跡1次調査区SB3实測図 (1/80)

d. 土坑

SK1 (第106図)

遺構は調査区南西部のE-6区に位置し、SB-2の柱穴1の直上で検出した。その規模は長軸1.12m、幅0.67m、深さ0.1mである。遺構内から時期を特定できる遺物は出土していない。

SK2 (第107図)

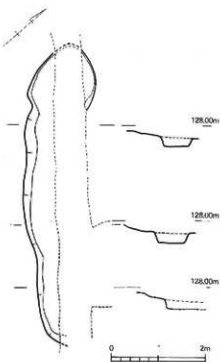
遺構は調査区南西部のE・F 6区に位置し、SH-21を切っている。平面プランは円形で、その規模は1.55m×1.30m、深さ0.1mである。

SK2出土遺物 (第105図)

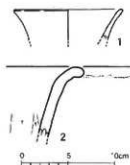
1は土師器の甕の口縁部、2は土師器の鉢形土器であるが、いずれも破片であり時期を特定できない。

SK3 (第108図)

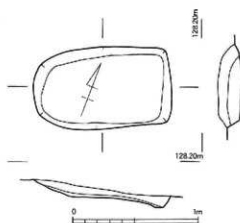
遺構は調査区西端のB-3区に位置する。平面プランは円形で2段場になる。その規模は1.10m×1.00m、深さ0.2mである。遺構内から時期を特定できる遺物は出土していない。



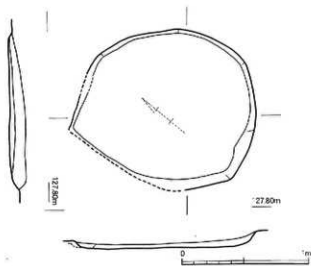
第104図 金田遺跡1次調査区
SD1実測図 (1/80)



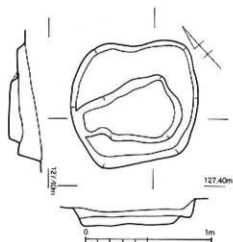
第105図 金田遺跡1次調査区
SK2出土遺物実測図 (1/4)



第106図 金田遺跡1次調査区SK1実測図 (1/30)



第107図 金田遺跡1次調査区SK2実測図 (1/30)

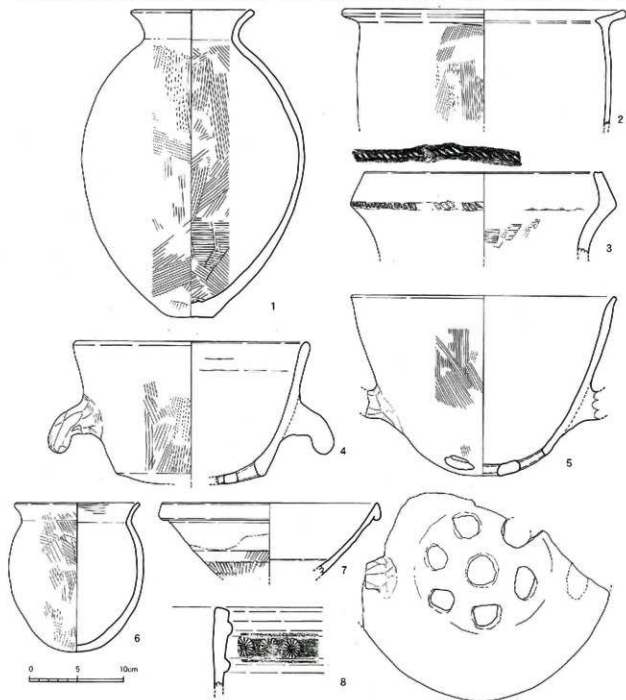


第108図 金田遺跡1次調査区SK3実測図 (1/30)

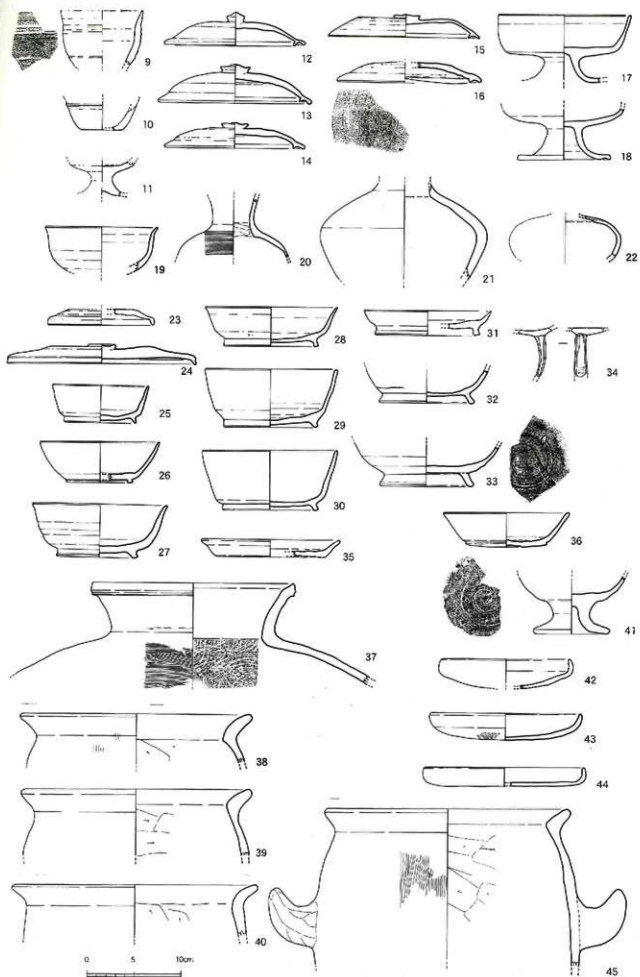
e. 各地区出土の遺物 (第109・110図)

以上の遺構及び遺物のほか、包含層や新しい時代の遺構から遺物が出土している。良好な遺物を第109～110図に図示する。

1はC-3区出土の弥生時代後期後葉の甕形土器である。底部は平底が残る。内外面とも刷毛目を施す。口径13.0cm、器高32.3cm。2はD-4区出土の弥生時代中期後半の甕形土器で、口縁部は鶏先状を呈す。3はD-4区出土の弥生時代後期後葉の複合口縁甕で、刻目を施す。4、5ともにE-3区出土の甕である。6はD-5区出土の上師器甕形土器で、内外面とも刷毛目を施す。口径13.2cm、器高14.6cm。7は口縁碗で、直線的に外傾する口縁部の先端を外側に折り曲げ玉縁を作る。軸は体部外面下位にはない。口径17.0cm。8は瓦質の火鉢。9、10、19は須恵器碗である。9はC-3区出土で、底体部は丸く湾曲して上外方に伸び、口縁部は直立し、端部は細く仕上げている。外面に3条の凸帯下に波状文が施されている。陶色のTK47形式にあたる。19はD-4区出土。11、17、18、



第109図 金山遺跡1次調査区出土遺物実測図 (1/4)



第110図 金田遺跡1次調査区出土遺物実測図 (1/4)

41は須恵器の高坏。11はE-4区出土、17はD-4区出土、口径は14.0cm。18もD-4区出土、41はE-4区出土。20～22は須恵器甕で、20・21はD-4区出土、22はE-5区出土。12～16、23・24は須恵器壺坏で、12はE-5区出土、口径14.9cm、器高3.6cm。13はE-4区出土、口径16.2cm、器高4.0cm。14もE-4区出土、口径14.8cm、器高2.7cm。15はD-4区出土、口径16.0cm、器高2.4cm。16はE-4区出土、口径16.2cm。23もE-4区出土、口径11.2cm。24もE-4区出土、口径20.0cm、器高2.0cm。25～33・35は須恵器壺坏で、25はE-3区出土、口径10.2cm、底径7.6cm、器高3.9cm。26はE-4区出土、口径12.6cm、底径7.0cm、器高4.3cm。27はD-4区出土、口径14.2cm、底径8.6cm、器高5.6cm。28はE-4区出土、口径14.0cm、底径10.0cm、器高4.1cm。29はD-4区出土、口径14.0cm、底径8.8cm、器高6.0cm。30はE-4区出土、口径14.3cm、底径10.0cm、器高6.2cm。31はD-4区出土、口径13.4cm、底径11.0cm、器高2.6cm。32はE-5区出土、底径10.1cm。33もE-5区出土、底径10.0cm。35はC-3区出土、口径14.6cm、底径11.4cm、器高1.8cmである。34はD-4区出土の須恵器。36・42～44は土師器坏で、36はE-4区出土、口径13.4cm、底径8.6cm、器高3.6cm。42はD-4区出土、口径13.4cm。43もD-4区出土、口径16.0cm、器高2.8cm。外面叩きあり。44もD-4区出土、口径17.0cm、器高2.0cm。37は須恵器の裏でD-4区出土、口径21.3cm。38～40は土師器甕形土器で、内面に篋ケズリがみられる。38はD-4区出土、39はD-4区出土、口径は24.4cm。40はG-4区出土である。45はD-4区出土の甎である。

第3節 まとめ

金田遺跡は、求来里川の左岸に位置し、その河岸段丘上の沖積面及び台地から派生する丘陵部には、弥生時代中期後半から古墳時代にかけて集落が営まれており、1,200m余りの調査区からは35基の竪穴遺構が検出された。それらのうち年代のわかったものでは、弥生時代中期が4基、弥生時代後期が3基、古墳時代前期が2基、古墳時代中期が18基、古墳時代後期が2基、7世紀末が1基である。以下時代にそって説明する。

弥生時代中期については、SH1、SH2、SH4、SH19の住居がある。そのうちSH1とSH19は大型円形住居でその他は方形である。両者に若干の時期差をあるとすれば、各住居跡はそれぞれ一定の空間を保ちながら営まれていたものであろう。また、掘立柱建物SB1及びSB2が同時代の遺構である。

弥生時代後期の遺構は、SH27、SH28、SH33の竪穴建物が確認されたのみであり、また古墳時代前期についてもSH29、SH32を確認したに止まっており、これらの時期の集落の中心は求来里川に近い地区にあったものと考えられる。

次に古墳時代中期であるが、大半の竪穴遺構がこの時期に集中し、集落としてのピークを迎える。いずれも方形の竪穴で、SH6、SH8、SH19、SH11、SH16、SH17、SH18、SH20、SH22ではかまどが検出されている。その方向については、SH6以外は北寄りの壁に敷設されている。内訳はSH8、SH11、SH18、SH20が北西、SH19、SH16、SH17、SH22が北東となっている。遺物においては、須恵器でなく韓式系軟質土器を使用していることから、北部九州の影響をうけ、大分県内ではいち早くかまどを採用した本集落の成り立ちに、渡来系の集団が何らかの関わりを持っていたことがわかる。

古墳時代後期の遺構は、SH113、SH122の2基があり、7世紀末の遺構としてSH12が確認されている。この後、本調査区から生活の営みは途絶えるが、奈良時代の須恵器や中世の白磁碗、火鉢等が出土しており、本遺跡内にこれらの時期の遺構が存在する可能性はあると考えられる。

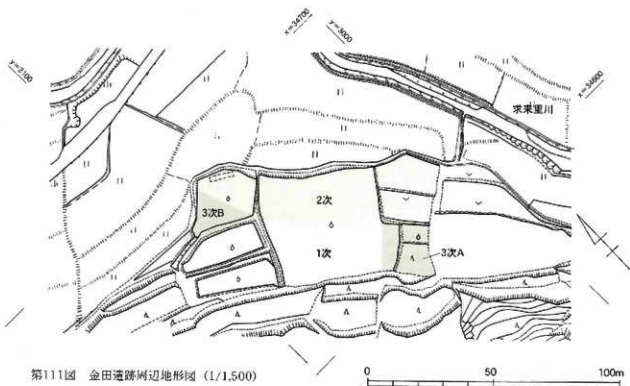
第5章 かなだ 金田遺跡3次調査区

第1節 調査の概要

位置 金田遺跡は日田市西部の山間部を流れる求来甲川流域の安定した丘陵下部の緩斜面に位置する。周辺の求来甲川流域には数カ所の弥生時代・古墳時代の集落が広がる。金田遺跡はそのひとつで、丘陵から山裾におりた小高い傾斜地に立地している。

金田遺跡の調査は2003(平成14)年度に大分県教委が第1次調査(第4章)を実施し、2004(平成15)年5月から日田市が第2次調査を行っており、今回が第3次調査となる。

本調査 2004(平成16)年5～9月の夏季に発掘調査をおこなった。第3次調査の調査区は南北2カ所にわかれ、南側をA地区、北側をB地区とした。



第111図 金田遺跡周辺地形図 (1/1,500)

第2節 遺構と遺物

A地区は丘陵から落ちる浅い谷地形にあたり、一条の溝(SD116)があるほかには遺構はなく、谷地形が自然埋没していく状態であった。その西側の小高い部分には中近世の小土坑やピットが発見され、弥生時代から古墳時代までの遺物が含まれていたが、その時期の遺構は見られなかった。

一方B地区では小面積にもかかわらず、14基の竪穴建物跡や5基以上の土坑が発見された。竪穴建物の時期は弥生時代中期から始まり、弥生時代後期末から古墳時代中期前半にかけては連続的に集落が営まれ、中世の遺物も存在する。

1) A地区(第113・114図、第1表)

A地区はかつて谷地形を利用して水田が開かれていた。水田部分の表土除去後にトレンチをいれて観察した結果、水田は近世後半以後の開発で、それ以前は自然堆積の谷であることが判明した。その水田部分から溝一条(SD116)をへだてて丘陵の南端がわかり、その上には柱穴、土坑等が散在している。遺構の年代は白磁・青磁・土師器環な

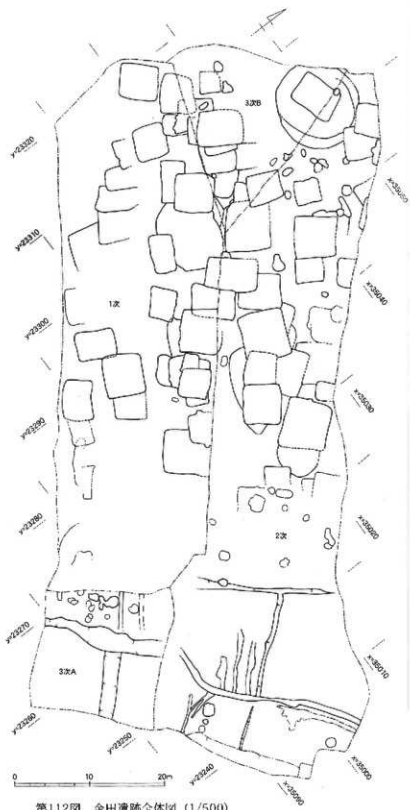
どから鎌倉時代を中心とした時期と、近世以後の二時期が考えられる。出土遺物の量が少ないため時期判定の決め手を欠くが、埋土の色調から判定できた。埋土Aは黒褐色土で炭焼土、土器片が混じる。埋土Bは暗褐色軟質土で、埋土Aよりも柔らかく近現代の遺物が入る。これに対して埋土Aからは中世の遺物が入ることがおおい。したがって第1表のように埋土Aの遺構を中世、埋土Bの遺構を近世とした。

東半分はほとんどが谷地形で、その谷地形の西端に北に向かって谷をくぐる溝SD116が存在し、その中からは弥生時代から近世の遺物が含まれていた。その東の谷部には横断トレンチをいれて谷地形の形成過程を観察したが、明確な遺構や形成過程をしめす層序は観察されなかった。

ほかの遺構は第1表のとおりで、すべて西の端に小高い地形上に集中している。いずれも小土坑あるいはピットであるが、建物等は構成しない。以下各遺構の出土遺物をのべる。

S101出土遺物 1は瓦質火鉢の口縁で、外面に2条の小さな突帯を貼り付け、その間に巴文の刻印を押している。16世紀の遺物である。

SD116下部出土遺物 2は弥生時代中期の差形土器である。つまみの復元径は6.5cm、外面はハケ、内面はナデ調整で仕上げ。3は復元口径27.0cmの弥生時代中期の甕である。口縁部を上方につまみ出す。外面はタテハケで仕上げる。4も同じ復元口径30.2cmの弥生時代中期の甕。5は2と3にくらべてつくりが複雑な復元口径30.0cmの弥生時代中期の甕。端部のつまみ上げが弱く、内面の仕上げも指圧痕が残る。6は弥生時代中期の甕の底部で復元底径18.0cm。7は同じく中期の甕底部で、浅い上げ底である。復元底径は7.0cm。8は同じく中期の甕底部。6と異なり内面にハケが観察される。復元底径6.5cm。外面は赤く変色し



第112図 金田遺跡全体図 (1/500)

第1表 金田遺跡A地区遺構一覧表

(山田市資料提供)

遺構	目録	時期	構造遺構の種類	切り取り関係	出土遺物	説明
S101	1A	近世	火鉢	S117を切り、S116に切られる。	土師1条	S117の下の層に。
S102	1B	近世	土坑	---	土師片あり	---
S103	1C	近世	土坑	S112を切る。	土師質土師片1点	---
S104	2	弥生	差形土器	---	---	---
S105	3	弥生	甕	---	---	---
S106	4	弥生	甕	---	---	---
S107	5	弥生	甕	---	---	---
S108	6	弥生	甕	S106・107・118を切る。	土師片あり	---
S109	7	弥生	甕	S117を切る。	土師片あり	---
S110	8	弥生	甕	S108に切られる。	---	---
S111	9	弥生	甕	---	甕底の底縁のみ	跡のみの残り、其他は削ぐ。
S112	10	弥生	土坑	---	土師片あり	---
S113	11	弥生	土坑	---	土師片あり	---
S114	12	弥生	土坑	---	---	---
S115	13	弥生	土坑	---	---	---
S116	14	弥生	土坑	---	---	---
S117	15	弥生	土坑	S101・102に切られる。	土師質土師片1点	---
S118	16	弥生	土坑	S106・108に切られる。	土師質土師片	陶器1点あり。
S119	17	弥生	土坑	---	---	---
S120	18	弥生	土坑	---	---	---
S121	19	弥生	土坑	---	---	---

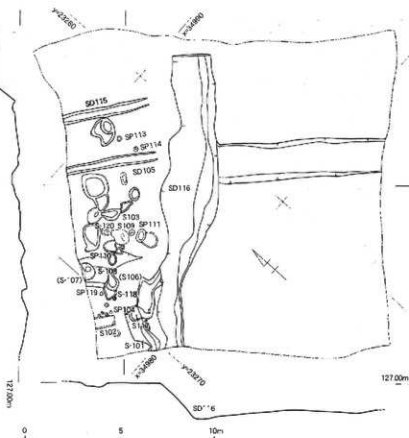
第2表 金田遺跡B地区遺構一覧表

遺構番号	名称	時期	構造・形状	切り合い関係	出土遺物	残存遺物	備考
SH201	竪穴建物跡	古墳時代中期	方形	SH202・SH203・SH204とSH212を切る。	埴土土器、土師器、瓦片	—	124・125区
SH202	竪穴建物跡	弥生時代中期	方形	SH201とSH203・SH204とSH212を切る。	弥生土器、灰土層	—	126・127区
SP203	柱穴	弥生時代中期	柱頭(径15cm)	SH202を切る。	弥生土器片あり。	—	正確な時期不明。
SH204	竪穴建物跡	弥生時代中期	方形	SH201・SH202・SH203・SH204とSH212を切る。	弥生土器。	—	128・129区
S-205	—	—	—	—	—	—	—
SH206	竪穴建物跡	弥生時代後期	方形	SH202=1本SH17を切り、SH207に切られる。	弥生土器、灰土層	—	完形の甕が壊れて中土、130・131区
SH207	竪穴建物跡	古墳時代前期	方形、柱穴	SH206を切り、SH214に切られる。	土師器、粘土塊	—	130・132区
SK208	小土坑	弥生時代中期	長円形	SH212に切られる。	弥生土器片あり。	—	151・152区
SH209	竪穴建物跡	古墳時代前期	方形、柱穴	(=1次SH129)	土師器、灰土層	—	完形土師器片あり 133・134区
SH210	竪穴建物跡	古墳時代中期	小型方形、かまど2回	—	埴土系土器・土師器片あり。	—	かまどを破壊している 135・136区
SP211	柱穴	弥生時代中期	柱穴、接取痕	—	弥生土器片あり。	—	153・154区
SH212	竪穴建物跡	古墳時代中期	方形、かまど2回、4本柱床下土坑(S240)	SH213とSH239を切る。	埴土系土器・土師器片あり。	—	多孔式甕 137・138・139区
SH213	竪穴建物跡	弥生時代後期	方形	SH212を切り、SH207とSH212に切られる。	弥生土器、灰土層	—	140・141区
SH214	竪穴建物跡	古墳時代中期	方形、4本柱、土坑	SH207とSH215を切る。	埴土系土器・土師器片あり。	—	142・143区
SH215	竪穴建物跡	弥生時代中期	方形	SH214に切られる。	弥生土器片あり。	—	144・145区
SK216	土坑	弥生～古墳時代	長円形	—	弥生土器片あり。	—	155区
SK217	土坑	中世	3つのピットの重層	—	青銅鏡片1点。	—	156・157区
SH218	竪穴建物跡	弥生時代中期	方形、柱穴	SH255に切られる。	弥生土器片あり。	—	146・147区
SP219	ピット	中世	黒色土の単層	—	白磁片あり。	—	—
SP220	ピット	—	黒色土の単層	SH215を切る。	—	—	—
SP221	ピット	中世	A層	—	土器片あり。	—	—
SP222	ピット	中世	A層	—	—	—	—
SP223	ピット	中世	A層	—	—	—	—
SP224	ピット	—	黒色土の単層	—	—	—	—
SP225	ピット	—	黒色土の単層	—	—	—	—
SK226	土坑	—	B層	—	—	—	158区
SP227	ピット	—	黒色土の単層	—	—	—	—
SP228	ピット	—	黒色土の単層	—	土器片あり。	—	—
SP229	ピット	—	—	—	—	—	—
SP230	ピット	—	—	—	—	—	—
SP231	ピット	—	—	—	—	—	—
SP232	ピット	—	—	—	—	—	—
SP233	ピット	—	—	—	—	—	—
SK234	土坑	—	単層・暗褐色土	SH212に切られる。	—	—	—
SP235	ピット	—	—	SH213を切る。	—	—	—
SP236	ピット	—	—	—	—	—	—
SP237	ピット	—	—	—	—	—	—
SP238	ピット	—	—	—	—	—	—
SH239	竪穴建物跡	古墳時代前期	方形、柱穴	SH213をきり、SH212に切られる。	土師器片。	—	148・149区
S-240	→SH212の床下土坑	—	—	—	—	—	—
SP241	ピット	—	—	—	—	—	—
SP242	→SP253	—	—	—	—	—	—
SP243	ピット	—	—	SH212/213/239の床下より検出。	—	—	—
SP244	ピット	—	—	SH212/213/239の床下より検出。	—	—	—
SP245	ピット	—	—	SH212/213/239の床下より検出。	—	—	—
SP246	ピット	—	—	SH212/213/239の床下より検出。	—	—	—
SP247	ピット	—	—	SH212/213/239の床下より検出。	—	—	—
SP248	ピット	—	—	SH212/213/239の床下より検出。	—	—	—
SP249	ピット	—	—	—	—	—	—
SP250	ピット	—	—	—	—	—	—
SP251	ピット	—	—	—	—	—	—
SP252	ピット	—	—	—	—	—	—
SP253	ピット	—	—	—	—	—	—
SH254	ピット	—	—	SH212/239の床下より検出。	—	—	—
SH255	竪穴建物跡	古墳時代前期	方形、2本柱、土坑	SH218を切る。	土師器片。	—	146区
SP256	ピット	—	—	—	—	—	—
SP257	ピット	—	—	—	—	—	—
SP258	ピット	—	—	—	—	—	—
SP259	ピット	—	—	—	—	—	—
SP260	柱穴	弥生時代中期	—	SH218の柱穴	—	—	—
SP261	柱穴	弥生時代中期	—	SH218の柱穴	—	—	—
SP262	柱穴	弥生時代中期	—	SH218の柱穴	—	—	—
SP263	柱穴	弥生時代中期	—	SH218の柱穴	—	—	—
SP264	柱穴	弥生時代中期	—	SH218の柱穴	—	—	—
SK265	土坑	現代	—	—	—	—	—
SK266	土坑	現代	—	—	—	—	—
SP267	ピット	弥生時代中期	—	SH218の柱穴	—	—	—
SP268	ピット	—	—	—	—	—	—

被熱している。9は口縁を外反させ
る土師器の甕。胴部内面はヘラ削り
で調整している。復元口径は19.6セ
ンチで口縁に一箇所打ち欠いたよ
うな剥離がある。古墳時代前期から中
期の土師器である。10は土師器の甕
口縁で、頸部に稜をつけず緩やかに
移行する中期以降の長胴タイプの甕
である。復元口径17.8cm、内面はヘ
ラ削りで成形する。

検出中出土遺物 11は錆連弁文を
もつ中国龍泉窯系の青磁碗。復元口
径は16.0cmある。13世紀代の製品。

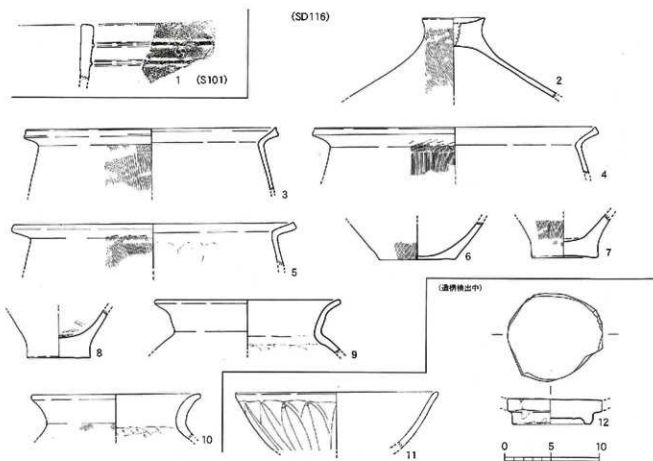
SP113出土遺物 12は口縁全周を
打ち欠いた中国龍泉窯系の青磁碗底
部。高台径は6.1cm。



第113図 金口遺跡3次調査区A地区遺構配置図 (1/200)

2) B地区(第115図・第2表)

B地区ではまず古代後半(平安時
代)頃の整地層が全体にひろがり、



第114図 金口遺跡3次調査区A地区出土遺物実測図 (1/4)

そのうえに柱穴が多い。出土遺物はA地区と同じく13～14世紀の遺物が多いので中世に集落として利用されていたことが判明する。

その整地層をはずと弥生時代から古墳時代の竪穴建物14棟や土坑数基、柱穴が多数切り合いながら発見された。いずれも方形の竪穴建物跡で、もっとも古いものは弥生時代中期、新しいものは古墳時代中期まで下る。須恵器は非常に少なく、その後の古墳時代後期6世紀代から平安時代前期までは利用されていないようである。

日田市内で最古の古墳時代中期のかまど付竪穴建物が発見されており、日田市調査の遺構にも認められる。

出土遺物としては古墳時代中期のかまど付竪穴建物の床面直上から韓式系軟質土器の甕や多孔式の甕が出土している。

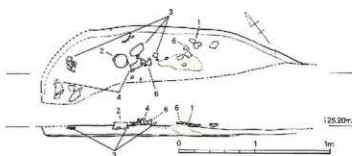


第115図 金田遺跡3次調査区B地区遺構配置図 (1/200)

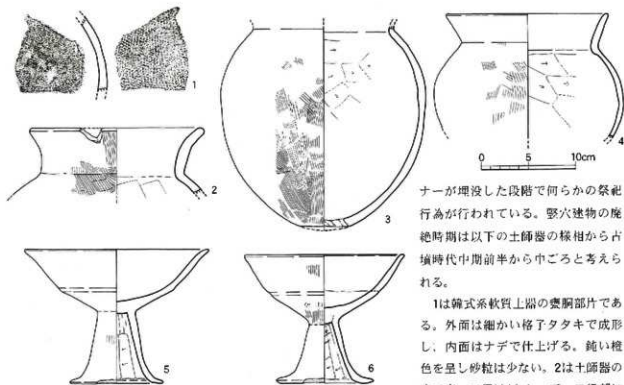
a. 竪穴建物跡

SH201(第116・117図)

竪穴建物跡SH201は第1次調査区のSH17と同遺構である。弥生時代中期の竪穴建物SH202(=1次SH119)、SH204と弥生時代後期末の竪穴建物SH213を切る。一辺5m深さ0.1mの方形竪穴建物の北側に当たる。大型の土器片や焼土がやや浮いた状態で出土している。2や3の壺、5や6の高環のように故意に打ち欠いた土師器が多く、かつこまかく割れた状態で出土しているので意図的に破砕されたものと考えられる。したがって廃絶時の祭祀行為に伴う一括廃棄と推定される。竪穴建物廃絶後コー



第116図 金田遺跡3次調査区B地区SH201実測図 (1/50)

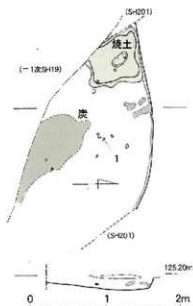


第117図 金田遺跡3次調査区B地区SH201出土遺物実測図 (1/4)

される損傷がある。外面はハケ、内面はヘラ削りで仕上げる。3は土師器の甕で口縁を失っている。胴部最大径は21.6cmで、わずかに長胴化しつつある。外面はハケ、内面はヘラ削りで仕上げる。底部は円形に焼成後の穿孔が行われている。4は口径17.1cmの土師器甕の上半部、外面はハケ、内面はヘラ削りで仕上げる。ハケ目は1cm幅に5~6条と粗い。5は土師器高杯。口径19.6cm、底径12.0cm、器高14.4cm。杯部の屈曲は鈍く、口縁は小さく外反する。脚端部は緩く張り出し、縁をもたない。脚の内面には絞り痕をヘラ削りで調整した痕跡があり、脚端部には故意の打ち欠きがある。破片のかなりの部分が、同一の竪穴建物である第1次調査区のSH117から出土したのは当然としても、その一部が切り合い関係のない別の竪穴建物であるSH212から出土しているのは興味深い。6の土師器高杯は杯の受け部と口縁部との屈曲が不明瞭で、口縁端部の取れも5と異なっているが、脚部はほぼ同じく作り、内面をヘラ削りしてあげる。口径16.3cm、底径13.4cm、器高10.2cm。成形技法は杯部-脚部連続成形で、口縁充填を施す。外面には黒炭があり、脚端部には1箇所打ち欠きがある。杯部外面に残るハケ目は1cm幅に6条と粗い。

ナーが増設した段階で何らかの祭祀行為が行われている。竪穴建物の廃絶時期は以下の土師器の様相から古墳時代中期前半から中ごろと考えられる。

1は韓式系軟質土器の甕胴部片である。外面は細かい格子タタキで成形し、内面はナデで仕上げる。鈍い橙色を呈し砂粒は少ない。2は土師器の直口壺。口径は18.4cmで、口縁部に1箇所だけ故意に打ち欠いたと推定される損傷がある。外面はハケ、内面はヘラ削りで仕上げる。3は土師器の甕で口縁を失っている。胴部最大径は21.6cmで、わずかに長胴化しつつある。外面はハケ、内面はヘラ削りで仕上げる。底部は円形に焼成後の穿孔が行われている。4は口径17.1cmの土師器甕の上半部、外面はハケ、内面はヘラ削りで仕上げる。ハケ目は1cm幅に5~6条と粗い。5は土師器高杯。口径19.6cm、底径12.0cm、器高14.4cm。杯部の屈曲は鈍く、口縁は小さく外反する。脚端部は緩く張り出し、縁をもたない。脚の内面には絞り痕をヘラ削りで調整した痕跡があり、脚端部には故意の打ち欠きがある。破片のかなりの部分が、同一の竪穴建物である第1次調査区のSH117から出土したのは当然としても、その一部が切り合い関係のない別の竪穴建物であるSH212から出土しているのは興味深い。6の土師器高杯は杯の受け部と口縁部との屈曲が不明瞭で、口縁端部の取れも5と異なっているが、脚部はほぼ同じく作り、内面をヘラ削りしてあげる。口径16.3cm、底径13.4cm、器高10.2cm。成形技法は杯部-脚部連続成形で、口縁充填を施す。外面には黒炭があり、脚端部には1箇所打ち欠きがある。杯部外面に残るハケ目は1cm幅に6条と粗い。



第118図 金田遺跡3次調査区B地区SH202実測図 (1/50)

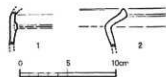
SH202(第118・119図)

竪穴建物SH202は第1次調査区のSH19と同一遺構である。径9~10m、深さ15cmにおよぶ円形の大型竪穴建物の一部である。弥生時代後期終末の竪穴建物SH205と古墳時代中期の竪穴建物SH201=1次SH17に切られる。床面から10cm以上浮いた位置に焼土と炭屑が堆積していた。出土遺物も細片化してその中に混じっていた。遺物は以下のように弥生時代中期に限られるので、その時期の竪穴建物と考えてよい。

1は外面に赤色顔料を焼き付けた弥生時代中期の須玖式の甕胴部片である。M字状の突帯がのこる。2は弥生時代中期の跳ね上げ口縁の甕口縁片。

SH204 (第120・121図)

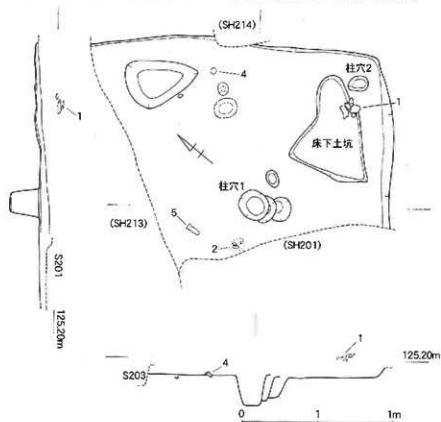
弥生時代中期の方形竪穴遺構で、3.6×2.9m以上の規模である。古墳時代中期の竪穴建物



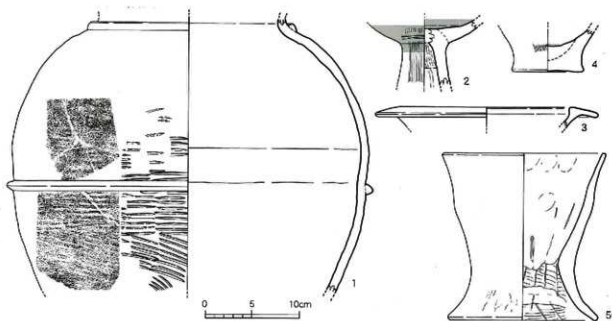
第119図 金田遺跡3次調査区B地区SH202出土遺物実測図 (1/4)

SH201=1次SH17とSH213、SH214に切られる。床面には厚さ2~5cm程度の地山ブロックを利用した貼床が認められ、その面に柱穴が認められる。2本柱と推定されるが、弥生中期の方形竪穴遺構には柱穴がない例も多く、確実な推定ではない。理土は1cm大の炭焼土を多く含む暗茶褐色土の単層で、その間に地山ブロックの堆積があり埋め戻された可能性がある。土器はいずれも大型の破片のまま廃棄されている。

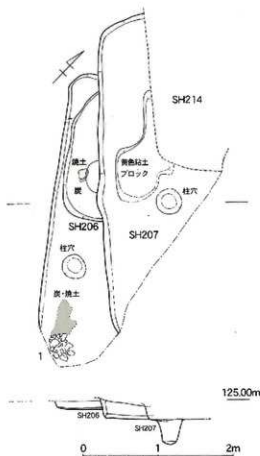
1は比較的大型の葦の胴部片である。胴部径で20cmほど、胴部径で37.5cmを測る。胴部はタタキ成形で横方向の並行タタキ痕が残る。突帯は貼り付けだが、鈍い。破片の一部はSH214からも出土している。2は弥生時代中期須玖式の高坏である。坏部内面には赤色顔料が焼き付けられ、ヘラミガキで仕上げられる。外面はタテハケで脚部の一部まで赤色顔料が及び、3はおなじく中期の鋤先状口縁の高坏口縁部で復元口径は23.6cm、黒斑がのこる。4は弥生時代中期前半の甕の底部片、底面やや上げ底である。復元底径7.6cm。5は弥生時代中期の器片である。口径17.2cm、底径15.8cm、器高17.6cm。内面は静止痕の残るあらひヨコハケを施した後、ナゲで消している。脚部は押し広げているため外面に亀裂がはいる。



第120図 金田遺跡3次調査K地区SH204実測図 (1/50)



第121図 金田遺跡3次調査区B地区SH204出土遺物実測図 (1/4)



第122図 金田遺跡3次調査区B地区
SH206・207実測図 (1/50)

第122図 金田遺跡3次調査区B地区
SH206・207実測図 (1/50)

SH207 (第122・124図)

古墳時代前期の方形竪穴建物で、長さ4.1m以上、幅1.7m以上、深さ0.25m。弥生時代後期終末の方形竪穴建物SH206を切り、古墳時代中期の方形竪穴建物SH214に切られる。床面上には柱穴が1箇所認められ、中央にはやや浮いて粘土の広がりが見られる。埋土は1cm大の炭焼土や土器片が多く混じる暗茶褐色粘質土の単層である。土器片は小片が散在するものである。

1は土師器の甕1縁部で、非常に薄いつくりで内面はヘラ削り、外面は細かいハケ目である。2は残留した弥生時代中期の甕口縁部、つまみ上げは鈍い。

SH209 (第125・126図)

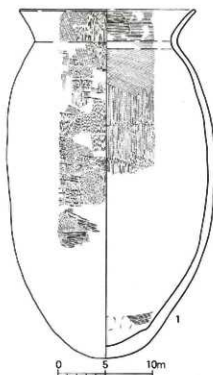
竪穴建物SH209は第1次調査区のSH129と同一遺構である。長さ5.2m、幅4.8m、深さ0.1mの方形竪穴建物の北辺部分に当たる。また内部には焼土のひろがりがあり、その焼土を除去すると炭焼土が充満した柱穴があった。竪穴建物廃絶直後に土師器が置かれる。焼土は床面近くに広がり、炭層はやや浮いて廃棄されている。焼却行為をともなう儀礼が行われたのではないかと推測される。壁面に沿うように、以下の土師器が1個体ずつ発見された。1の鉢は破片は伏せるように、2の鉢は正位で発見され、3の高杯の脚と4の小型鉢は正位で置かれたように発見されている。出土遺物からみて古墳時代前期の2本柱の竪穴建物である。

SH206 (第122・123図)

弥生時代後期終末の方形竪穴建物で、長さ3.9m以上、幅1.1m以上、深さ0.1m。弥生時代中期の円形竪穴建物SH1202=1次SH117を切り、古墳時代前期の方形竪穴遺構SH1207に切られる。底面には焼土など廃棄された上坑や柱穴が存在する。埋土は5mm大の炭焼土や3~5cm大の黄色土ブロックが混じる暗茶褐色粘質土の単層である。隅には焼土とともに完形の甕1が横倒して潰れた状態で、床面直上から出土している。この土器から竪穴建物に廃絶した時期は弥生時代後期終末と考えられ、切り合い関係とも矛盾しない。

1は弥生時代後期終末の在地の

長胴甕。底部はわずかに平底の取跡が残る。口縁と胴部の間は不明瞭で、口縁端部は丸く収める。1径18.6cm、器高36.6cm。胴部には横



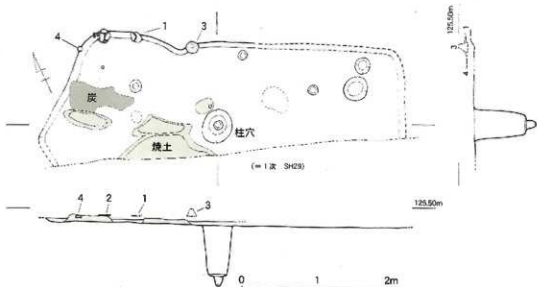
第123図 金田遺跡3次調査区B地区
SH206出土遺物実測図 (1/4)



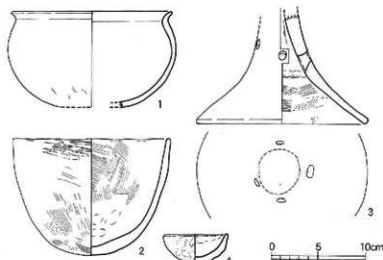
第124図 金田遺跡3次調査区B地区SH207
出土遺物実測図 (1/4)

1は土師器の鉢で、復元口径は17.0cm、器高は10cmほどと推定される浅い鉢である。口縁は小さく外に屈曲し、端部は丸くおさめる。底部外面には内側から押し出されたのか亀裂が走る。2は同じく土師器の鉢であるが、復元口径は16.6cm、器高12.2cm。口縁外面に残る痕跡から平行タタキで成形されている。内外ともハケで調整し、底部を丸底に仕上げのために

内面には指圧痕が残る。外面に黒斑あり。3は在地系の高坏脚部で緩く外反する。内面には絞り痕と指圧痕が残りハケで調整する。穿孔は不規則に高さを違えて4箇所穿孔されている。復元底径は18.0cm。4は土師器の小型の鉢である。成形は手づくねで指圧痕とナデである。完形品として出土し、口径は6.2~6.8cm、高さ3.1cmで底部は丸く仕上げている。



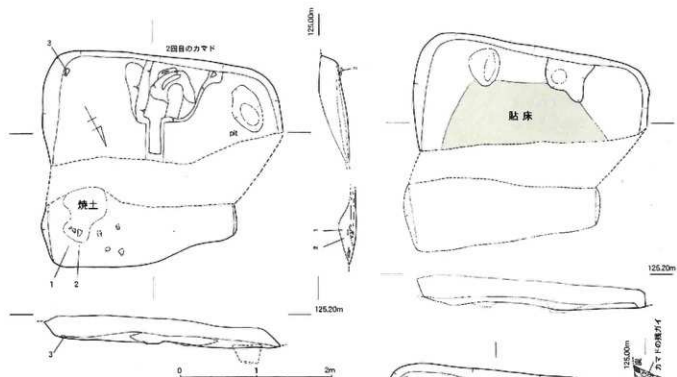
第125図 金田遺跡3次調査区B地区SH209実測図 (1/50)



SH210 (第127・128図)

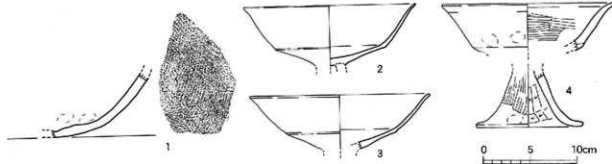
長さ2.7m以上、幅2.9m、深さ0.3m 第126図 金田遺跡3次調査区B地区SH209出土遺物実測図 (1/4)
 の方形の小型竪穴である。中央を現代の畑の溝によって削られているので確実なことはいえないが、柱穴は検出できなかった。斜面の高いほうに当たる南側に面してかまどが作られており、作り替えが1度行われている。埋没時はかまどを破壊した焼土が充填する状態であった。当初のかまどは溝状の底面と袖形の抜き取り痕と推定される2箇所のピットのみが残され、袖部と焚1部はかまどの作り替えの際に破壊されていた。北東部に焼土面が存在する。底面中央には貼床の跡があり、それをはぐとかなり深い床下土坑が掘られていた。断面図の5・6層は床下土坑の埋土で、5層は2~3cm大の褐色粘土ブロックを多く含む暗茶褐色粘質土層からなり、その上面は硬化して竪穴の床面となっている。6層は両質の粘質土だが、5層より柔らかくぼそぼそしている。暗赤褐色土の3層は1回目のかまどの破壊土を均した土層で、その上面は2回目の床面となって被熱し、下部には多量の炭片がはいっている。3・3層は1回目のかまどを破壊した土を使った床面である。1~2cm大の炭焼しを多く含む赤褐色粘土と暗褐色土の尻層である2層は、2回目のかまどの破壊された層である。暗褐色軟質土の1層は1cm以下の炭片と1~3cm大の焼土ブロックを多く含む、竪穴の覆土である。出土遺物とかまどを有するところからは、古墳時代中期中頃の遺構と推定される。

1は幹系軟質土器の覆底部片である。外面は細かい格子タタキで成形し、内面はナデで仕上げ底部内面に指圧痕がのこる。淡黄色を呈し砂粒は少ない。2は土師器高坏。脚部を失っている。口径18.0cm、薄手のつくりで坏部



第127図 金田遺跡3次調査区B地区SH210実測図 (1/50)

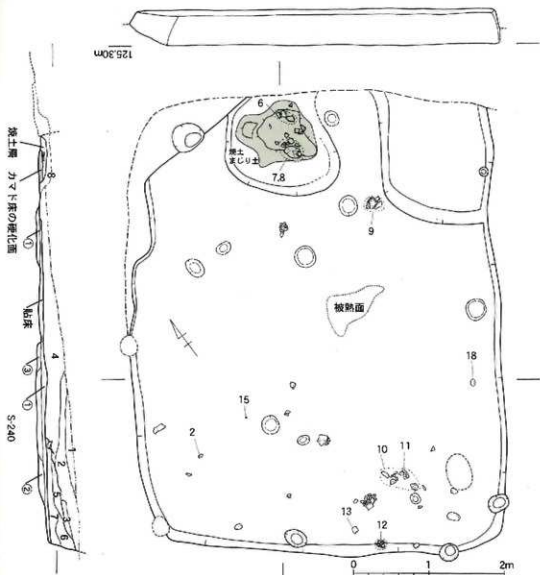
の屈曲は鈍く、口縁は小さく外反する。3は上飾器高杯の坏部。口径19.0cm、薄子のつくりで坏部の屈曲は鈍く、口縁は小さく外反する。2とよく似ている。4は厚子の土師器高杯。坏部と脚部の破片は接合しないが、胎土や焼成からみて同一個体である。復元口径18.0cm、復元底径10.3cm、坏部の屈曲ははっきりし、口縁は小さく外反する。脚端部は緩く張り出し、稜をもたない。脚の内面にはヘラ削りで調整した痕跡がある。内外ともハケが残る。胎土には砂粒が多く、二次的な被熱の痕跡もある。



第128図 金田遺跡3次調査区B地区SH210出土遺物実測図 (1/4)

SH212(第129~131図)

SH212は弥生時代後期末の竪穴建物跡SH213と古墳時代前期の竪穴建物跡SH239を切る古墳時代中期の方形竪穴建物である。明確ではないが4本柱で、北側にかまどがあり、1度作り直されている。2度目のかまどは廃絶時に破壊されたらしく油の痕跡を残さず、6の甌の底部が残され、それにかぶるように焼土が堆積していた。しかしその後は埋め戻された痕跡はなく、放棄されたまま埋没したようである。かまどの手前には9の高杯の坏部分のみが完形のまま正位で置かれたまま倒れていた。また中央に被熱面が存在した。S240はSH212の貼床を除去した後

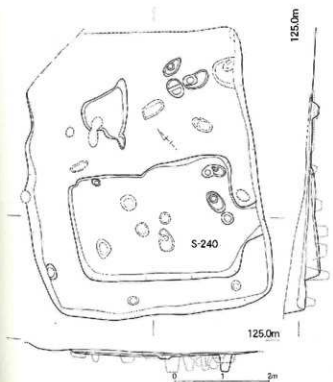


第129図 金田遺跡3次調査区B地区SI1212実測図 (1/50)

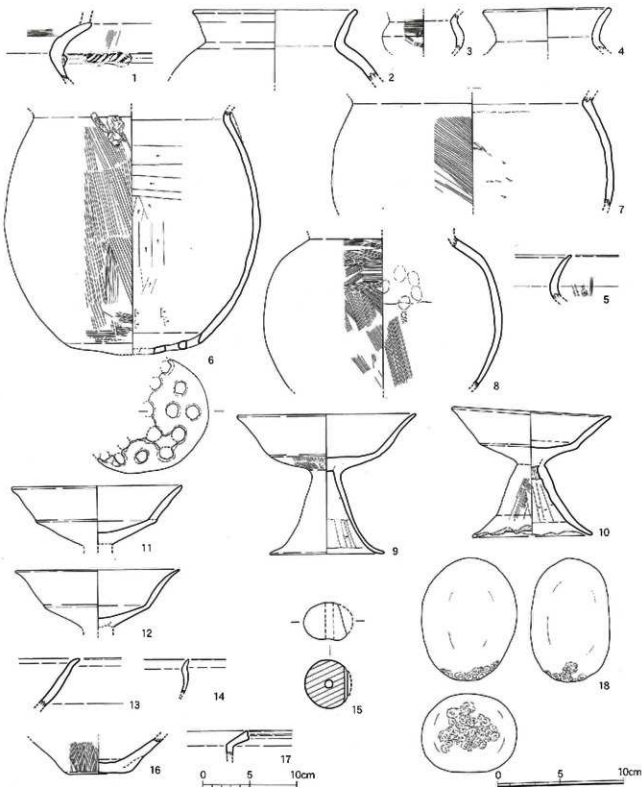
で発見したため、別の遺構と考えたが、断面土層の検討から竪穴建物SI1212を建築する際にほられた床下土坑と判断した。長さ6.8m以上、幅4.9m、深さ0.5m。床下土坑の①層は0.5cm大の暗茶褐色軟質土で、ややなじんだ地山土である黄色ブロックが多くふくみ、②層は黄褐色粘質土ブロック層である。掘った後すぐに埋戻したもので、この堆積状態が床下土坑とした決め手である。その上に2~3cm大の黄色土ブロックを多く混じるよくなった

暗褐色粘質土層の貼床が、一面に厚さ3~5cmの厚さで広がっていた。その上の竪穴間に斜面をなすように7層(0.5mm大の炭焼土を多く含む暗黄褐色粘質土)、6層(炭焼土を多く含む暗褐色軟質土)、5層(1cm大のなじんだ地山土ブロックや炭焼土が多くやや硬い暗黄褐色土)は竪穴廃絶直後の人為的埋戻し土と推定され、竪穴建物廃棄に伴う祭祀行為に使われた土器の多くは、この層群の上面にまともって廃棄されていた。その上の4層以上の土層はその後の覆土である。8層は4層に焼土が多く含まれる層である。出土した高坏の破片はSI1211の5と接合したので、SI1201と同時並存したか、非常に近い時期に廃絶したものと考えられる。時期はかまどを有すること、土師器から、古墳時代中期中頃と推定される。

1は在地系の土師器の壺である。複合口縁の継ぎ足しの口縁が剥離している。頸部には刻み日突帯が施されている。2は土師器直口壺の口縁部で、復元口径17.4cm。口縁端部はやや外反し、内面はナデで仕上げられる。3は小型の土師器壺の胴部片で、復元最大径は8.6cm。外面には1cmあたり9本の条線のハケがのこる。4は同じく土師器の壺の口縁で復元口



第130図 金田遺跡3次調査区B地区SI1212床下実測図 (1/80)



第131図 金田遺跡3次調査区B地区SH212出土遺物実測図 (1/4, 15・18のみ1/3)

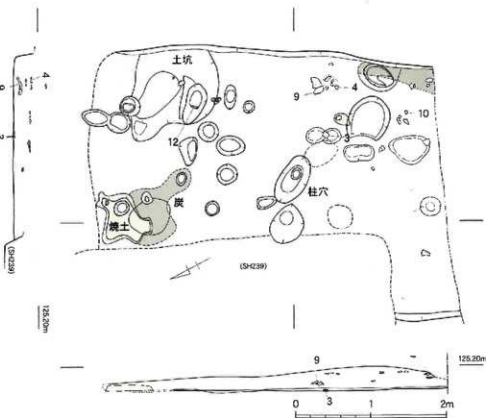
径は13.6cmと小型。5は同じく裏の口縁で、先端が尖るように細くなる。6はかまどの周辺で見つかった土師器の甕であるが、11縁を失っている。頸部の1箇所に把手跡らしい粘土の付着が残る。底部に11穴以上の穿孔を施す本来20穴ほどであったと推定される。土師器の裏を覆ったような土器で、日本への伝来初期の形態である。復元頸部径は20.5cm、胴部最大径27.1cm、底部径約15cm。外面は1cm幅に5本の条線のハケ、内面はナデ仕上げ。底部の穿孔は外側から内面に向けて空けられたものである。7は球形胴の土師器の裏胴部片、胎土に砂粒が多く、外面は斜めハケ、内面は接合痕を残すナデ仕上げ。胴部最大径の復元値は約30cm。8は同じく土師器甕の胴部片で、復元頸部径は15.4cm、胴部最大径は25.1cm。内外ともハケ調整されているが、内面の上半には接合痕と指印痕が

残る。ハケは1cm当たり6条の条線がつく。内外ともに煤が付着している。9は土師器高坏。坏部は床面直上で発見された。口径18.8cm。復元底径12.0cm。器高14.6cm。坏部の屈曲は鈍く、口縁は小さく外反する。脚端部は緩く張り出し、稜は不明瞭である。脚の内面にはナデをヘラ削りで調整した痕跡があり、円盤充填である。破片の一部分は、1次調査区のSH17から出土した。10は土師器高坏。復元口径16.8cm。底径12.6cm。器高12.4~13.7cm。坏部の屈曲は明瞭で、口縁は小さく外反する。脚端部は緩く張り出し、稜をもたない。脚の内面には絞り痕をヘラ削りで調整した痕跡があり、口縁と脚端部には故意の打ち欠きがある。11も土師器高坏の坏部。復元口径18.0cm。坏部の屈曲は明瞭で、口縁は小さく外反する。口縁部には故意の打ち欠きがある。砂粒の少ない精製した胎土を用いる。12は寿手の土師器高坏の坏部。復元口径17.6cm。坏部の屈曲は明瞭で、口縁は小さく外反する。口縁部には故意の打ち欠きがある。13は土師器高坏の坏部。口縁は小さく外反する。14は土師器の小形鉢の破片、端部を外反させる。15は土師製の円形の土師。一部損傷しているが中央に穿孔がある。高さ2.9cm。径3.8cm。重さ35.4g。16は残留した弥生時代中期の壺の底部片。底径は7.0cm。外面はハケ調整で黒炭が残る。17も同じく残留した弥生時代中期の壺口縁。18は角閃石安山岩製の敲石で、一箇所に敲打痕が集中する。長さ9.6cm。幅7.6cm。厚さ6.2cm。重さ617g。

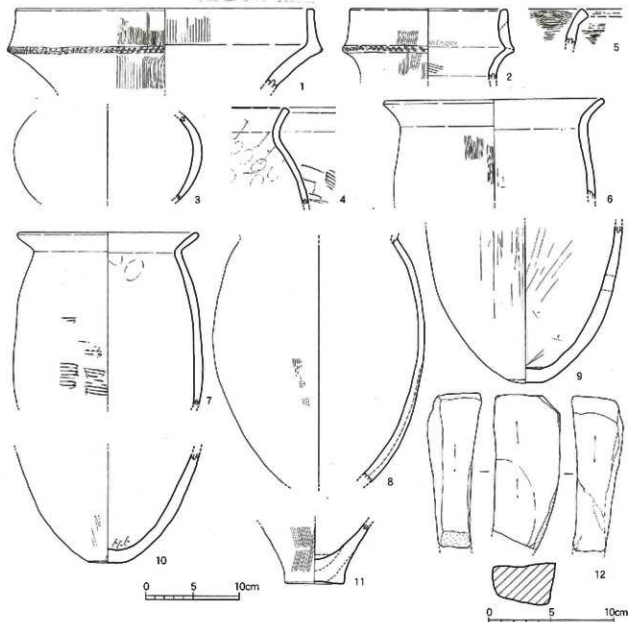
SH213(第132・133図)

SH213は、弥生時代中期の方形竪穴建物SH204を切り、古墳時代の竪穴建物SH239とSH212に切られる弥生時代後期末の竪穴建物である。北側の壁は確認できなかったが、黄色土ブロックを厚さ2~3cmに敷き詰めた貼床の残り貝台や焼土の範囲から推定した。中央やや北よりに地床炉の痕跡の焼けた面と壁際に土坑がある。竪穴内には炭焼土がまるとまって廃棄されていたほかに、竪穴の隅に土器が集中して廃棄されているところがある。長さ4.7m以上、幅3.5m、深さ0.3m。柱穴の配置は明確ではない。

1は弥生時代後期末とされる複合口縁壺の口縁部。復元口径は31.6cm。屈曲部外面にハケ工具による刻み目を施す。2も同様に複合口縁壺の口縁部であるが、1に比べた小型で、復元口径は16.6cm。やはり屈曲部外面にハケ工具による刻み目を施す。3は小型壺の胴部片。復元された胴部最大径は、19.8cm。4は後期末の甕である。長胴の在り地形である。屈曲部の稜は明瞭ではない。胴部外面は平行タタキをナデ消し、内面には指圧痕の上に工具によるナデが施されている。5も在地系の壺の口縁部で外面には口縁部近くまで平行タタキの痕跡が残り、内面は粗いハケで調整する。6も同じく在地系の長胴壺の口縁部。復元口径は23.4cm。緩く外反する外面はタテハケ。内面はナデで仕上げられる。7は同じく在地系の長胴壺の上半だが、口縁はくの字形に屈曲し、端部は丸く収めている。復元口径は18.8cm。胴部最大径



第132図 金田遺跡3次調査区B地区SH213実測図 (1/50)



第133図 金田遺跡3次調査区B地区SH213出土遺物実測図 (1/4, 12のみ1/3)

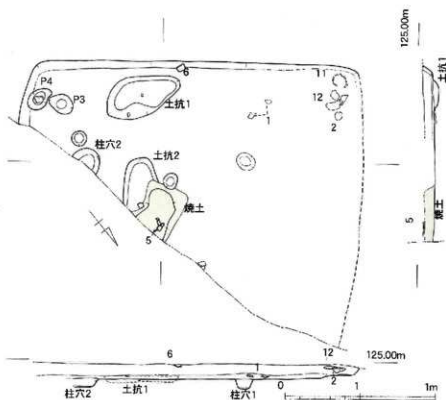
20.0cm、外面には粗い平行タキの痕跡が横方向に残り、内面はナデで仕上げている。8は同じく甕の胴部、外面は粗いハケメ、内面はナデで仕上げている。9は後期末の甕の下半。底部の径4cmほどの範囲がやや平底風に成形されている。胴部の外面は縦方向の工具ナデ、内面はナデ仕上げ。外面に黒斑がある。10も同じく終末の在地系の甕下半、底部の径4.1cmほどの範囲がやや平底風に成形されている。11は残留した弥生時代前期から中期の甕底部、底径は6.4cmで、やや上げ底きみ。底部に黒斑あり。12は泥岩製の砥石、長さ12.1cm、幅5.3cm、厚さ4.2cm、重さ276g。

SH214(第134・135図)

SH214は、弥生時代中期の竪穴建物SH204と古墳時代前期の竪穴建物SH207とSH215を切って作られた方形の竪穴建物である。長さ4.6m、幅3.7m以上、深さ0.2m以上。中央に換上の集積がありそこが床土を推定されるが、北側にかまどが存在する可能性も否定できない。発見された2本の柱穴の位置から本来4本柱の竪穴建物であったと考えられる。また南壁際に土坑が掘られている。西側に廃棄された土器の集積があり、その中に1と2の餅式系軟質土器の甕も含まれていた。廃絶時に土師器を埋置する儀礼が行われている。土師器の時期から見て古墳時代中期前葉から中頃の竪穴建物である。

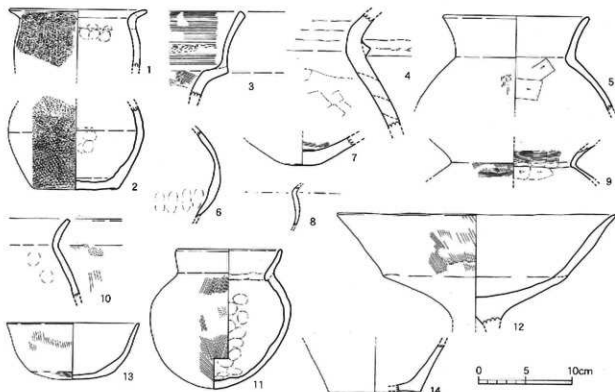
1は餅式系軟質土器の甕上半である。復元口径は14.6cm、胴部最大径の復元値も13.3cmと、胴部はふくらまず、

口縁は明瞭に外反する。外面は細かい格子タタキで成形し、内面はナデで仕上げ一部に指圧痕がのこる。淡黄色を呈し砂粒は多い。外面は赤色に変色さらに一部剥離し、内面には煤が付着しているの、激しい被熱をなされた使用のあとが観察される。2も純式系軟質土器の甕の下半である。底部は平底で復元底径は8.4~9.1cm。胴部最大径の復元値も14.7cmで、1に比べると胴部はふくらむ。外面は細かい格子タタキで成形し、内面はナデで仕上げ一部に指圧痕がのこる。淡黄色を呈し砂粒は多い。外面は赤色に変色し、内面には煤が付着しているの、激しい被熱をなされた使用の



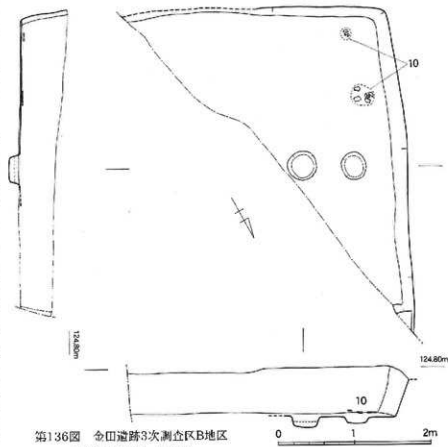
第134図 金田遺跡3次調査区B地区SH1214実測図 (1/50)

あとが観察される。1と同一胴体の可能性もあるが、接合はしなかった。3は土師器の二重口縁帯の口縁部である。屈曲は明瞭で、二次口縁はゆるやかに外反する。内面にはヨコハゲが顕著に残る。内外面とも煤が付着している。4は在地系の上脚器の頸部片である。頸部には刻み目突帯が施されている。外面は丁寧にナデ消し、内面には斜めの工具痕が残る。5は口縁をゆるく外反させる底口の土師器の甕。胴部内面はヘラ削りで調整している。復元口

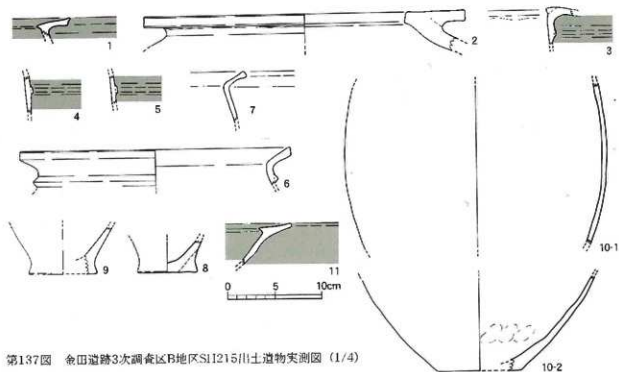


第135図 金田遺跡3次調査区B地区SH214出土遺物実測図 (1/4)

径は15.4cm。古墳時代前期から中期の上師器である。6は壺と思われる土師器の胴部片で、球形をなす。上部は赤変し下部には煤が付着している。7はやや平底を残す壺の底部である。内面にはハケ調整が残り、黒度がある。8は小型の壺の胴部片である。9は古墳時代前期の布留式の甕の頸部である。頸部の復元径は13.2cm。胴部内面はヘラ削り、肩部外面にはココハケが施されている。10は在地系の甕口縁部で、胴部内面は指圧痕をのこすナデ調整。11は土師器の小型甕。ややゆがんだ球形胴である。胴部に口縁部を接合した際の痕跡が明瞭で、本来内面に施されるヘラ削り調整を省略したといえる状態である。内面は指圧痕とナデで凸凹しており、外面はハケ調整で器壁も厚い。口径11.2cm。器高14.7cm。一部が後世の削平で失われているが、完形のまま廃棄されたと推定される状態で発見されている。内外とも煤が付着している。12は大型の土師器高坏である。坏部のみ出土した。口径は29.4cm。連続成形で円盤充填の跡が見られる。中期後半に多い高坏の大型品の1例である。13は土師器の鉢である。復元口径14.0cm。器高5.9cm。厚手である。胎土には砂粒の少ない精製粘土を用いている。内面は丁寧なナデ調整で、外面はハケを残す。14は残留した弥生時代中期の甕あるいは甕の底部片で、復元口径は8.6cm。外面に赤変の跡があり、被熱したものと認められる。



第136図 金田道跡3次調査区B地区
SH215実測図 (1/50)



第137図 金田道跡3次調査区B地区SH215出土遺物実測図 (1/4)

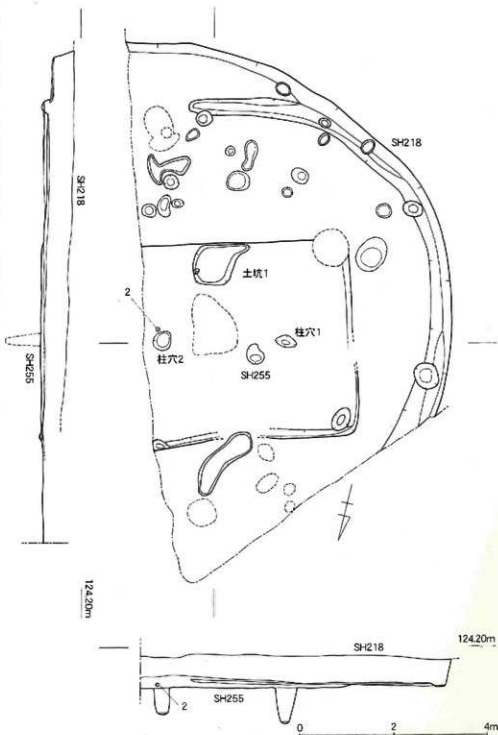
SH215(第136・137図)

古墳時代中期の竪穴建物SH214に切られた方形の竪穴遺構で、大半は日田市教委調査の第2次調査区に残されている。長さ4.6m、幅3.6m以上、深さ0.7m、弥生時代中期の遺構である。床面には明確な柱穴は存在せず、床面に10の弥生時代中期の垂あるいは甕の胴部がまがもって廃棄されている。この土器から時期を推定した。そのほかの遺物は覆土中に混ざりこんだ破片である。

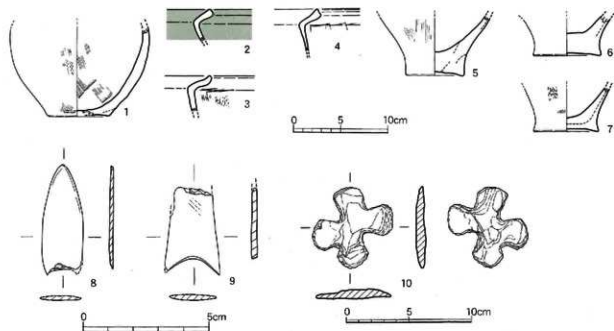
1は弥生時代中期後半の須玖式の甕口縁部で、鋤先状を呈し、赤色顔料を焼き付けている。2は同じく須玖式の大甕の口縁部で、復元口径は34.0cm、3も須玖式の甕口縁部で、鋤先状を呈し、赤色顔料を焼き付けている。胴部にはM字突帯が張り付く。4と5はともに突帯のある須玖式の甕の胴部。ともに赤色顔料の塗布がある。6は口縁直下に三角突帯を貼り付ける弥生時代中期の甕の口縁部。復元口径は28.6cm、7は突帯のつかないタイプの中期の甕の口縁、8は弥生時代中期の甕の底部、復元底径6.2cm、9は同じく甕底部で、復元底径7.2cm。被熱した痕跡がある。10は弥生時代中期でも末に近い型式の甕の底部、復元底径は8.9cm、胴部最大径の復元値は27.4cm。内外ともナデ調整でしあげ、底部内面近くでは指圧痕が残る。外面に被熱による赤変が観察される。11は同じく中期の高坏の口縁片である。全体に赤色顔料を焼き付けている。

SH218 (第138・139図)

古墳時代の竪穴建物SH255に切られる弥生時代中期の径10mを超える大型円形竪穴建物である。深さ0.9mで周溝がめぐる。柱穴も円形に配置されている。出土遺物はいずれも覆土中に流れ込んだ様相である。その後日田市の調査によって、同一規模の円形住居跡と重複していることが判明した。

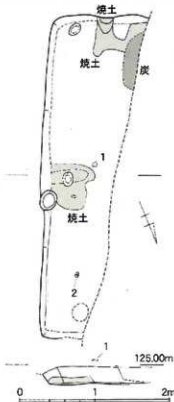


第138図 金田遺跡3次調査区B地区SI1218・SH255実測図 (1/80)



第139図 金田遺跡3次調査区B地区SI1218出土遺物実測図 (1/4, 2/3, 1/3)

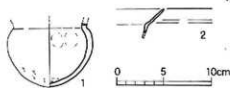
1は弥生時代中期の壺の下半である。復元底径7cm前後の平底をなし、内外ともにハケ調整がなされ、外面には黒皮がある。2は弥生時代中期の甕、端部のつまみ上げが弱く、内面の仕上げも指圧痕が残る。3も弥生時代中期の甕の口縁で、端部を内湾させる。4は同時期の跳ね上げ口縁の甕の口縁部。5~7は中期の甕底部である。いずれもやや上げ底気味で、内面はナデで仕上げ、外面はタテハケを残す。底径は5が6.0cm、6が7.0cm、7は6.8cm。8と9は結晶片岩を利用した無茎の磨製石礫である。8は完成品で、全面研磨で成形した基部を打ち欠いて調整する。長4.3cm、幅1.6cm、厚さ0.1cm、重さ2.0g。9は先端が破損しているが8と異なり基部は研磨して仕上げている。幅2.2cm、厚さ0.2cm、重さは残された部分だけで2.3g。10は結晶片岩を使用した十字形石器である。やや非対称の造形であるが、四葉とも先端は石弁状に尖らせる。長さ6.4cm、幅6.3cm、厚さ0.8cm、重さ26.7gの小型だが完成品。



第140図 金田遺跡3次調査区B地区SH239実測図 (1/50)

SH239 (第140・141図)

弥生時代後期末の竪穴建物SH213を切り、古墳時代中期の竪穴建物SI1212に切られる方形の竪穴建物である。長さ4.2m、幅1.3m以上、深さ0.3m。大半はSH212によって破壊されていたが、その床下のピットの位置から本来4本柱の建物であったと推定される。床面には2箇所の焼土の廃棄があり、土器片は埋土中に破片となって覆土に混じりこんでいる。出土遺物と切合関係から、古墳時代前期の遺構である。

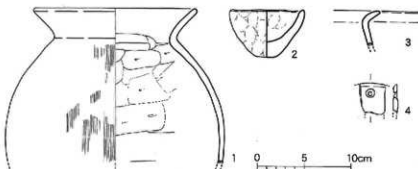


第141図 金田遺跡3次調査区B地区SH239出土遺物実測図 (1/4)

1は土師器の小型丸底壺の胴部である。復元胴部径は7.8cm、胴部最大径は9.1cm。内外ともナデ調整だが、下半には成形した際の指圧痕と亀裂がみられる。2は有段の痕跡をのこす鉢の口縁で、精良な粘土でつくり、きわめて薄手である。

SH255(第138・142図)

弥生時代中期の竪穴建物SI1218を切る2本柱の方形の小型竪穴である。長さ4.4m以上、幅4.2m、深さ0.7m。南の壁面に接して土坑がある。SI1218の床面近くになって重複が判明したため、このSH255の遺物をSI1218として取り上げた。1の上師器甕から見て古墳時代前期の遺構である。



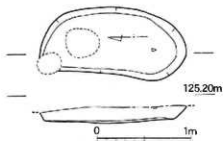
第142図 金田遺跡3次調査区B地区SH255出土遺物実測図 (1/4)

1は土師器の甕の上半、口径17.2cm、外面はタテハケ、内面はヘラ削りで仕上げ。外面に黒斑がある。2は成形で出土した手づくねの小型鉢でミニチュアである。口径7.4cm、器高5.0cm。底部には平底が残りに仕上げ。外面に黒斑がある。3は土師器の小型甕の口縁片である。4は穿孔のある器種不明の土器の破片である。穿孔は両面から施されている

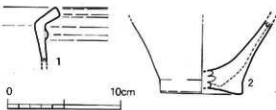
b. 土坑と柱穴

SK208 (第143・144図)

長さ1.5m、幅0.7m、深さ0.2mの長円形土坑で、古墳時代中期の遺構SI1212に切られる。遺構の性格は不明である。埋土は1~2センチ大の基盤層に由来する茶褐色土ブロック少量と5ミリ大の炭焼土を多く含む暗褐色軟質土の単層である。出土遺物はいずれも破片であるが弥生時代中期の遺物に限られるので、土坑の年代も同じ時期と推定される。



第143図 金田遺跡3次調査区B地区SK208実測図 (1/40)



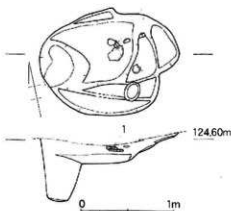
第144図 金田遺跡3次調査区B地区SK208出土遺物実測図 (1/4)

1は口縁直下に三角突帯を貼り付ける弥生時代中期の甕の口縁部。口縁突帯とも表現に説さを欠く。2は同じく中期の甕底部、復元口径7.0cm。

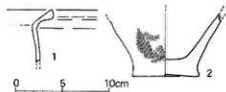
SP211 (第145・146図)

不整形の土坑のように見えるが、柱穴とその抜き取り痕である。弥生時代中期以後の遺構である。

1は抜き取り痕から出土した、上方に積み上げる弥生時代中期の甕口縁。内外ともナデで仕上げる。2は同じく甕の底部片、やや上げ底で、外面には煤が付着している。復元口径7.0cm。



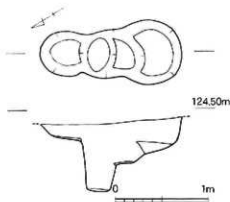
第145図 金田遺跡3次調査区B地区SP211実測図 (1/40)



第146図 金田遺跡3次調査区B地区SP211出土遺物実測図 (1/4)

SK216(第147図)

長さ1.1m、幅0.55m、深さ0.25mの長円形の土坑である。埋土は2～5センチ大の基礎層に由来する茶褐色土ブロックと5ミリ大の炭焼土を多く含む暗褐色軟質土の単層である。土器の細小片を多く含む、その土器から弥生時代から古墳時代の遺構と考えられる。

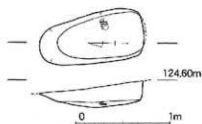


第148図 金田遺跡3次調査区B地区
SK217実測図 (1/40)

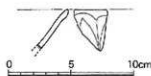
SK217 (第148・149図)

3つのピットの重複とも考えられる。埋土は暗褐色軟質土で近世のもので、礫が多く含まれる。

1は中国産龍泉窯系青磁碗の口縁片である。外面に鉛筆弁文が施されている。



第147図 金田遺跡3次調査区B地区
SK216実測図 (1/40)



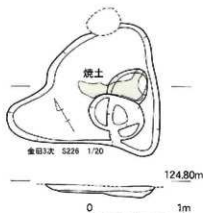
第149図 金田遺跡3次調査区B地区
SK217出土遺物実測図 (1/3)

SK226 (第150図)

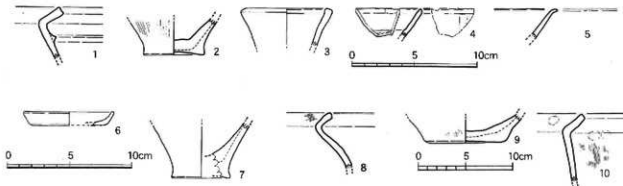
長さ1.6m、幅1.4m、深さ0.1mの不整形土坑である。埋土は1～5cm大の地山ブロックを多く含む暗黄褐色土の単層で、内部に焼土の堆積がある。

c. ピット出土遺物 (第151図)

1～3は柱穴SP203から出土した弥生時代中期の上層。1は口縁直下に三角突帯を貼り付ける甕の口縁部。2は甕の底部片、やや上げ底。復元底径6.2cm。3は器台で復元口径8.4cm。4はSP219から出土した中国産青磁碗の口縁片。5はSP236から出土した中国産白磁碗の口縁部、11～13世紀の製品。6はSP237から出土した土師質土器の小皿で、復元口径は7.2cm、復元底径6.2cm、器高1.1cm、13世紀ごろと考えられる。7はSP256から出土した弥生時代中期の甕底部片、復元底径6.0cm。8はSP267から出土した弥生時代中期ないし後期の甕の口縁である。激しい被熱による表面剥離がある。9は同じくSP267から出土した弥生時代中～後期の甕の底部片、やや上げ底で復元底径は8.0cm。10はSP249から出土した弥生時代中期の甕の口縁、存地系である。



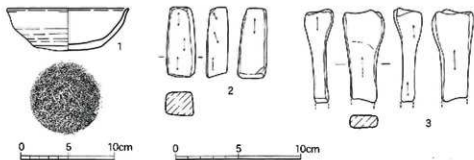
第150図 金田遺跡3次調査区B地区
SK226実測図 (1/40)



第151図 ピット出土遺物実測図 (1/4・1/3)

d. B地区出土遺物(第152図)

1は古代の土師器環。ほぼ完形で遺構検出時に出土した、造成上の下部出土。口径12.8cm、底径7.3cm、器高4.4cm。口縁端部を小さく外反させ、底面には回転ヘラきりの跡がある。9~10世紀の製品である。2と3は砥石である。2は泥岩製で、長さ5.5cm、幅2.3cm、厚さ1.8cm、重さ36.9g、3はよく使い込まれたもので、途中で折れている。流紋岩製。



第152図 金田遺跡3次調査区B地区出土遺物実測図(1/3)

第4節 まとめ

求来里金田遺跡第3次調査B地区からは、弥生時代中期から古墳時代中期に及ぶ竪穴建物や土坑などの多数の遺構が発見された。その一角ではSH202(弥生時代中期)→SI1206(弥生時代後期末)→SI1207(古墳時代前期)→SI1214(古墳時代中期)となる重複があり、少なくとも以上の4時期に遺構を時期区分できる。以下その時期区分にしたがって、まとめておきたい。

弥生時代中期 大型円形竪穴建物のSI1202とSI1218が存在した。ともに径10m前後の大型円形竪穴建物である。内部から須玖Ⅱ式の月塗り土器が出土している。その規模からみていずれも住居と考えられる。ほかに竪穴建物SI1204とSH215は一辺3~4mほどの方形竪穴で、ともに柱穴は多くとも2本で炉は確認されていないので、住居ではない可能性が高い。以上のSH202とSH204、SH215はきわめて近接しており、同時に存在したとは考えられないので、弥生時代中期の集落は一定期間継続したものと考えられる。ほかに土坑SK208、SK211と柱穴SP249が同時代の遺構である。

出土遺物のうち土器には、SI1204出土の大型甕(129図1)のように明瞭にタタキ成形の痕跡を残すものや、つくりの粗い器台など(129図5)と、鎖先状口縁の月塗りの壺・甕・高坏などからなる土器群からなっている。石器のうち磨製石鏃は、いずれも結晶片岩を利用しているが、日田盆地内には産出地はなく、筑前や豊前北部あるいは豊後からもたらされたものと推定される。

弥生時代後期末 SH206とSI1213の2棟の竪穴建物が発見され、ともに方形の遺構である。SH206は地床朽とそれと対になる壁面に接した土坑があるので、おそらく長方形2本柱の住居になるものと推定される。SH206では炭焼上の広がりとともに完形の甕(131図1)がそのまま残され、SH213でも大量の炭焼土が廃棄されている。ともに住居を廃絶する際に何らかの祭祀行為が行われているものと推定される。

古墳時代前期 この時期は後期末から遷続する時期で、SI1207、SH209、SH239、SH255の4棟の竪穴建物が発見されている。いずれも方形の竪穴であるが、全体のわかるSH255は2本柱の建物であった。SI1209とSH239のようにその位置を復元すると非常に近接する例があるので、以上の4棟も同一時期の遺構ではない。SI1209とSH239では廃絶直後に多量の焼土が廃棄されるとともに、SH239のように壁際に土師器の鉢や高坏などを並べ置いて埋めている場合があり、住居廃絶時の祭祀行為を垣間見ることができる。

古墳時代中期 日田市内におけるかまど初現期の竪穴建物群である。SH201、SI1210、SH212、SI1214の4棟からなる。いずれも方形の竪穴建物で、SI1210とSH212ではかまどが発見された。出土土師器が接合したSI1201

とSH212は同時存在と推定される。SH201（一次SH17）とSH212では晩絶時に祭祀行為があり、SH210では、かまどは嚴重に破壊され、SH214でも類似の祭祀行為がおこなわれている。SH212はSH210とはかまどの方向が異なっているが長方形の竪穴の短辺に設けられている。かまどが発見されたSH210とSH211では、ともにかまどの作り直しが行われている。それらのかまどはいずれも破壊が著しくその形態を復元することはできないが、SH210の当初のかまどに袖部に石を埋めた痕跡が存在するので、芯に石材を利用して構築されたものと推定される。なおSH201、SH212、SH214がいずれもその規模から居住用の竪穴建物と推定されるが、SH210は一辺3mに満たない小型の竪穴で柱穴もなく居住用の施設とは考えられないので、竪穴住居に敷設された世帯用のかまどとはことなる利用を想定したかまどと考えられる。

以上の4基の竪穴の使用された時期であるが、いずれの建物からも1点の須恵器が出土していないことや、韓式系軟質土器が使用され、中でもSH212出土の土師器甕の形態をよくのこした多孔式の甕やSH214出土の平底釜などから、中期でも中ごろ以前にさかのぼるものと推定される。筆者はかつて³¹これらの竪穴の時期を中期中ごろと考えたが、さらに古くさかのぼる可能性が高く、かまどの導入時期は、中期前半までさかのぼり、H田最古はいうまでもなく、大分県内では最も古いものである。

出土遺物としてはすでに触れた土師器の甕や韓式系軟質土器が注目されるとともに、共存した土師器群は、日田盆地の土師器編年のなかで、中期の指標になると思われる。

中世 SK217とSP219で、中世前期の遺物を伴う土坑や柱穴が見つかった。A地区の出土資料にも中国龍泉窯産の青磁碗が出土しており、金田遺跡に中世の集落遺構が存在するものと推定される。

以上のように金田遺跡第3次調査では大規模な集落遺跡の端を一部調査した。特に古墳時代中期の遺構が興味深く、筑後川流域の影響をうけていち早くかまどを採用した集落が、日田盆地の中心域ではなく東の小河川の流域に営まれたことが判明した。おそらくかまどと甕の採用や韓式系軟質土器の使用から見て、渡来系の集団がこの集落と大きなかわりをもっていったことが推定される。(田中裕介)

(1)―田中裕介2005「豊前・豊後地域における渡来人の受容と展開」(下配文獻)

〈参考文献〉

第8回九州前方後円墳研究会実行委員会2005「九州における渡来人の受容と展開」九州前方後円墳研究会

※報告書作製にあたり、第2次調査を行なった日田市教委および、調査担当者として杉竜太氏ほか、松浦憲治、原田昭一、藤澤香織、安部明美、上田はるみに御助力いただいた。

写 真 图 版

写真図版1 (求来里平島遺跡D区)



求来里平島遺跡D区遺景(南から)



求来里平島遺跡D区全景

写真図版 2 (求来里平島遺跡D区)



求来里平島遺跡D区SH1



求来里平島遺跡D区SH2



求来里平島遺跡D区SH3



求来里平島遺跡D区SH3カマド周辺①



求来里平島遺跡D区SH3カマド周辺②



求来里平島遺跡D区SH3カマド周辺③



求来里平島遺跡D区SH4



求来里平島遺跡D区SH5

写真図版3 (求来里平島遺跡D区・求来里名里遺跡A区1次調査区)

求来里平島遺跡D区出土遺物



第11図1



第11図2



第11図3

SI13出土遺物



第16図1



第16図3



第16図6

SH6出土遺物



求来里名里遺跡A区1次調査区遠景
(西から)



求来里名里遺跡A区1次調査区全景

写真図版4 (金田遺跡1次調査区)



金田遺跡1次調査区SH1



金田遺跡1次調査区SH4



金田遺跡1次調査区SH4



金田遺跡1次調査区SH15



金田遺跡1次調査区SH6



金田遺跡1次調査区SH8

写真図版 5 (金田遺跡 1次調査区)



金田遺跡1次調査区SH9



金田遺跡1次調査区SH10



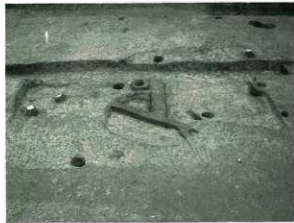
金田遺跡1次調査区SH10



金田遺跡1次調査区SH11



金田遺跡1次調査区SH17



金田遺跡1次調査区SH21

写真図版6 (金田遺跡1次調査区)



第36図1



第36図3



第37図10



第37図16



第45図1



第45図3



第45図6



第45図8



第45図11



第45図12



第45図15



第45図16



第47図3



第47図5



第47図2

金田遺跡1次調査区SH4・SH8・SH9出土遺物

写真図版 7 (金田遺跡 1次調査区)



第49図1



第49図8



第49図9



第49図10



第49図11



第50図14



第50図16



第50図17



第50図19



第50図21



第50図23



第52図1



第61図4



第63図8



第63図12

金田遺跡1次調査区SH10・SH11・SH16・SH17出土遺物

写真図版 8 (金田遺跡 1次調査区)



第65図2



第67図3



第67図6



第67図7



第69図4



第72図2



第72図3



第72図4



第74図1



第74図4



第74図5



第80図1



第93図1



第80図2



第85図

金田遺跡1次調査区SH18・SH19・SH20・SH22・SH23・SH27・SH29・SH33出土遺物

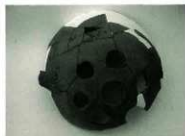
写真図版 9 (金田遺跡 1次調査区)



第102図



第109図4



第109図5



第110図9



第110図12



第110図13



第110図14



第110図15



第110図17



第110図25



第110図27



第110図28



第110図29



第110図30



第110図34

金田遺跡1次調査区SB柱穴2・調査区出土遺物

写真図版10 (金田遺跡 3次調査区B地区)

SH201
出土状況
(南から)



SH201出土状況1



SH201出土状況2

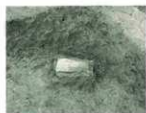
SH202出土状況
(西から)



写真図版11 (金田遺跡3次調査区B地区)



SH204 (南から)



SH204-5



SH204-1



SH206
SH207



SH206-1
出土状況

写真図版12 (金田遺跡 3次調査区B地区)

SH207



SH209



SH209出土状況

SH209完掘況



写真図版13 (金田遺跡3次調査区B地区)



SH210
当初の出土状況



SH210
2回目の
かまど検出状況



SH210 2回目のかまど時の出土状況



SH210 かまど

写真図版14 (金田遺跡3次調査区B地区)

SI1210
完掘状態



SI1212
出土状況



SH212
完掘状態





SH212 かまど出土状況
(6)

SH213
出土状況



SH213
出土状況細部

写真図版16 (金田遺跡3次調査区B地区)

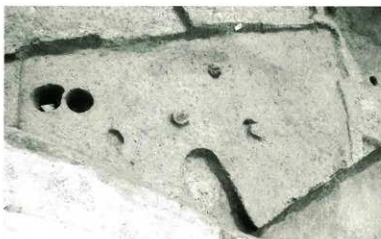


出土状況細部

SH214

上：出土状況

下：完掘状況



SH215



写真図版17 (金田遺跡3次調査区B地区)



SH239



SI1239



SI1208



SH226

写真図版18 (金田遺跡3次調査区A・B地区)



第114図1、S101



第114図11、A地区検出中



第114図12、A地区検出中



第114図2、A地区SD116



第117図1、SI1201



第117図2、SH201



第117図3、SI1201



第117図4、SH201



第117図5、SH201



第117図6、SH201



第121図1、SH204



第121図2、SH204



第121図3、SI1204

金田遺跡3次調査区A・B地区出土遺物

写真図版19 (金田遺跡3次調査区B地区)



第121図5、SH204



第123図1、SH206



第126図1、SH209



第126図3、SH209



第126図4、SH209



第126図2、SH209



第128図2、S210



第128図3、SH210



第128図1、SH210



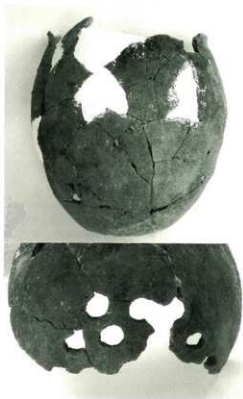
第128図4
SH210



第131図15、SH212

金田遺跡3次調査区B地区出土遺物

写真図版20 (金田遺跡3次調査区B地区)



第131図6、SH212



第133図1、SH213



第133図2、SH213



第133図7、SH213



第133図10、SH213



第135図1、SH214



第114図12、A地区検出中



第135図3、SH214



第135図4、SH214



第135図5、SH214

金田遺跡3次調査区B地区出土遺物

写真図版21 (金田遺跡3次調査区B地区)



第135図11、SH213



第135図13、SH213



第137図2、SH215



第137図6、SH215



第137図11、SH215

金田遺跡3次調査区B地区出土遺物実測図

報告書抄録

ふりがな	くくりひらしまいせきDく、くくりなごといせき、Aく1じちょうさく、かなだいせき1じちょうさく、かなだいせき3じちょうさく
書名	求来里平島遺跡D区、求来里名里遺跡、A区1次調査区、金田遺跡1次調査区、金田遺跡3次調査区
副書名	一級河川求来里川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第31集
編著者名	田中裕介・原田昭一・松本康弘
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
発行年月日	Monday, March 25, 2008

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
求来里平島遺跡D区	日田市大字求来里字平島	262	651196	33° 18' 46"	130° 58' 01"	021205~030205	500	河川改修
求来里名里遺跡 A区1次調査区	日田市大字求来里字名里	262	651262	33° 18' 30"	130° 58' 13"	060713~060811	700	河川改修
金田遺跡1次調査区	日田市大字求来里字金田	262	651244	33° 18' 56"	130° 57' 53"	031110~040310	2500	河川改修
金田遺跡3次調査区	日田市大字求来里字金田	262	651244	33° 18' 56"	130° 57' 53"	040614~040813	650	河川改修
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
求来里平島遺跡D区	集落	古墳	溝上坑 竪穴住居	須恵器・土師器・扁平打製石器 ・磨石・石鏃・縄文土器				
求来里名里遺跡 A区1次調査区	集落	古代 中世	ビット 土坑	須恵器・土師器				
金田遺跡1次調査区	集落	弥生 古墳 古代	竪穴住居 ビット	弥生土器・土師器				
金田遺跡3次調査区	集落	弥生・古墳 古代・中世	土坑 竪穴住居	弥生土器・須恵器・土師器 ・青磁・白磁・韓式土器				

一級河川求来里川河川改修工事に伴う埋蔵文化財
発掘調査報告書

求来甲平島遺跡D区、求来里名里遺跡A区1次調査区
金田遺跡1次調査区、金田遺跡3次調査区

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告 第31集

平成20年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
TEL (097)597-5675
印刷 有限会社 印刷 良 榮 堂
〒870-0954 大分市下郡中央2-8-17
TEL (097)567-3116
